
異世界の王子様

ティシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の王子様

【Zコード】

Z6011M

【作者名】

ティシー

【あらすじ】

3人兄弟の末っ子・夜月。終業式の日、突然兄から異世界行きを告げられた。異世界先で出会ったのは、青年ガクフオンスとペットのロウティス。

私は元の世界に帰れるの？

完結 番外編

キャラ紹介（前書き）

がつづりネタバレあります。初めて読まる方は上2人でいいか
と。

キャラ紹介

【深頼 みなら 夜月 やづき】 16歳 高2 160cm 黒目・黒髪

【ガクフォンス・ローヴェンド】 王子 20歳 182cm 金色の瞳・青髪(変装時:銀の瞳・黒髪) 三大宝龍角の一つ、王剣レストシェランを持つ。愛称:ガク

【深頼 みなら 滝月 たきづき】 夜月の兄 23歳 愛称:ロウ、ロウ兄

【深頼 みなら 銀月 ぎんげつ】 夜月の兄 20歳 愛称:ギン、ギン兄

【宮城 みやぎ 桜花 おうか】 夜月の親友 16歳 167cm 黒目・茶髪

【ヴァルク・ローヴェンド】 ガクの異母兄弟 28歳 185cm 金色の瞳・銀髪 ローヴェンド現国王。 三大宝龍角の一つ、死メテイム剣を持つ。

【ティルフェミナ・ローヴェンド】 ガクの姉 21歳 165cm 金色の瞳・金髪 三大宝龍角の一つ、純剣シヌスマランテを持つ。 愛称:ティル

【ロウティス】 ペット 頭はドラゴン、体は一応鳥。手あり。3
本の尾。^{ブリズム}額に結晶。変化可能。愛称・ロウ

「ローヴェンド」 広大な土地と絶対的な戦闘力を誇る大国。5国
の中心部に位置しており、ドラゴンの頭にあたる形をしている。
現国王・ヴァルク・ローヴェンド

「フュイレス」 ローヴェンドの北にある、ドラゴンの首にあたる
形をしている国。

現国王・ディゼイド・フュイレス

「シリーズ」 ローヴェンドの南にある、ドラゴンの3本の尾にあ
たる形をしている国。5国では最小。

現国王・ジエイネル・シリーズ

「リネイメル」 ローヴェンドの東にある、ドラゴンの右翼にあた
る形をしている国。

現国王・ウェヴィア・リネイメル

「グーグル」 ローヴェンドの西にある、ドラゴンの左翼にあたる
形をしている国。

現国王・ハーデウス・グーグル

ヴァージス大陸 ローヴェンド、フュイレス、シリーズ、リネ
イメル、グーグルの5国を表す超大陸。

【ヴァージス】 ドラゴン 龍神 ドラゴン系の最高神。

以下おまけ？

リンド＝ガルム
超高速竜 翼がなく、胴が長いドラゴン。戦闘系ではなく、ひたすら飛行スピードを追及した希少種。速度は・・・「もんのすごく速い」で

【グレスティーン・リンンド・クヨル・アルシェイ・ヴィジアンヌ】
雌^{メス} 愛称：グレスティーヌ

【ハイウェイド・ガルム・スイーザ・アン・グライク・ラス】 雄^{オス}

* ムダに名前が長いつて言つのは突つ込まない。付けたかったんだススイマセン。

かようじんりゅう ガーディアンズ
鳥神竜 龍神の直系に不死鳥^{フェニックス}の能力を加えた神。

【イフイス・シルテイス・ファー】 光の不死鳥の力が宿るとされるシルテイス・プリズムから生まれた光の鳥神竜。光剣＝ファーを持つ。

【ロート・クレファリナー・シャロー】 炎の不死鳥の力が宿るとされるクレファリナー・プリズムから生まれた炎の鳥神竜。炎剣＝シャローを持つ。

【ピアス・メルエノール・リヴァ】 水の不死鳥の力が宿るとされるメルエノール・プリズムから生まれた水の鳥神竜。水剣＝リヴァ

を持つ。

【ウィール・エフィズ・クライマリー】 風の不死鳥の力が宿るとされるエフィズ・プリズムから生まれた風の鳥神竜。風剣＝クライマリーを持つ。

【ゾルト・ラミュール・ブレッディ】 雷の不死鳥の力が宿るとされるラミュール・プリズムから生まれた雷の鳥神竜。雷剣＝ブレッディを持つ。

キャラ紹介（後書き）

増えていく予定です。鳥神竜は・・・ヴァージスの次に偉いドラゴン系の神々、ぐらいでいいかと。

01・理想のHAN様

「行つてきまーす！」

そう言つて元気良く家を飛び出した彼女、みゆ
やつ深頼夜月はこの春、高校2年生になつた。

ジリジリと肌を害する太陽も、生ぬるい風も、鳴り止まないセミの声も、今日の彼女には関係ない。

今日は、終業式なのだ。

「おうか 桜花、おはよーーー！」

「おはよー夜月。今日は一段と元氣だね」

「だつて明日から夏休みだよ？ テンション上がるでしょー！」

そう、明日からは夏休み。買い物したり、海へ行つたり、美味しい物食べ歩いたり！
あ～楽しみだあ。

「ねえねえ夜月、口ウさんの写メ内緒でもうれない？」

「ん~どうだろ。ってか口ウ兄はやめな。ギン兄のがまだいいよ?」

「ギンさんもカッコイイけど、やっぱ口ウさんの顔が一番! もう前に夜月の家にお邪魔した時に撮つておけば良かったあ~」

「確かに口ウ兄の顔はいいかもしないけど、あれは相当な女垂らしだよ?」

「田の保養になるからそれだけでいいの! ああ写メ欲しへ

「私は王子様の写メが欲しい」

「いやいや、十分口ウさんとギンさん王子様フェイスでしょ! ?」

「そうかな? なんか違うんだよねー」

「夜月はそんなんだから告られないんだよ! 夜月だつてしまべらなければ良く見えるし、影でモテてるのに、理想高いからみんな引くんだよ!!あの2人で満足できないなんて乙女としてどうにかしてる!! 颗沢だあ!! !」

「ああなんかヒートアップしてるよ桜花ちゃん。とりあえず落ち着いて、周りの目がイタイ。特に女子。」

「お、桜花分かつたから落ち着いて? 私が悪かった、うん」

「ホントに分かつた!? 大体夜月は「キーン」「ーンカーン」「ーン・

・
・

おお神の音ー！

「ああもつー 夜月また今度ねー！」

と黙つて自分の席に座る桜花。できればその今度は一生来ないと願いたい。

私も自分の席に座ると、少しして担任が入ってくる。1年の時も持つてもらつたが、その時よりハゲてきたと感じるのは気のせいではない。

そんな担任の話も右から左へ受け流し、じつやら話しが終わったよつで皆体育館へ向かう。

体育館での長つたらしい話しも寝てやり過いでし、いよいよ帰り。

桜花と放課後遊び、家に帰る。

「夜月、バイバーイー！ また夏休みにねーー！」

「うふー、ばいばい桜花ー！」

桜花は朝の事を忘れていたようだ。さあ私も帰ら。

「ただいま」

「おかえり、夜月。ロウも帰ってきてるし夕食にしようか

そう出迎えてくれたのはギン兄。

「うん！ 着替えてくる」

着替え終わってリビングに行くとロウ兄とギン兄が既にテーブルに座っていた。

「おう夜月、早く食うぞ」

「うん。ロウ兄今日は帰ってきたんだね」

「ああ、いい女がつかまらなかつた」

「そうですか。いい加減1人に絞つたら？」

「夜月に彼氏が出来たらな」

「う、むかつく。

食卓に座り3人で食べ始める。今日はすき焼きだ。
黙つて肉に手を伸ばしていると、見かねたのかギン兄が

「大丈夫、夜月だつていつかは彼氏作れるよ」

と微妙なフォローをしてきた。

「あのね、私は王子様を待つてるのー中途半端な彼氏なんていらないもん」

「王子様あ？ んなもん異世界へ行つてこい」

「行けるなら行つてるもん！」

「じゃあ行つてみる？」

「うんー……つて、え？」

「異世界、行きたいんでしょ？ 夏休みだしいいんじやない？」

「そーだな、夜月行つてこい」

とロウ兄が言いながら手をこちりに向ける。

え？ええ？まじで？ホントに行くの？ねえ？！

「じゃーな」「またね、夜月」

2人がそう言った瞬間、私の体は光に包まれた。

「…………」

「…………」

ああかれこれ何分だい？田の前にはなんだかとつても美形な青年。瞳はグレー、髪は黒。恐らく180を越える身長にキリつとしたまゆ、そして切れ目気味な瞳。私の中の王子様センサーがフルに活動している。しかし、その顔にどこか違和感を感じるのは何故だろうか。

まあ違和感は置いといて、この場をどう切り抜けるべきか？
いきなり青年の前に現れたであろう私、うーん不審者以外の何者でもない？

周りは・・・森？なんか雄たけびか聞こえるような・・・

と、思案していると、青年が田を細め口を開いた。

「来る」

え、何が？と考える間もなく

「ガアアアアアアアー！」

雄たけびの聞こえた方を向くと

ぐ、ま?にしてはデカイからあ!!

「おいおまえ。走つて逃げる」

と言われても体が震えて動かない。ああなんて世界にきたんだ。
なんて思考は働くのに。

「おい?・・・動けねえのか。チツ」

青年は舌打ちを一つこぼすとクマ似の生物に向かつて走り出した。

「ロウテイス、あの女を連れて行け!」

空に向かつて何か言つ。
すると

「グルウ！」

空から鳥?みたいな生物が飛んでくる。

それは途中で大きくなり（変身?）、私の上に来るところ3本の尾で私の腰をつかみ、また飛び出した。

つてムリムリムリ！

「キャアアアア」

叫ぶと

「後から追う、黙つて行け」

下は見えなかつたが声がした。

しばらくの飛行の後草むらに降ろされた。

「えつと・・・ありがとう」

「グル」

言葉が分かるらしいその子は最初に見たサイズに戻り、座った私の膝の上に乗ってきた。

顔はドラゴン、体は鳥みたいな構造なのだが、ちょろりと出た手がなんともかわいい。

「さつきの人、大丈夫かな・・・」

「ググルウ、グルル！」

大丈夫だと言つてるんだろう、自信が伝わってくる。

しばらくその子の毛を撫でて、いりきなり頭を挙げ、飛んできた方角を見つめました。

03・ガクとロウティス

「グル！」

「ああ。口ウ、良くやつた」

さつきの青年がこちらに歩いてくる。

私も立ち上がり青年に向かつて歩き出す。

青年の顔が少し驚いているように見えるのは氣のせいだろうか。

「無事か？」

「はい、ありがとうございました。あの、大丈夫ですか？」

「問題ない。俺はガク。こいつはロウティス。おまえは？」

「夜用です」

「何故あそこに居た？」

「どうするべきか。本当のことと言つべきか？」の人に助けても
らつたし悪い人には思えない。

「えつと、その私も信じられないんですけど、異世界から来たよう
で・・・」

「・・・異世界？」

「はい、日本って聞いたことがありますか？」

「いや」

「ですよね。でも確かに私はそこに住んでいたんです。さつきまで
は・・・」

「・・・分かった。宿を取つてゆづくつ話しを聞く、ロウ」

「グル」

ロウティスはまた大きくなると2人を乗せて軽々と飛ぶ。
翼を広げると全長4mくらいだろうか。

「ロウ、エルルスの入り口までだ」

「グル」

賑う街の入り口まで来ると下降し始めるロウティス。

飛行中ガクさんに、落ちないようつと腰に手を回されドキドキしたのは内緒だ。

「ここにするか。ロウ、ヤシキと待つてね」

「グル」

そう言つて入つていいくガクさん。

ちょっととして出でくると

「2部屋取れた。行くぞ」

とまた入つていいく。

私も恐る恐るついて行く。

階段を上がり、ガクさんが部屋のドアを開ける。

「まづこいつの部屋で話をしようつ。いいか?」

「はい」

部屋はシンプルな造りだった。

「さて、さつきの続きを話せるか?」

「はい。私はさつきまで家で夕食を食べていたんです」

「そ、大好きな肉を。そつこねばこつちは廻遊ぐらー?」

「で、兄2人が突然異世界へ行つて来いとか言い出して」

王子様云々の話は恥ずかしいのでパスだ。

「それで気付いたらあそこにある・・・」

ああこんな話し信じてくれるんだろうか?
自分でも信じれないのに。

くそうバカ兄貴め、可愛い妹が死んだらどうしてくれるんだ！

しばらくガクさんは目を瞑り黙っている。

ロウティスはガクさんの肩に乗り、顔はガクさんの頭に乗せて眠つていて。

ガクさんは何も言わなかつたし、あれが定位なんだろうか。
中々カワイイ光景だ。

するとガクさんが目を開き、私と目が合つ。

途端に、心臓が激しく動き出す。ああこれだから美形は困る。

「正直驚いたがウソを言つてこるとも思えない」

「じゃあ信じてくれるんですか?...」

「ああ

「あいつがどうぞりますー!...」

良かつた! あんなに安心したのかな? 泣けてきた。ナビ俯いて
グッと堪える。

「だがこれからどうするんだ?」

「うだ、それが問題だ。特にすることもなく、お金もない。この世界の知識も皆無。

俯いたまま黙つていると、上から小さな溜息が聞こえ、

「・・・つこへるか?」

神の声が聞こえた。バッと顔を上げるとガクちゃんと田が合った。

「俺こつこへるとが【安全だとは言これない。嫌なら他の策を
考えてやる。】」

嫌じやない。行きたい。ついていきたいけど、邪魔だよね。

「・・・他の策を考えるか」

私が黙っているのは、嫌だと書いてたらだとガクさんは解釈したみたいだ。違うの。

「あのつ、連れて行つて欲しいんですけど、でも、何もできないし、荷物にしかならないからつ」

また泣けてきて、そこで押し黙ると

「俺はそこまで弱くない。一人ぐらいなんともない。そうだな、じやあ・・・俺はおまえを守る。その対価におまえはロウの世話をす る。これでどうだ?」

言葉が出なくて「クククと頷く。すると頭をポンポンと軽くなられる。

「交渉成立だ。よろしくな」

頭に手を乗せられたままガクさんを見る。すると、フツとガクさんが笑った。・・・・・カツコイイ。なにその無駄なカツコイイ。良さー。

「めん桜花、ロウ兄も真つ青だよ！…

これぞ王子。

ああ、実は王子様なんです、なんてオチはないだろうか。ないか。
王子様があんな森を一人でうろつかないか。
しばらく感動に耽つていたら、

「ヤツキ？」

とガクさんが呼ぶ。いけないいけない。はつ、と我に帰り挨拶をする。

「何から今まで本当にありがとうございます。よろしくお願ひします」

「ああ。それと敬語はいらないしがくでいい」

でも多分年上だし、カッコイイし（関係ない）ちょっと難しい。

「・・・直せたら、じゃダメですか？」

「・・・好きにしN」

「ありがとうござります」

「ん

それからガクさんにこの世界のことを教えてもらつた。

まず今居る大陸は世界でもとても大きいということ。

大陸と大陸は離れており、リスクが高いため滅多に他の大陸には移動しないらしい。

そしてこのヴァージス大陸は5国で形成されており、それぞれがドラゴンの体の一部を表しているとのこと。

5国を中心となるのが、顔の部分に位置するローヴェンド。5国で最も大きく絶対的な戦闘力を誇るらしい。

顔ローヴェンドを中心北にフュイレス、南にシリー^首ス、東にリネ^{3本の尾}イメル、西にグーグル^{左翼}があり、龍神が創つたとされるこの大陸は、元々一つだという概念の下、各国とも仲が良いという。そのためどの国をいつ行き来しても問題はないそうだ。

しかし巨大魔獸^{セップドガア}が多く時々討伐に悩まされるという。

ローヴェンドは他の4国と隣接しているが、シリー^スはローヴェンドのみ、フュイレスとリネイメルの間は、途中でブディ^{ヴァージス}という街がある以外は山道で、フュイレスとグーグルの間は、途中でエルルスという街がある以外は森らしい。

今居るのはフュイレスとグーグルの間を繋ぐエルルスという街で、私がトリップして来たのは危険なモンスターも多い森の奥だつたみたいだ。

ああ改めて怨もうバカ兄貴共よ。特に滝月君^{らうづつ}。君のせいでロウティスをロウと呼びにくいじゃないか。ティスか、ティスでいいのか！？

銀月君、君が少し腹黒いことは気付いていたが、ロウ兄と手を組むなんて恐ろしい。いや、違うか。

あとこちらのこともガクさんに話した。ウチは5人家族で両親は長期海外旅行中で、兄2人がいるということ。私は学校に通つて桜花という面食いの親友がいるということ。等々。

話し込んでいた内に夕食になつていたらしい。ガクさんが下に行くぞと言つた。

下に降りて夕食（変わつた肉が出てきたけど美味しかつた。）をいただき、

今日は疲れているだらうから、もう部屋で休めと言われた。その際用心棒にロウティスを貸してくれた。

部屋に入り、ベッドにダイブするとロウティスも枕元で丸くなる。ロウティスにおやすみといふと、クルルと返つてきた。カワイイ。

あー、ガクさんと会えてよかつた。いや変な意味じゃなく。会えなかつたら今頃モンスターに襲われてエサになつていただろ。

ていうか兄貴ズは何者なんだろうか？だつていきなり異世界へ行って來い！とか言ってヒューと送れるもんぢやないでしょ？

もしかして、逝つて來い！の間違いだつたんだろうか。いやそんなハズはナイ。ロウ兄の好物のプリンを一昨日食べちゃつたのは確かに私だけど、しらばっくれたし証拠は残さなかつたハズ。

ギン兄の気に入っていた「コーヒー カップ」を一週間前に、ちょっと
手元が過つて割っちゃったのは確かに私だけど、即よく似た物を買
つてきてうまくカモフラージュしたハズ。
うん、どこにも落ち度はない！

私は帰れるんだろうか？

帰つたらとりあえず一発お見舞いせねば……

05・Iの世界（後書き）

今更ですが、なんか始めひやこました。書いてる感じドキドキします。

とりあえず完結田描してがんばるべー。
テキトーに応援よろしくお願ひします。

クルルウ・・・・・・・・・

・・・・・ ゲガルルウ！ 「うわつ。・・・んー？何？朝？」

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

「グル」

私は、
夜月。

「
グ
ル
」

この子は・・・口ウテイス。

「
グル」

ああ、異世界の初めての朝か。

「グルグー」

もつねつせからざしたのロカティス?

つてああごめん。抱き殺すところだつたか。

昨日は考へてゐる間に寝ていつたらしい。

ついでに抱き枕感覚でロウティスを引き寄せたらしご。ロウティスを解放すると窓際に飛んでいった。

「ごめんってばロウティス君。

よし今度ガクさんに好物聞いておこう。

「『めんロウティス。和解しよう』

「グルル」

「変な夢みたんだよ。（とこいりとにかく）それでちょっと力が・・・」

「グルルー」

そんなに苦しかったんだろうか。ホントに悪かったよロウティス君。

（どうやってロウティスと和解しようか悩んでいると

「ノンノンシ

と扉を叩く音がした。

「はーい」

「ヤツキ起きたか？俺だ」

ガクさん『オレだ』はダメですよ。オレオレ詐欺になっちゃいま

すよ。なんてアレは日本独特のものか。
手で軽く髪を整え扉に向かう。

「今、開けます」

ガチャヤッと扉を開けるとやつぱり今日もカツコイイガクさんが立っていた。

「ガクさん、おはようございます」

「ああ、朝食行くぞ」

「はー」

と言つた瞬間ロウティスがシユツと通つすぐる。

「グルツ」

そしてガクさんの肩に乗り私の方を見る。

「口ウ?何があったのか?」

「いやあ、ちよつとした手違いが・・・」

「まあ下で聞いづ」

「はー」

07・エルルス

朝食を取りながら昨晩あつたことを話す。

「・・・口ウ、災難だつたな」

「グル」

「ごめん」

「今度から避けることだな」

「グル」

「そうしてください」

「グル」

一応和解できたっぽい。よかつたよかつた。

「そひそろそろ行くか

「はい。どこに向かうんですか?」

「最終目的地はローヴィンドだが、特に急ぐ必要もない。まずはこの街で生活用品の調達の後、森を抜ける。それと昨日みたいにロウに乗つて移動する」ことは少ない

「やうなんですか？」

「ああ。ロウみたいなタイプは珍しいからな、皿立つ

「へえ」

と面つでロウティースを見る。ふと、「ティース」と呼んでみる。あ、ものすいへ座シテ詫ハタフうな顔した。やつぱりやめよ。

「ロウとは呼ばないのか？」

「バカ兄貴が滝用つていうんです。それでロウ兄つて呼んでたのでなんか呼びにくくて」

「そうか」

「そうなんです。

「まあいい。行くか」

「はい」

立ち上がり宿主に挨拶して、街に出た。

街は朝から賑つていて色々な所から声を掛けられる。

果物どうだいとか、兄ちゃんカツコイイねー安くするよーとか、
彼女ですか？だと、一口どりですか？だと・・・

そう！たとえロウティスを肩に乗せて、いつもロウティスと頭
が合体して、いよいよとも、ガクさんの基本的なカツコ良さは変わらな
い！滲み出る色香は変わらないのだ！

しかしそれらの声を全て無視してズンズンと歩いて行くガクさん。

街を歩いていて気付いたのは田の色や髪の色は多種多様らしい。
中々カラフルな世界だ。黒田黒髪の方がめずらしいかもしない。

横を歩くガクさんに声を掛ける。

「田や髪は色々な色なんですね」

「そうだな。両親の色を受け継がない場合もある。一ホンという所
は黒が多いのか？」

「はい。日本人は黒田黒髪が多いですね。染めたりカラー・コンタク
トで色を変えることはできますが」

「そつか。・・・あああそ」だ

「そつか。・・・あああそ」だ

「好きな服を買つていい」

「え？」

そう言つて袋を渡される。ジャラコ、と音が鳴つた。

「足りなかつたら言つに來い。外で待つ」

「ええ、そんなん・・・」

「なんだ俺も行つた方がいいのか？」

「あ、いやそうじやなくして、お金・・・いいんですか？」

「ああ金か。気にするな。行ナ」

「・・・はー。ありがとうござまわ」

「ん」

「じゃあ行つてしままわ」

そういえば今着てこるのはTシャツとジーパンとこう、桜花が見

たらこの女としてあるおじや格好だ、と黙つだりや。

店内に入ると色々な服が並んでいた。

手に持っている袋にはきっと相当なお金が入っている。

旅に適する服ってどんなのがいいんだら？

店の人聞いた方が早いかな？ そう思い奥にいる店のお姉さんに向かって声を掛ける。

「すいません」

「はーい。いらっしゃいませ」

「えっと、旅に合つた服ってどんなものがいいですか？」

「旅？ そりねえ・・・」「れはざびひへ。」

ワンピースに似たものだったが中々動きやすそうだった。
しかし・・・淡いピンク。似合つかな？

「試着してみてもいいですか？」

「ええ、いりますよ」

着てみるとサイズはぴったりであまり待たせるのも悪いと思つたのでこれに決めた。

ついでに靴も選んでもらつたが、お金が分からないとこ気付いた。

「すいません、これで足りますか？」

とりあえず入っていたお札を2枚出してみた。ら、すく驚いた顔をされたので多かつたんだと気付いた。

「一枚で十分よ。はいお釣り」

お姉さんが驚いた顔を見せたのは一瞬ですぐに笑顔で答えてくれた。

買った服と靴を身に付け、着ていた服はもらつてもらつた。

「ありがとうございましたー」

お姉さんの元気な声を聞きながら店を出た。

ガクさんは近くのベンチで座つていて私に気付くと手招きした。

近くに行くと横に座るよう促される。

相変わらずロウティスは肩だ。

「すいません、お待たせしました。あと、お金ありがとうございます」と

した

普段着ない服を着ている所為かどこなく恥ずかしい。

ガクさんがチラつと視線を寄越し、私が差し出した袋を受け取る。

「いや、次は何が欲しい?色々要るだらう。」

そこまでしてもらひにこいのだらうか。たしかに欲しい物はまだあるが・・・

「金なり返りやるなよ?そんなに困つてない」

「あ、はい・・・?こやうが引ける?」

「やうか?なら慣れ」

若干ムチャクチャな気がするがでも置つてもいわなきや他にいいしようもない。

「じやあお葉にせめて」

「ああ」

09：現れた女（前書き）

後半はガク視点。

それからリュックを買つてもうつて、食糧やら水やらを放り込んでいく。

あと、服をもつと買つたと言われて、数着服と下着を買つてもうつた。

もちろん下着は自分で選んだが服はガクさんが選んでた。結構セクシー系を選ぼうとするガクさんともうちょっと控えめがいい私とで、ちょっと対立したが無事、中間の服で和解した。

これから旅をするのにそんなに服を買つたら邪魔なんじゃ？？と思つて聞いたら、空間に消すからいいのだと、よく分からぬことを言われた。

そうそつ生理用品も下着と共に売つていたので勝手に買つてリュックに入れておいた。
だつて言いにくかつたんだもん。

その他適当にガクさんが買つていくからずつと見ていたが、買い物が終わつた頃にはガクさんの両手に袋がいっぱいだつた。（私は持たせてもらえなかつた）

近くのベンチに座つて一休みする。

「あと欲しい物はないか？」

「いえ、十分です」

「そうか。じゃあこの中から自分で持ちたいものだけ選べ。あとは消す」

消すの意味が分からなかつたが、途中で買つてもらつたお菓子とタオルをリュックに入れた。

「もういいです」

私がそう言つと、ガクさんが荷物に手をかざす。すると、フッと荷物が消えた。

「なんですか、今の？」

「ん？ ああ魔法だ」

「すごいですね」

「そうか？ ああそれとこれを付けておけ」

ガクさんから渡されたのはネットレスだった。あれ？ このダイヤ型の飾りどっかで・・・

ああ、ロウティスの額だ。

「きれいですね、これ・・・」

「口の額にあるのと同じで結晶^{プリズム}と呼ばれる物だ。どんな物より硬く、決して割れることはない」

「いいんですか？」

「ああ、お守りとして持つと」

「あのあと付けでもらい（もちろんギョーキした）ことによ街を出る。

「森を抜けるのに数日掛かる。とりあえずフコイレスに向かってそれから後のことを決める」

「はい」

「行くぞ」

そうして私達は森の中へ足を踏み入れた。

捜している巨大魔獣^{ザッコドガア}は今日も見つからず、俺とロウはこれから街へ帰る所だった。

ロウを空へ放ち、一応いないか確認させる。奴等は戦闘力が高い上に知能も高い。もうここには留まつていらないだろうが。

すると突然、俺の目の前で何かが光りだした。ソレは段々と形を帯びて人になった。

何故いきなりこんな所に現れたのか、俺は珍しく固まってしまった。

だがそれも少しの間で、モンスターが近づいてくるのを感じる。敵を見つけたら即襲い掛かる凶暴なグレストだ。比較的小さなグレストだったが、女を置いておくのはマズイ。

女に逃げろと言ったが、そういうえばここは森の奥だ。どこへ行っても危険。予想以上に俺は動搖しているようだった。
しかし女は動けないようだった。震えているのが分かる。しかたなくロウを呼ぶ。

悲鳴が聞こえたが、できれば静かに行つていただきたい。

空間から、三大宝龍角^{さんだいほうりゅうかく}の一つと言われる切れ味抜群^{レストショラン}の王剣^{ブリスム}を取り出し、グレストに向けて一発放つ。

最後に見たグレストの目には、目が金に光り青髪がなびいた額に、
結晶^{ブリスム}が浮かぶ俺が映っていた。

そのまま口ウの位置を捜し、口ウが飛んでいった方向に走る。

近くなると目と髪を銀と黒に戻し、平然と現れる。

久しぶりに驚いた気がする。口ウが女に寄り添っていたのだ。口ウは警戒心が高く懐くのには時間がかかる。

口ウが飛んできた後女も走ってくる。

名前はヤツキと言つらじい。

宿に向かい話しを聞くとどうも本当に異世界から来たみたいだ。あれだけの話して信じるのは早計かもしれないが、見る目には自信がある。それにこの女には何かを感じる。

恐らくヤツキの兄はこちらに来たことがある人間で、ヤツキも元はこちらの住人じゃないかと思う。

空間を移動する魔法もある。不可能ではないだろうが、かなり格の高い人間か？

旅が決まつた夜、俺は宿を抜け、森へと向かつた。少し入ると力を解放し結晶^{ブリズム}を作る。

その内ヴァルクにヤツキの存在は伝わるだろう。見張りは付けていないだろうが、力を解放したから調べにくるはずだ。

大体俺がこんな所にいるのもヴァルクの所為だ。

いきなり“最低6ヶ月間旅に出て、女心を分かつて来い”とか言って王の権限で城から追い出しやがった。意味が分からぬ。職務乱用だ。

しかし何故かティルまで、というか周りの侍女達もノリノリだった。

ティルが前に、女の敵だ。とか言つてた気がするがやっぱり意味が分からぬ。

まあいい、後一ヶ月で半年だ。帰つたら問い合わせてやる。
が、その前にヤツキだ。

一緒に旅をするのはいい。1人くらい問題ないし、守れる自信はある。しかし一ヶ月禁欲か。
俺が見てきた中でもヤツキは中々だ。だがまあ・・・大丈夫だろう。

俺のプリズムに呼応するように、春の夜空には満月が輝いていた。

09・現れた女（後書き）

今回はちょっと長めで、後半は初のガク視点です。
設定を曖昧にしか決めてないので書く度に困る。

森の中は涼しかった。木々が生い茂り光を遮っているからだ。それは逆に空に出られないことも示していた。

先の見えない森を特に話すことなく黙々と進む。聞きたい事はあつたが、話しながら歩いて体力を消耗するのもどうかと思つたからだ。

ガクさんのスピードについていくのはつらかった。恐らくガクさんは遅めてくれているのだろうが、こんな所を歩いたこともない私は早々と疲れ始めていた。

休むか?とガクさんに数回聞かれたが私はそれを断つていた。ただでさえ迷惑をかけているのにさらにかけるのは嫌だった。しかしその考えは些か浅はかだった。

暁とおやつ時に休憩を挟んだものの、慣れない私の足は夕暮れ時には震えだし悲鳴をあげていた。

これでは逆にこれからスピードに故障が出てしまうだろう。

おかしい私に気付いたガクさんが近寄つてくる。

「どうした」

私は言い出せないでいた。つまらない自分が情けなくて仕方ない。

震えている足に気付いたのだろう、休むぞと言われ、近くの小川まで引っ張つてもらつた。

「すまない、無理をさせたな」

「いえっ、わたし、ホントにつ、ごめんなさい」

泣けてきてうまく言えない。

ガクさんは悪くないのに・・・

とりあえず足を浸けると言われ、靴を脱ぎ川に足を入れる。ひんやりとして気持ち良かつた。

そのあとガクさんは、少し待てと言つてロウティスを私の元に置いてどこかに行つてしまつた。

「グルルウ？」

「大丈夫、ごめんね」

「グルル」

ロウティスが心配そうに私を見る。

泣いていても仕方ない。私は元気がとりえ（なハズ）なのだ。
気持ちを切り替える為に顔を洗おうと思いリュックからタオルを

取り出す。

川の水は澄んでいて洗うついでに飲んでみたが、おいしかった。
しばらくするとガクさんが帰ってきた。
そしてその手には焼いた肉が握られていた。

「食えるか？」

「はい」

疲れていても食欲はある。

もう一個あつたよ私のところ。食欲だ！

いただきます、と言い一口かぶりついてみる。

「おーしゃー・・・」

「どう?向こうから寄つてきてくれたんでな」

そう言つてガクさんは意地悪そつに笑つた。ガクさんが笑うのは
私の中で貴重だ。まだ会つて一日目だけどさ。こんな人が学校にい
たら絶対ファンクラブができるんだろうなあとボンヤリ考へている
とお肉を落としそうになつて慌てて持ち直した。

「今日せいいまでだ。よくがんばつたな

「いえ、じめんなさい」

「俺は急いでいないと言つたよな？それに森は多少危険があるが奥深くに入り込まなければそれほどだ。野宿は多くなるがな。俺は気にならない」

「はい。ありがとうございます」

心のモヤモヤは消えないがお礼を言つ。

そうすると、ガクさんがふと優しく微笑む。あ、めぢやめぢや力ツコイ。

「ヤツキ、途中で置いていくようなことも見捨てる」ともしない。俺を信じろ。何も焦る必要はない」

「グル」

その顔でその言葉は反則だよ、ガクさん。ついでに（ゴメン）口ウティス。

コクコクと頷くとポンポンと頭に手を置かれる。

あれ前にも同じことがあったような。

モヤモヤが消え心がみるみるうちに元気を取り戻す。が、根本的な問題は解決していない。

足は相変わらずイタイ。明日からどうしようか。

ガクさんが空間から寝袋を取り出す。あ、そんなサイズもイケるんですね。

「ん」

私に寝袋を差し出す。それを受け取ったが、もう一つ出す気配はない。

「ガクさんはどうするんですか？」

「俺は必要ない。元々おまえのだ」

てことは今日の買い物で買つてくれていたんだろうか。しかしやつぱり気が引ける。

そんな空気を感じ取ったのか

「遠慮するなよ」

とガクさんが言つ。

私が何を言つても同じだらうから、ありがたく使わせてもらひつゝことである。

「あつがとハジケコマス。えと、おやすみなさい？」

「ああ、・・・おやすみ」

『おやすみ』と返してくれたことが意外だった。だつて今日の朝も、『ああ』だつたし。

なんとなく嬉しくて笑みがこぼれた。

寝袋に入ると、一気に眠気が押し寄せるが、ロウティスは近くで寝ないのかとロウティスを見る。

それに気付いたガクさんがロウティスに声をかける。

「ロウ

「・・・グル」

あれなんか間があつたよ？大丈夫だよロウティス君。同じ過ちは・
・・・・するようなしなじよつなダケド。

ロウティスはパタパタと飛んでくると私のお腹の上らへんで丸くなる。あは、来てくれた。良かつた。

「おやすみ、ロウティス」

「グル」

足の痛みに耐えながらふと気付く。確かに足は痛いが外傷はなか

つた。足を覆うものは靴以外身に付けていなかつた。木の枝や大きめの石もあつたが手も足もケガをしていない。

不思議に思いながらも意識は落ちていつた。

ヤツキが寝たのを確認すると一息つく。口ウも静かに肩に移動してきた。

渡したプリズムの効力で肌を強くしているため、ちょっとのことは外傷はできないが、逆に内側のことに気付きにくかつた。

どうしたものか、あれでは明日は無理だらう。背負つていつてもいいのだが、本人が納得するか・・・。

あまり人に頼らない性格なのか、何も言つてこない。

今まで女は適当に扱つてきたし向こうから勝手に寄つてきたのでそれでよかつたのだが、ヤツキはあまり見ないタイプで戸惑う。さつきも返事を返したら嬉しそうに笑つていた。

何がいいのか分からなかつたが、ヴァルクの言つていたことを思い出し、返してみた。

ヤツキの笑顔を見た時、暖かい気持ちになつたような気がしたが、なぜなんだろうか？

女にこれほど気を遣つたことはない。

寄つて来る女の笑みには裏があるのがハツキリ分かっていた。だから純粋な笑顔は珍しく動搖するのだと、そう結論付けた。

セヒヤツキにはああ言つたが、実際夜の森は危ない。

「一日で森を一気に抜けるのが一番良い。」

「口ウで飛ぶ」とも考えたが、この森ではきつい。空にも行けないし、木同士の間も狭い。口ウのサイズでは無理だ。

『どうするのだ？森を破壊するか？』

口ウの額が輝き、話しかけてくる。

「無闇にんな」とドキねえだら

『理由はあるではないか』

チラリとヤツキを見る。

「・・・焦るほどじやない」

『せうか？だがあの娘・・・熱があるようだぞ？』

「早く言へ」

『先程気付いた』

ヤツキの元に行き額に手を当てる。少し熱い。そういうえば息も荒い。

思考に耽り過ぎて気付くのが遅れたか。恐らくこれから上がっていく。

「チッ、ロウ」

そう言つとロウがでかくなる。

俺は手を空にかざし、呪文を唱える。

「導かれし聖なる光よ、我と共に歩み、力を貸したまえ。光聖の初じゅうせいのじゅ・
【伝光波】！」

ゴオッ ゴウンッ

派手な音と共に木が消滅する。

「ロウ」

「グル」

ロウの額は、すでに輝きを帯びてはいなかつた。

11・魔法（後書き）

ロウテイス君しゃべれるんです。
あれ魔法が漢字？つていうのは気にしない。気にしない。
自然は大切に！

12・兄と姉

・・・・・・・・・・ん・・・・・・夢?

『いい子ね』

『?、はあ?』

『わうよ。ロイウーハルトやギラティルト、そして
つて来て、この滝と円のように輝くのよ。分かつた?』

58

『ええ、そうね。私達の国の誇りよ』

『、気をつけろのよ』

『ママみて!きれい!?!』

あれは何？

あの女の子はダレ？

銀色に光るあの滝は？

ああダメだ、頭が痛い。

あれ？…そりいえば、ここは？

確か森で寝て……？

必死に思い出していくと、ガチャと扉を開ける音がした。

「ヤツキ、起きたのか」

そう言つたガクさんの表情はホッとしているよりも疲れている
ようにも見えた。

上体を起こしガクさんに聞く。

「あ、はい。あの、ここは……？」

「フュイレスの宿だ。あの後、熱が出たんだ。だから……ロウで

森を抜けた」

あの後といつのは、森で眠った後のことだろ？

熱なんて久しぶりだ。異世界へ来た反動だろ？

「迷惑をかけてしまって申し訳ありません。ホントにありがとうございました」

「ここまで度重なつて迷惑をかけた女もないのではないだろうか。
だつてガクさんで、周りから尽くされそうだ。

「そんなに畏まらなくともいい。俺が思つままに行動しただけだ」

パツと見は少し冷たさを感じさせむ一重の瞳も、今は穏やかに細められている。

今まで何人の女性が、この瞳に捕らえられてきたんだろうか。

私の心が警鐘を鳴らす。

困ったようにガクさんを見ていると

「まだ休んでいる。3日も寝ていたんだ、起きてすぐに行動を起こすのは危険だ」

「ええ、3日間ですか？」

「ああ、だからしばらく大人しくしていろ」

「さー……。あのロウテイスは？」

「少し出でこる。近く帰つてくるだろ？」「

「ナニですか……」

「…………」

少しの間、無言でじっと見ていたガクさんだが、不意に歩いて来てベッドの側にあつたイスに座る。

「・・・寝ねまで」
「おひつ休め」

驚いたが、素直に寝ねじとす。

ふとんを被り畳を開じると、睡魔が襲つてきた。

まじるむ意識の中で、頭に暖かく手の感触と、良かつたとこづ声を聞いた気がした。

「随分と面白ことになつてゐるようだ」

「何がですか？」

「ガクフォンスさ。」の前森を中から無理矢理こじ開けたみたいだ
な」

「森を？^{バリア}守壁を突き破つたと？」

「ああ。その代償に、毎晩力を返しに行つている」

「それはいつのことですか？」

「つい最近だ。バリアを破壊したのは3・4日前か。それも連れて
いる女のためときたら面白い他ない」

「女性を連れて？それにしても情報が早いですね。そんなに可愛い
弟が心配ですか？」

「何の話だ？わたしは楽しんでいるだけだ」

「・・・そうですか」

素直じゃないのはガクと同じだと、ティルフヨミナは思つ。

腹違ひの銀髪の兄は5国で最も若く、それでいて賢王と言われる。
まだ少し甘さを残すガクフォンスと違い、この兄は完成された美
しさを持つ。

歳が少し離れている所為か、どうも小さい頃からガクと私に異常な過保護ぶりを見せてる気がする。

本人曰く、“楽しんでる”らしいが。

そんな素直じゃない兄を見て育つた所為か、ガクまでいつしか冷淡になっていた。

容姿は兄を越す勢いで成長を見せているようだが、気持ちの表現という面で少々問題が出ていた。

自分の容姿に興味がない分、気取らないのはいいのだが、周りにまで興味がない。

どんな美女が寄つてこようと、王女が寄つてこようと冷たい態度は変わらない。

苦情が相次いだ為、修行に出でさせよつとこの結論に兄、ヴァルクは至つた。

それには賛成だった。確かにもう少し女心を理解して切り返しを巧くした方が良い。

やつぱり半分は同じ血が流れているんだらつ、出発当日結局私も、面倒を半分でガクを見送つたのだった。

それはそうと女性を連れているとは驚きだ。

これからどうなるのか、楽しそうに話す兄を見ていると、ガクには悪いが同様に私も楽しくなつてくる。

ローヴェンドは今日も平和だ。

次に目を覚ますと、ガクさんの姿はなかつた。

代わりにロウティスが枕元で寝ていた。

頭をそつと撫でてやると、クルウと寝言が返ってきた。ふふ、癒しだ。

しばらぐへうじているとガクさんが入ってきた。

「起きたか。おはよづ、ヤツキ」

「おはよづ、おまえ、ガクさん」

「口ウ？寝てこむのか

「クルー」

「起きてんじやねえか」

「グル」

「え、いつから？」

『つい先程

「えー？ 口ウティスしゃべつ？ー」

『くく、私は話せるぞ?』

「気が向けばだがな」

「ええええ、他のモンスターもしゃべれるんですか?」

「いや、知能が高い者だけだ。そいつらも口ウミみたいに完璧に言葉を操れるわけではない。ヤツキ、少し待つていろ」

そう言つと、ガクさんは部屋を出て行つた。

「へえ、ロウテイスす」いんだ

「グル」

「あれ、もう終わり?」

「グル」

「また話さうね?」

「グル」

ああお腹空いた。3日間食べていないのでから当然か。
なんて考えているとガクさんが戻ってきた。

「好きなものを食え」

ガクさんの持ってきた皿には肉に野菜、果物、ミルクと色々並べられていた。

「わあ美味しそう。ありがとうございます」

「ああ」

「いただきまーす」

しばらく私の食べる様を見ていたがガクさんだったが不意に部屋を出て行つた。

残された私は、特に考えず久しぶりの食事を堪能していた。

全て食べ終わるトウトウしていた所にガクさんは帰ってきた。そして何も乗つていらない皿を見て驚いているようだつた。

「全部食べたのか」

「はい。美味しかつたです」

「そりが、良かつたな。一週間はここに滞在する。ゆっくり体調を戻せ」

「はい」

それから一週間は、ガクさんと街を散歩したり、時々ロウティスとしゃべったり、毎日同じような過ごし方だったがガクさんとロウティスに一步近づけた気がして有意義に感じられた。

「なんそろいーじを出るか

一週間を過ぎた頃ガクさんは言った。

「次はどう行くんですか？」

「ローヴェンンドへ向かう。ここはフュイレスの端の方だ。2週間程度か」

「ローヴェンンドへ何をじて行くんですか？」

「故郷へ帰るだけだ。訳あって旅をしていたが、その必要もなくなつた

「?、そつなんですか

「さあ行くぞ

ロウティスが特等席へ向かう。やっぱりガクさんの肩が落ち着くよつだ。

すると、宿を出た瞬間、複数の悲鳴が聞こえた。

14・クウェグリー

悲鳴が聞こえた方向からは人が押し寄せてくる。

「この気配、ゼッドヴァン巨大魔獸か」

「グル」

「しかも捜していた翼獸か」クウェグリー

「グルル」

ガクさんが呟く。

そこには顔と胴体が狼で尾が蛇のような生物がいた。ソレには立派な牙と翼が見えた。

大きさはライオンより2周り以上大きい。

「空へ誘導するぞ」

「グル」

「ヤツキは逃げる。後で追う」

「でもう」

「心配ない。行け」

「・・・はい」

そう言つと私も人々に乗じて走り出す。

「グオオオオオー！」

「相手をしてやる。来い」

後ろで雄たけびと冷静な声が聞こえた。

私はやつぱり気になつて足を止める。

振り向くと、大きくなつたロウティスに乗り空へ飛び上がるガクさんとクウェグリーが見えた。

グアアアアといつ咆哮と共に炎の玉が数個飛んでくる。

それを口ウは器用に避けながら旋回する。それに合わせて詠唱を唱える。

「導かれし聖なる風よ、我と共に歩み、力を貸したまえ。風聖の初・
【刃風破】ジンブウハ」

風の刃が、クウェグリーを襲う。
しかしクウェグリーも炎の玉で相殺し、同時に尾から雷を吐き出す。

「グルウ、グーグー」

「かすっただけだろ、文句言つな。といつかもひゅつとやる気を出せ」

そつと口ウの額が光りだす。

『それはおまえだろ？。早くプリズムを発動させたら良いではないか。何を嫌う？』

『バレたら面倒なのは知ってるだろ』

『本国へ帰れば良い』

『できたら帰つてゐる』

『あの娘も居ることだし入れてくれるだい』

「ヤツキ?なぜ」

『今までの経験から・・・おつと危ない。とにかくプリズムを出せ』

「チツ、まあ確かに戦いにくくしちゃうがない」

『あらうへではがんばれ』

口ウの言葉に溜息を吐くと額に集中する。

額にプリズムが現れ、力がみなぎるのが分かる。

ロウの背を蹴り、クウェグリーの正面に止まった。

すると下から歓声が沸いた。

15・英雄（前書き）

残酷な描写あり？

え、あれガクさん？

なんだかロウティスと言い合いをしていたガクさんは突然、瞳が金色になり髪も青くなつた。

その瞬間、いたる所から歓声が上がる。

「ローヴェンドのガクフォンス様だ！！」

「ガクフォンス様！」

「これでもう安心だ！」

「ガクフォンス様ー！」

ええ？何々？どうしたの？ガクフォンスサマ？
え、ガクさんのこと、だよね？

本名ガクフォンスなの！？ていうか、様つて何！？

内心でパニクつていると、ロウティスが私の元へ降りてきた。

「え、ちょっとロウティス！ガクさんて何者なの？！」

『ガクフォンスはローヴェンドの王子だ。世間からは英雄とも呼ばれているな』

「王子！？英雄！？うそあ！だつて森にいたよ？王子が一人でみんな所いるもんなの？！」

『その話しが後だ』

色々とショックが大きい。でも今はガクさんの応援だ。
みんな声を上げてるし、私もそりよう。

「ガクさん、がんばってー！」

「雷聖の中・【飛震雷】」ヒシンライ

プリズムを発動したお陰で魔法の詠唱もいらないし、自由に飛んでこられる。

「オオオオオウー！」

「風聖の中・【守風】」シユフウ

さて、今日は遊んでいる場合じゃないか。
空間から、王剣を出し、切つ先に手を当て爆氣系呪文を唱える。

レストショラン

アルテア

「悪いな、遊びは終わりだ

「ガアアアアアアア！」

向かつてぐるクウェグリーに向かつてアルテアを纏つた剣を一振りした。

ドオン、という音と共に下から歓声が上がる。

珍しい気配のモンスターだったから捜していたが、別段特別なこともなかつたな。

と、思つていたら・・・

ガンッ、と強い衝撃が体に走った。下へ激突する寸前で口ウが受け止めた。

「ぐっ、」

「フハハハ、ユダンシタナ！」

何だ？まさか、その場で転生するタイプか？言葉も話せるようになつてゐる。

上昇する口ウの背で体制を整える。

『油断大敵だな』

「チツ、水聖の中・【復水】^{フクスイ}」

傷を負つた箇所へ、瞬間に手当てを施す。
しばらくは持つだろ？

「ロウ、こいら一帯にデカい防御壁バリアを張れ」

『・・・御意』

ロウから離れ、再びクウェグリーの正面に立つ。

「新しいタイプか」

「フフフ、オドロイタダロウ？ ユカイダ！」

「言語力も上がったか？」

「愉快そうな所悪いが、準備が整つたようなのでな。消えてもうう」

「オマエガキエロー！」

「ふむ、ロートにするか。」

「クレファリナー＝プリズムより生まれし炎の鳥神竜ちょうしんりゆう、ロート・クレファリナー・シャロー。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ」

そう呑えるとレストショランが形を変える。

「『姿を変えし激情よ、炎華になりて乱れ咲け』」

そして炎が剣を包みだす。

「【炎々華】！！」

炎を纏つた斬撃はクウェグリーに当たった瞬間、大きく火花が燃え、やがて華が咲くように広がる。

それが消える頃にはクウェグリーの姿はどこにもなかつた。

下からは歓声と感嘆の声が沸き起つた。

15・英雄（後書き）

【炎々華】のイメージは椿です。

炎の華が咲いた。

花火みたいで綺麗だつた。

上空にいるガクさんは私の知っているガクさんとは別人に感じた。
圧倒的なオーラが溢れている。
金色の瞳がこちらを見下ろす。目が合つと思わず慌てて逸らしてしまった。

ロウティスの鳴き声と共に降りてくる気配を感じて、俯く。なん
だろう、何か恥ずかしい。

「ヤツキ」

降りてきたガクさんが私に声を掛ける。

顔を上げるのを躊躇している

「ヤツキ、恐いか？」

優しい声色でガクさんが問う。

その声にパツ、と顔を上げ否定する。

「恐くなんかありません！ただ・・・」

「ただ？」

「い、いやなんでもありません」

顔を上げたはいいが、予想外に近かつた上に、本当の姿であろうガクさんは魅力が増していく顔が火照る。

それにこの気持ちをどう表したらいいのか分からない。

「とにかく、恐くはありません」

「そりか」

そう言つてガクさんは金の田を細め嬉しそうに微笑んだ。直視できなくて、また俯き加減になる。

そうか、最初に感じた違和感は変装していたからなんだ。
金の瞳と深海を思わせる青髪は、ガクさんに本当に似合っている。

突然ガクさんが若干嫌そうに呟く。

「ヴァルク・・・」

「グル」

ロウティスも呟いた（？）直後、上空から雄たけびと上空に向

た人々の歓声が聞こえた。

驚いて顔を上げる。上空にはドラゴンのような生物とそれに乗る金の瞳と長い銀髪を揺らす男が見えた。

「ヴァルク様ー！」

「ヴァルク様ー！」

「キャー、カツ「イイイー！」

「ヴァルク様ー！」

ガクさんの時も凄かつたが、今回はなんだか黄色い歓声が多いようだ。

と、ヴァルクと呼ばれた男性が突然飛び降り、私たちの近くに着地する。え、足は無事なんですか？

周囲からは、よりいつそう歓声が上がる。

「久しぶりだな、ガクフォンス」

「おかげさまでな」

「くく、ところでそちらの女性は？私はヴァルクだ」

「おまえには関係ない」

私も挨拶をしようとしたがガクさんが、ヴァルクさんと私の間に立ちふさがる。

「仮にも一国の王に向かつて、いやその前にお兄様に向かつておま

えとはずいぶんじゃないか?」

「え、王様! ? ていうかガクさんのお兄さんー?」

思わずガクさんの背中から覗いて叫ぶと、**二つの金色の瞳に見下される。**

「おう、迫力満点。言われてみれば似ているかも。まあ、この威圧感とか。

「ヤツキ、こんな奴に構わなくていい。行くぞ」

「待て待て、ではその娘の」とは後にしても。とつあえずローヴェンドに帰るぞ」

「どういづ風の吹き回しだ」

「お優しい兄上様が半年の期限を縮めてやると言つてゐるのだ。大人しくついて来い。勿論、娘も一緒にい

方や愉快げな金。方や不満げな金。

「グル、グルル」

黙るガクさんを、ロウテイスがつづく。

「ロウもそう言つてゐるではないか。早く行くぞ。おまえもこの場には長居したくはないだろ? ?」

『十分長居しておるがな』

「黙れロウ」

「こりと笑ってヴァルクさんが即座に言い放つ。ロウティスもヴァルクさんも、くくくく笑っている。恐い、リアルホラーだ。

ガクさんの袖をちょっと握ると、金色の瞳が動く。あやす様に頭に乗せられた手に安心感を感じる。

その後、一つ溜息をつくとヴァルクさんに向き直る。

「ならわざと行くぞ。それと二人共その笑いをやめろ。ヤツキが恐がつている」

「それは失礼した。では行くぞ。グレストィーヌ！」

「ギャルル」

ほう、あの胴の長いドラゴンはグレストィーヌというのかい。中々・・・なんといつか合っているのかいないのか。

グレストィーヌが側に降りてきて、ヴァルクさんが飛び乗る。私はどうしたいのかと思っていると突然浮遊感を感じる。ガクさんが、乙女の夢・・・所謂、お姫様抱っこをしてくれていたのだ。

そう認識した瞬間、顔の熱が急激に上がるのが分かる。

「首に手をかける」

こんな時にそんなこと言わわれてもー。

「落ちたいのか？」

いや、落ちたくはないです。

おずおずとガクさんの首に手をかけると、行くぞと言つて、ガクさんは飛び上がる。

グレストィースの上に着くと、私を降りし自分の前に座らせる。そして今度は腰に手を回してきた。

さつきからイロイロ限界なんですが、私はロウティース助けてー、なんて心の中でも叫んでも聞こえるわけなく、こつも通りロウティスは特等席へ。

しかしそんな寿命の縮まるよつなドキドキも、グレストィースが動き始めるとそれどころではなかつた。

さう、グレストィースは超高速竜（ワンド＝ワーム）だったのだ。

16・兄と弟（後書き）

夜月ちゃんの視力は2.0。

17・ローヴェンド

「・・・ヤツキ? 大丈夫か?」

「ちよ、ちよっと時間を、くだ、せい」

グレスティースに乗り超スピードで飛行して、ローヴェンドの城の飛行場へと無事着いた。

しかし、何の覚悟もしていなかつた夜月には、あのスピードは堪えた。

グレスティースに降りた後フラつく夜月にガクが声をかけたのだつた。

「・・・大丈夫か?」

しばらく経つてからガクさんが再び聞いてきた。

「はい。大分楽になりました」

「そうか。グレストイースが喜んでいたみたいだからな。あのよつ
な飛行になつたんだわ」

「あのような飛行、とはやはりグネグネ飛行だろうか。

雄たけび（ガクさん曰く喜びの声）をあげながら顔を上下させて
飛ぶもんだから、胴体もそれに合わせて動く。加えてあのスピード
なのに何故ガクさんやヴァルクさんが平氣なのか不思議だ。

ともあれ、乗せてくれたお礼はいうべきだと思い、グレストイー
ヌに向き直る。

「ありがとう、グレストイース。・・・でも今度はもうひょっとむ
つくり乗せてもらいたいな

「ギャルル・・・グギャル！」

「？」

「悪かった、今度は任せろ、と」

いきなり横からヴァルクさんの声がして、それなりを向く。

「言葉が分かるんですか？」

「大体な

かわいいだろ？といいながらグレストイースを撫でるヴァルク

さん。

かわいい、のか？

「^{リンク=バルム}超高速竜^{リンド=バルム}といつてな。グレストイーヌは希少種なんだ」

「へえ。誰が名付けたんですか？」

「私だ。本名はグレストイーン・リンク・クモル・アルショイ・ヴィジアンヌと言つ。略してグレストイーヌだ」

な、長つーしかも微妙な略し方してあるのね。

「良い気だね」

「え、ええとでも」

ひたすら覚えにくいですけど。
どつちかつていつと覚えてるヴァルクなんにびっくりなんですけど。

「もう一頭いるんだ。ハイウェイド・バルム・スィーザ・アン・グライク・ラスといつてな。ハイウェイドは雄なんだが、見ていくか？」

「いつも負けず劣らず長い。

なんだかヴァルクさんの瞳が輝いているよつな・・・。ていうか
グレストイーヌは雌^{メス}なのね。

「ヴァルク、それは今度でいいだろ？」

「グル」

「む、まあしようがない。今度で良いか。では行くぞ」

するとグレストエースはどこかへ飛んでいった。

お城は白を基調とした明るめの色でできあがっていた。豪華過ぎず派手過ぎず質素過ぎずの田に優しい感じである。

キョロキョロしながら着いていつていると、王の間に通された。

そこには、ゆるにカーブをした金髪の美女がいた。ガクさんとガアルクさんと同じく金色の瞳だ。

「まあ、ガクフォンス！久しづりね」

「ああ」

「そちらが兄上のおひしゃつていた方ね？」

「ああ。ヤツキだ」

「ヤツキさん、ガクがお世話になつたわ。私はガクの姉のティルフ
エミナ・ローヴェンドです。ティルと呼んでくださいな。よろしく
ね」

「お世話だなんて全然、むしろいつもお世話してもらつてます！」
ちらりそよろしくお願いします…」

「ふふ、可愛い子ね。ガク？」

かわいい！？てかそこでガクさんに振るの…？

「……………やうだな」

そうなの…？いや、ものすこに間があつたけど。

ティルさんが何倍も可愛いもんね。

美しいというよりは可愛いという表現の方が合う人だ。

美しいという表現が一番合っているのはヴァルクさんだらう。
ガクさんはとにかくカッコ良い。

素晴らしい美貌の兄弟だ。

17・ローガン（後書き）

グレスティーヌとハイウェイの名前ムダに姫くね？なんて言わな
いで。

単に言わせてみたかったんです、ヴァルクに。
ホント言つと氣に入っちゃつてゐるんです、私が。
いつか2頭の番外編が書きたい。

お気に入り登録やら何やらしていただくと物凄く励みになります！
今後とも（氣だるげな）応援よろしくです。

ティルと再開した後、そのまま4人でお茶会となり、俺も渋々付き合つた。

だが、ヤツキが楽しそうに笑っていたから悪くもなかつたと思う。それも終わるとヤツキに城を案内し、一々反応を見せるヤツキを新鮮に感じながら案内し終わった頃には、日も暮れていた。まだ行つていらない場所もあつたが今度でいいだろ？

4人で夕食を食べ、まだ見せていなかつたヤツキの部屋を見せると、今日一番の笑顔が返ってきた。

何がが胸に沸き起こるのを感じたが、無視してヤツキの頭を撫でながら、良かつたなと言うとロウと共にヴァルクの部屋へ向かつた。後から来いと言われていたのだ。

扉の前に立ち、気配で分かつてゐるだろ？が一心中に声を掛ける。

「ヴァルク、入るぞ」

「ああ」

扉を開け、ヴァルクが座っている長椅子の向かい側の長椅子へ座る。間にある机には書類と酒が置いてあつた。

「で、何の用だ」

「おまえ、兄上様に向かつてその言葉遣いはどうにかならないのか」

「今更だらう」

「それもそうだ」

「で？」

「ガク、女心を理解する所か手に入れてくるとは、旅の成果もあつたな」

「そんな話しなのか。大体ヤツキは俺のじやない。たまたま異世界から来たあいつを保護しただけだ」

「…………ガク、おまえ気付いていないのか？」

「何がだ」

「本当にか」

「だから何が」

『ヴァルク、ガクは本当に気付いておらぬぞ』

「いや、そうか。まああの頃のおまえは女性に疎かつたからな。今もだが」

「いい加減斬るべ」

「明日の朝、手合わせをしてやるからそれまで待て」

「誰も頼んでいないんだが」

「いいではないか。とにかくロウは気付いていたのか」

『ああ。力は戻っていないようだがな。これから取り戻すだらう』

「ふむ。ガク、話はもう一つある。シリーズの王と王妃が帰つて来た。10年ぶり、いやもつとか」

「シリーズの? いつだ」

「ちょうどおまえが旅に出たぐらいか。近々ヤツキを連れて挨拶へ行つて来い」

「何故ヤツキを連れて行く」

「いいから、グレスティーヌに乗つて三つ滝みつたきでも見せて来い。良いな?」

「・・・ああ」

シリーズか。久しづつに行く。あれのまつの滝は有名だ。夜に見ると神秘的な光を帯びる。

「そうそう、ロイトイギラも戻って来たと」

「そうか。あいつらも久しづだな」

「時空を操れるからな。好きにまた姿を消すかもな」

「あれも万能じゃない。しばらくはこっちに留るだろ？」

「だらうつな・・・」

結局そのままマルクと口うと語り通した。と言つても酒の間に
ポツリポツリとだが。

余計な事を言つた気がしなくもない。酒には強いのだがな。

久々の城に、無意識に安心感を覚えながら酒も尽きた頃、意識を手放した。

・・・・・・・・・朝からヘビーなものを見た。

せつかく人が気持ち良く寝ていたのに邪魔するのは誰だ、と安眠を妨げた原因の音を探す。

「・・・「わわわ」

おおおおおお！

ガゴオオン！

ガン！

ガキイン！

ドオソツ！

ガクさんとヴァルクさんが上半身裸で死闘を繰り広げ、外野で大量の兵士達が遠巻きに応援している、そんな状況を朝からガツツリ見るものではない。

何なんだろう。兄弟ゲンカでもしたんだろうか。

もう一度寝ようにも気になつて眠れないので侍女を呼ぶ。

突然来た私に、侍女なんて申し訳ないと断つたのだが、ガクさんに押し切られた。

入ってきたのは私と同年のリヂェンダ。昨日ですっかり仲良くなつた。

160cmの私より低くて150cmだそうだ。
小さくってかわいいのだが、やることはテキパキしている。

「おはよハジマス、ヤツキ様」

「おはよう、リヂュ。やっぱりそれ、やめれない？」

それ、とは敬語と様付けのことだ。

「もう癖みたいなものなので・・・」

昨日も粘ったのだが、困った風に言つリヂュを見るとそれ以上は言えない。

「分かった。ごめんね」

「いえ、じぶんが申し訳ござりません。それにヤツキ様はガクフォンス様の大事な方ですので」

「ガクさんの？」

驚いて真顔で聞き返す。

「はい。ガクフォンス様が女性に優しく接しておられる所を初めてお見受けしました」

「え？ ガクさんいつも優しかったよ？」

「ふふ、それがヤツキ様だけなのですわ」

そうかなあ。そんなことないと思つけど。

「ヤツキ様はガクフォンス様をどうお思いですか？」

「どうつて……優しくて、頼れて、カッコ良くて、何でもできて……」

「はい」

「近くにいるけど届かない……雲の上の存在、かな？」

「何故届かないと思われるんです?」

「うーん、あれだけ容姿が元壁で性格も良いくつてくれれば釣り合わないよ

「アリ思われるところには、ヤツキ様は届きたいと思われるんですね?」

「え?・・・・・う、ん」

初めて気持ちを認めた。ずっと警鐘を鳴らし続けていた心。誤魔化すのは限界だった。

「でも伝える気はないよ?..」

結果が分かっているのに挑戦するようなチャレンジ精神はない。

「アリですか?..」

残念そうにリヂュが言つ。

「あーもう一度お眠りになる気はないよ?..」
「うか」

リヂュが少し重くなつた空氣を払つたりして元氣と言つ。

「あ、そうそう。あれを見に行きたくて」

「あれですか？」

「うん。でも行き方分からないうち・・・」

「了解しました。ではパパっと着替えて、参りましょっ

19・自覚（後書き）

ガク様にしようかガクフォンス様にしようか10分悩みました。あー、どーでもいいですか？もーしわけない。
ついでにリデエンダにしようカリジェンダにしようかも悩みました。
あ、これもどーでもいいですか？もーしわけない。

20・兄弟のじゅれあい

ガンツー！

「腕は落ちていなによつだな。安心したぞ」

「誰に向かつて言つてんだ、当たり前だろー。」

ギイン！

「旅に出ていたんだ、落ちるわけないだろー」

「旅と言つても相手をしていたのは所詮雑魚だらう」

ギギ・・・！

「ゼッヂヴァンも相手しちだらうが

「アレだけであらう。あとは女に現を抜かしておつたのかと」

ガコーン！

「バカ言え、あいつはそんなんじゃないと言つたろー。」

「ふむ、感情が豊かになつたなガクフォンス。兄上はうれしいぞ」

ドガン！

「氣色悪い」と言つてんじゃねえ！」

「兄に向かつて氣色悪いとは・・・私はそんな風に育てた覚えはない」

おおおおお！（外野）

「いや確かに育ててもらつてはないが・・・見てはきたぞー・好き放題、女とモンスターを狩つている所をな！」

「バカ者！女とモンスターを一緒にするな。大体な、女は狩つてもいたが・・・主に飼つていたんだ！」

「アホか！」

「あれは何、日常なの？」

「はい。兄弟の親睦を深めているのですわ」

「へえ・・・・・」

兄上はうれしいぞ、辺りから聞いていたのだが、バカな会話とか思えな・・・失礼。素敵なじやれあいだと思いマス。

ガギイン

「さて、そろそろ本氣といこつか、ガクフォンス?」

「ふつ、相手してやるよ」

「くくつ、減ららず口が」

「偉大な兄上様を見て育つたもんでな」

「つむ、やはり育て方を間違えた」

「だから、おまえには育ててもうつてねえ」

「まあ良い。行くぞ」

「来い」

ヴァルクの額と俺の額にプリズムが現れる。

外野からは割れんばかりの歓声。防御壁を俺とヴァルクを囲むように広範囲に張つてあるが、音は防げないからな。うるさい。

「剣はどうする？」

「能力を発動したら、バリアの意味がなくなるぞ」

「そうだな。発動はなし、召喚のみだな」

「分かつた。・・・来い、レストシェラン王劍」

「解せ、メティメフィユス死劍」

今まで持つっていた剣は消え、2人の手に新たな剣が握られる。

久しぶりの高揚感。ヴァルクも同じだらつ。目がギラついている。

ロウが高らかと吼えた瞬間、2人同時に地を蹴つた。

21・兄弟の行き過ぎた戯れ（前書き）

すごく分かり難いです、スマセン。ステキな想像力で乗り切ってください。

21・兄弟の行き過ぎた戯れ

ガン！ギン、ギイン！

反動を利用し、後ろへ飛ぶ。同時に剣を持っていない手で魔法を作る。

「光聖の初・【伝光波】^{デシコウハ}」

「雷聖の初・【迂雷】^{ウライ}」

俺が放った光とヴァルクの放った雷がぶつかり合い、爆発を起こす。

煙が充満するが、今の俺たちには問題ない。

プリズムは視力も聴力も飛躍的に上げる。正確に言えば、プリズムが確認するものを通して感じている。

この力はローヴェンドの王族にしか現れない、特殊な力だった。しかし、王族全員が持っているわけではなく、どちらかと言えば所持している者の方が少ない。

さらに三大宝龍角と呼ばれる三つの剣、王剣・死剣・純剣はその中でも主を選ぶ。

主となる者が生まれた時、自然に傍に現れるのだ。

そしてレストショーランを俺が、メディメフィユスをヴァルクが所有していた。

影が動く。火の力を感じる。弱いな、炎聖の初か。
なら、避けて切り込む！

ボボッ、ボボボッ

予想通り向かつて来た火の玉を避け、ヴァルクに切り込む。
ところが火の玉は大きくなり、方向転換して向かつてくる。

炎聖の中か！

「くく、騙されただろ？ わざと力を弱めて撃つたからな」

「チツ、風聖の中・【シユフウ守風】」

風の壁が包み込む。その外から炎が被さる。

どうしようか。ゾルトにするか？ いや少し危険か。ほぼ無差別だからな。
よし、イフイスに決めた。

外から風神の詠唱の波動を感じる。あつちはウィールか。

芸はヴァルクのが巧いが、力勝負なら俺。

イフイスで勝負だ。

「シルティイス＝プリズムより生まれし光の鳥神竜、イフイス・シルティイス・ファー。今こそ時空を越え我に力を貸したまえ」

レストシェランがファー（イフイスの剣）へと形を変える。

「『進る無数の光よ、四方八方を包み込め』【光麗衝】！！」

光を帯びたレストシェラン（今はファー）をヴァルクの気配のする方へと一振りする。

光の斬撃は守風と炎を突き破り、複数へ散らばる。

開けた視界には無数の風の刃が見える。普通なら見えないだろうが、流石はプリズムだ。

召喚まで使って、手合せは、行き過ぎと分かっているのだが、どちらも久々の興奮を抑えきれない。

さあ、俺の光かヴァルクの風か。

と、構えていると突然別の気配を感じる。

「純志を示せ、『純剣』」

パリイン、とバリアが破壊され、斬撃が飛んでくる。

「つ、」

顔のすぐ側に衝撃が落ち、地面を抉る。
避け損ねた。1本か2本、線が入ったな。

そしてその斬撃を容赦なく叩き込んだのは・・・シアスマランテの所有者、ティルフェミナだった。

「朝から2人して何をしているのです？手合わせは構いません。ですが両者が、剣とはいえ神々を召喚するとは少々やり過ぎでは？いえ、迷惑です。破壊する気ですか。久々で嬉しいのは分かりますが、限度を考えなさい。お分かりで？」

「あ、ああ」

「・・・ん、悪かった」

ヴァルクも怒ったティルには敵わない。大人しくしておくのが一番だと知っている。

冷静になり、一気に気持ちが冷める。

どちらとも放った攻撃は既に消していた。

「ガク、今日は終わりだ。では」

ヴァルクが逃げるよつにして去つていつた。

「俺も戻るか。悪かつたな、ティル」

「分かればいいのです。・・・楽しかったですか？」

「ああ。次が楽しみだ」

今日はやり過ぎたが、プリズムぐらいならいいだろう。
そんなことを思いながら城へ戻つた。

21・兄弟の行き過ぎた戯れ（後書き）

鳥神竜の名前最後の部分はその鳥神竜の持つ剣の名前です。
イフィス・シリティス・ファーなら、剣＝ファーですね。
ウイールはウイール・エフィズ・クライマリーなので、剣＝クライ
マリーです。

22・三大宝龍角

ヴァルクさんとガクさんが城に戻るのを見て、私たちも部屋へ戻ることにした。

途中までの会話は置いといて……手合わせ、はすごかつた。

リチエ曰く、今日は特別白熱していたらしいが、とにかく迫力がハンパなかつた。

にしてもティルさんが止めに入るなんて予想外だった。剣とは無縁に見えるのに、2人が暴れて（失礼）いても壊れなかつたバリアを一瞬で破つたのだ。

「ティルさんもすごいんだね……」

「ティルフェミニナ様も三大宝龍角所持者でござりますからね。この国で三番目にお強いですよ」

「三大宝龍角？」

「はい。ヴァージス龍神の角は三本あつたと言われ、メディメフィユス・レス・トショラン・シアスマランテはそれぞれの角が元だと言い伝えられています。そしてその3つの伝説の剣を三大宝龍角と呼ぶのです」

「へえ。ティルさんが三番目ついで」とは・・・

「はい。ヴァルク様とガクフォンス様が上におりれます」

「どつちが強いの?」

そう問うヒリヂュは困った顔をする。

「・・・」のローヴェンドは身分に關係なく、強いものが国を治めると定められています。なので、現国王であるヴァルク様が一番強いといつ事になりますが・・・

「?」

「私共には、ヴァルク様も、ガクフォンス様も、ティルフェミナ様も同じように、強い、としか分からないのです。ですが以前、ティルフェミナ様が、あの2人は化け物だ、とおっしゃっていました。結局、強い者にしか本当の強さは分からぬので、私共には判断のしようがないんです」

「なるほど」

「詳しいことはガクフォンス様にお聞きしてみたらどうですか?」

「うん、そうする」

「何が聞きたいって?」

「わっ、びっくりした

角を曲がつたら、未だ上半身裸+額が光っているガクさんが現れた。リヂエは気付いていたのかクスクス笑っている。

ガクさん服着ると細く見えるけど、腹筋割れてるし、案外がつしりしてるんだなあ。って変態か私は。

「・・・ガクさん、戻ったんじゃ？」

「ああ。だが、ヤツキの気配を感じたから引き返してきた。後で話しがある。朝食後、王の間に来い」

「はい。朝食は皆さん別なんですか？」

「ああ、朝は個人の自由にしている。それじゃあまた後でな」

「はい」

するとガクさんが私の前から消える。

「魔法？」

「というのもプリズムの力ですね」

「プリズムって・・・これ？」

やつ言つてリヂュに、ガクさんから貰つたネックレスの飾りを見せる。

普段は服の下で見えないのだ。

「！それは・・・ガクフォンス様に？」

「うん、お守りとしてって。そんなにすゞい物なの？」

「はい、プリズムは身体能力を異常に上げるそうです。ですがプリズムは生来額に持つているもので、そのようなものは初めて見ました」

「へえ・・・これも聞いた！」

その後世間話をしながら部屋に戻り、既に準備のしてもらついた朝食を食べた。
やつぱり肉だよね。

朝食後王の間へ行くと、ガクさんだけかと思つていたら、ヴァルクさんとティルさんもいた。
リヂュは一礼すると退室していった。

心なしかヴァルクさんが、こちにやじしてこられるように見えるのは何のせいだろうか。

そして何故、2人共髪から水が滴っているのだろうか。いや、力
ツ「良いけどさ。水も滴るいい男つてのはこの2人のことだね。
でも気になるんだよね。

「あの、髪乾かさないんですか？」

「ん？ああこのバカの所為で」

「おまえ兄上様に向かって……いやもういい。……髪はそのう
ち乾く」

「でもガクさんは短いんですけど、ヴァルクさんは……」

ヴァルクさんのキレイな銀髪は腰のあたりまで伸びている。
自然乾燥には時間がかかるんじゃ？と思つているとヴァルクさん
の額が輝き出す。

「大丈夫だ。数分後には乾いている。プリズムは万能だ」

え、そこで使うんですか？

23・兄弟の反省会

ヤツキと別れた後、大浴場へ向かう。

手合わせの時は、上は脱いでやる。ベタベタになるのが分かっているからだ。

大浴場には、既にヴァルクの気配を感じていた。

部屋に風呂はあるが、幼い頃から手合わせをした後は大浴場へ向かっていた。

それは今も、暗黙の了解のように続けられている。

服を脱ぎ、ガララとドアを開けると案の定、浴槽に浸りこむらに背を向けたヴァルクがいた。

「遅かつたな。ヤツキにでも会つていたか？」

「関係ないだろ？」

そう返すとシャワーのある方へ向かう。

俺が身体を洗っている間、ヴァルクは何も話しかけてこなかつた。あいつは湯に浸かっている時間が長い。のぼせないのが不思議なくらいに。

俺も長い方らしいが、あいつには勝てない。そこは譲ろう。

しかし今日はひつくりしていられない。
ヤツキを王の間に呼んでいるからだ。

一通り洗うと浴槽へ浸かる。急いでいてもこれは抜けない。
ヴァルクとは5人分程距離を開けた。

するとヴァルクがこちらを見てにやり、と笑う。
ああ嫌な予感しかしない。まったく面倒臭い。

「ガク、顔の傷が治っているで。ヤツキに会つ為に治したのだろう？」

「ほら、的中。人にちよつかいを出すのがそんなに楽しいか。

「さあな」

「くく、今日は一段と興奮していたな？ヤツキがいたからか？」

いかがわしい言い方をするな。

「アホか。おまえだつて田がギラついてたじやねえか」

「ヤツキが見ていたからな」

意味が分からぬ。いや、恐らくからかっているんだろうが、
応釘を差しておく。

「あいつに手を出すなよ」

「さあな、私の勝手だらう」

「ヴァルク」

声が低くなり、苛立ちが籠つたのが自分でも分かる。

「くくく、本当に感情が豊かになつたな。いいことだ」

これ以上は無駄だと、舌打ちを一つこぼして湯から上がる。

「ガク、しつかり捕らえておけよ？その方が奪い甲斐がある」

前ならば無視したが、今は無性に腹が立つた。

無意識に、額のプリズムが輝きだす。

すると、ヴァルクの目が、射るように細くなる。次いでプリズムが現れる。

「どうした、感情の抑制が出来ないか？以前ならこれくらいで怒りはしなかつただろう」

「つぬせえ」

「何故だらうな？」

「知るか」

「もたもたしていると他の男に穢されるぞ。いや・・・私が穢してやるうか？」

「ヴァルク！・・・・王誇よ来い！」

そう叫ぶとレスト・シェランが現れ、ヴァルクも立ち上がる。

「死徒しとに解せかい、」

「レスト・・・
「メディ・・・

ガラララッ、ガシャンッ！-

「いい加減になさい！」

2人が斬りかかるうといふところで、ドアを物凄い勢いで開けたのは、額にプリズムを光らせたティールだった。

「メ・イ・ワ・クです。よろしくて？」

目が、目が笑っていないよ、ティール。危険ゾーンだ。

とりあえず一つ息を吐き、レストショーランを消し、プリズムも戻す。

「・・・うむ」

「・・・悪い」

2人してそう言つと、テイルはシャワーを2つ持ち、水量を最大にしてそれにぶつかってきた。

・・・冷たい。

「テイル、冷える。落ち着け」

ヴァルクが冷静に言つ。ちやつかり浴槽に浸かりながら。

「落ち着くのは貴方達です。頭を冷やすには一度良いでしょ」

「落ち着いた。だからもういい」

「いえ、まだです」

・・・。

冷水を頭から被つた俺は、冷静になり、時間が迫っていることを思い出した。

「テイル・・・」

「ううひー、ティルはシャワーを止めた。

「落ち着きましたか？」

「ああ、悪かった」

「では行きなさい。そろそろ来る頃では？」

「忘れていた、私も行こう。ああ、そうだガク。先程のは[冗談だ、精々がんばれ。」

「み上げて来る、なんとも言えない感情を無理矢理抑えると、濡れている髪もそのままに、大浴場を後にした。

「何を弟いじめなさつているのです？」

「へへへ、背中を押してやつただけだ」

「随分と雑ですね。もう少し素直に、穩便にできないですか？」

「ふつ、本当に奪つてみようか」

「どうでしょ？・・・ガクは容姿面でも性格面でも成長を見せて
いるようですが、そろそろお兄様も容姿は置いておいて、性格面で
成長を見せられた方が良いのでは？」

「・・・・・・」

可愛い顔してハツキリとものを言つティルフェミナは、ヴァルク
を黙らせられる貴重な人物であった。

23・兄弟の反省会（後書き）

ティルさん強し。

「ヴァルクは放って置いて、質問があるんじゃなかつたか？」

「あ、色々あるんですけど。プリズムに限界はないんですか？」

「ない」

「まあ

「あるわよ。貴方達がおかしいだけでしょ。普通は朝から2・3回も使いません。というか、3日に1度くらいです。それ以上は身体に負担が掛かるので滅多に使わないものなんです」

「初耳だ」

「ほお・・・。だがそれならティルだって、おかしい分類だろ」

「私は歴代より、少しだけ強いだけですわ」

「まあ3人共突然変異つてことだな」

「そういうことだな。そりいえば父上も滅多に使わなかつた」

「それはお兄様が代わりに、喜んでモンスター狩りに行つていたからでは・・・?」

「帰りに女もな

「若気の至りだ。次

「・・・誰が一番強いんですか？」

「言つた後に、これケンカにならないかな、と心配になつた。

「俺」

「ガクだな」

「ガクね」

「あれ、すんなりと・・・。

「どうした？驚いた顔して」

「ああ、私が認めたことが意外だつたか。まあ技量は私のが上だが」

「ガク自身が強いのもあるけれど、剣の能力もあるわね」

「剣、ですか？」

「剣自体に能力があるんだ。俺のレストシェランは、‘自然’以外の全ての効力を相殺する力を持つ」

「私のメディメフィユスは、生、を持つものに対し防御不可能な攻撃を持つ」

「そして私のシアスマランテは、主の、決意、と呼応し、自らの意思で力を出せるの」

「？」

「斬撃の強さだけでいうと、レストショランを100とするなら、メディメフィユスは80、シアスマランテは40～120だな」

「シアスマランテは主の精神力や意思に大きく左右されるからな。朝の一撃は中々だつたぞ」

「そうでしょうね。‘バリアを破壊して殺せ’、といつ気持ちで撃ちましたもの」

「ティル、冗談になつてねえ」

「シアスマランテは一見、一番能力が低そうに思えるが、主次第で、唯一、何でもできる、剣だからな」

「あら、その、何でも、を軽く防ぐのは誰ですか？」

「俺だな」

「私だな」

「ふつ、むかつくわ」

「ティ、ティルさん……」

「ほり、ヤツキが恐がってんぞ、ティル」

「レストショーランの能力を見たらおまえも恐がられるんじゃないかな？」

「メディメフィユスのが恐がられると思いますが？」

「吸うからな……」

「意のな。……アレは疲れるんだぞ」

「貴方にとつたら微々たるものでしょ」

「やつ考えるとレストショーランが一番普通だな」

「いやいや、メディメフィユスの能力を防ぐ剣が普通なわけないだろ」

「お兄様のアレを防げるのは、一体化したガクだけですからねえ」

「？？」

「・・・よし、次。まだあるか？」

「あ、はい。・・・「ふ、なんですけど……」

そう言つてガクさんに貰つたプリズムを見せる。

「つ、今か」

「ガク、おまえ・・・。くはつ」

「あら」

「??？」

「・・・まあいい。その説明だな？それは俺が作ったプリズムで、俺たちが額に持っているプリズムよりは数段効力が劣るが、身についているだけで肌を強くしたり、魔力を上げたりする。持っていて損はない」

「・・・作れるものなんですか？」

「この人たちが例外なだけよ。普通は作れないわ」

「くつくつく、」

「ヴァルク、いい加減にしろよ。・・・あとは？」

「もうないです。ありがとうございました」

「また何かあつたら聞け。じゃあこいつの話だ」

「はい」

「明日、シリーズ王と王妃に会つ為にシリーズへ向かう」

「明日、ですか？」

「ああ。急だが、向こうに滞在するわけでもない。グレスティーヌに乗つて、王に挨拶して帰つてくる予定だ。ああ滝も見るんだつか」

「王に挨拶？私も？」

「ああ。ヴァルクの命令だ」

「もう少し言い方はないのか」

「本当のことだろ。まあそういうことだ。あつちの王も適当な所があるからな、畏まらなくていいぞ」

「そんなわけには・・・」

「それに、俺が側にいるから大丈夫だ」

「、ふはっ」

「なんなんだ・・・。そんなに斬られたいか」

「いや？・・・くくっ」

「お兄様。ガクはお兄様も経験されたことのない、人生初めての経験をしていります。応援しなくつてどうします」

「なんかむかつくんだが、気のせいいか？」

「あら？ お優しい姉上様はいつでもガクの味方ですわよ」

「・・・今ヴァルクとティルに同じ血が流れていることが確認でき
た、うん」

「姉上はガクが感情豊かになつて嬉しいわ」

「・・・」

「くつはつはつ」

「ふつ、・・・斬る。王^{王^{ウイ}キ}よ」「ガ・ク?まさか!」で?また私の手
を煩わせるの?」

「・・・いや、冗談だ」

「そつよね?・・・お兄様もよ?」

「あ、ああ分かつている」

「ふふ、そつよね?」とでお話しあれまじよ。今田はゆつくりして
明日に備えて?」

「あ、はいっ」

ティルさんの本気を垣間見て、放心している所に声を掛けられた
ので、少し声が上擦つてしまつた。

ティルさんは怒らしたらダメだ。ある意味、ローヴェンンドの王だ。

25・ガクフォンスの一日（前書き）

なぜか治し方がグロいです。『注意を！』

25：ガクフォンスの一日

ヤツキをティルに預け、俺は兵士の指導に向かった。

ガン！ ガン！ キイン！

いたるところで剣同士のぶつかり合つ音がする。俺が近づいて行くと、近くにいた兵士が気付き、「ガクフォンス様！」と叫び慌てて敬礼を取る。

それに他の兵士が気付き、全員が頭を下げてきた。

それに苦笑しながら

「久しぶりだな。俺に気にせず、続けてくれ」

そう言いつと一斉に顔を上げ、練習を再開する。

俺はこっちに歩いてくる短髪の若い男に声を掛ける。

「よおグライド、今日はどうだ？」

「お久しぶりです、ガク様。本日は、午前が剣で午後は魔法となつております」

「どうちもか。・・・なあ、おまえプリズム出せるみな?どれくらいの期間出していらっしゃる?」

「期間、ですか。・・・今は30分持つかどうか、ですね」

「30分? そんなに短いのか」

「はい。一度出すと、次は数日置くのが理想ですね」

「ティルの言つてる」とは本当だつたのか

「これでも長くなつた方なんですが。失礼ながら、ガク様はどうぞいいなのですか?」

「さあ、限界を感じたことがないんだが、一日はいけるな」

「流石、鳥神竜を召喚できる方は違いますね」

「鳥神竜か。今朝は召喚したらティルに怒られたぞ」

「はは、ですが皆久しづりの、手合させ、を食い入るように見てましたよ。ヴァルク様とのやりとりも」

「ヴァルクには、ああ言つたが実際、勘が鈍つたようだ。今日は俺も指導じゃなく、訓練だな」

「まさか。あなたの、訓練、に合わせられる者なんていないとはいませんよ!」

「一級騎士グライド、おまえがいるだろ?」

「俺だけ、ですか？」

「あとプリズムが使えるのは・・・同じ一級騎士アギアか」

「アギアは今日は午後からです」

「では午後から始めるか」

「ホントですか」

「おいおい、ヴァージスの血を引く者が何を恐がってる」

「いやいや、恐がってはいけないですし確かに一応王族ですけど、あなた方とは格が違う過ぎるんですって」

「・・・分かった。じゃあ今回は攻撃を放つだけでいい」

「本当ですか!」

「ただし、プリズム使えよ」

「分かりました!アギアにも伝えておきまわ」

「俺ですか！？ 隊長一人で頼みますよ～」

「大丈夫だ。今日はプリズムを使って攻撃を放つだけでいいそうだ
「何が大丈夫なんですかっ！ それにプリズムって、俺まだ使いこな
せないんですけど」

「訓練の一環だ」

「隊長と違つて幼い頃からの面識もないんですけど」

「少し前に同じ血が流れている。さあ行くぞ」

「マジですか

「マジだ。ついでにガク様にプリズムの扱い方でも教えてもらひえ」

「・・・分かりました」

「初めまして、ガクフォンス様。アギア・ジオスです」

「ガクでいい。話しさは聞いている。特に魔法が優秀だそうだな」

「ガク様には遠く及びません」

「何歳だ？」

「16です」

「4歳下か。プリズムは操れるか？」

「まだまだ波があります」

「自らの意思で全開にしたことはないだろ？一度プリズムを全開にすることも大切だ。今日は思う存分ぶつけて来い」

「はい」

「ではグライド、アギア行くぞ」

「「はい」」

「バリアを一面に張つておいた。まずはプリズムを出してみり

そう言って、自分もプリズムを出す。ところが2人の額にプリズムが現れない。

「どうした？」

「ちよ、っと待つて、いて、ください」

「？」

それから少し待つと、グラайдの額が輝きだす。

「ふう」

「そんなに時間が掛かるのか？」

「はい。特にアギアは・・・」

「つつ、だあつ！」

「おお・・・」

「隊長隊長つヤバイつ、暴走しそ

「覚醒するのは20歳か？」

「一般的には。俺はあなたのおかげで少し早かつたんですけど」

「どうか。アギア、プリズムが求めるままに俺に当たつて来い」

「でもこれつ、マジで」

「大丈夫だ。おまえ程度の力で俺は死なん」

「うう、じゃあ……水聖の初・【離水創】……」

「やつだ、来い。グライド、おまえもな

「では、炎聖の中・【追跡炎】……」

ツイセキエン

「はあ、はあ……やつぱり、化け物ですね。あなたは」

「やつか?」

「無傷つて、しかも攻撃、してゐる。いつは腹に、穴……うつ

「悪い、条件反射だ。ふむ30分弱が、いい運動になつた。グライドは大丈夫だな。さてアギア、生きてるか?」

「な、ん、とか」

「おひ、そりゃ良かつた。痛い所は?」

「ぜ、全身……」

「そつか。テイルの所へ連れて行く。ちよつと我慢しりよ

そう言つと俺は2人を抱ぎ、ヤツキと雑談をしているティルの元へと運んでいった。

「ガク、痛々しいのですが」

「だから治してやつてくれ」

「私のシアスメランテは」このよつたな使い方ではないのですが

「だが、単体なら【復水】より効くだろ」

「今2人ですけど」

「1人1人やれば単体だ」

「あの・・・2人とも苦しそうなんですけど・・・」

「ほら、ヤツキも言つてるし、今度からは気をつける

「はあ。 しようがないですね」

「ヤツキ、出でろ」

「いえ、見でます。治すんですね?」

「やつだが、酷だぞ」

「大丈夫です」

「・・・ティル」

ティルはプリズムとシアスメランテを出し、まずグライドの腹に切つ先を当てる。

「・・・（傷を癒せ）純志を示せ、『シアスメランテ』」

そう言つてグライドの腹に剣を突き刺す。

「ぐ、ああっ、」

「あやつ、」

ヤツキが息を呑む。

ゆつくりとティルが剣を抜く。

すると剣には血が一切着いておらず、グライドの腹部は光だす。

「次」

「アギア、叫ぶなよ」

「ちよ、まつ、、、「

「（傷を癒せ）純志を示せ、『シアスマーラント』」

構わずティルが突き刺す。

叫ぶと判断した俺はアギアの口を手で塞ぐ。

「つあ、つ、ぐ、」

ティルが剣を引き抜くと、傷が治りだす。

「す、じこ・・・」

ヤツキが口を押さえて田を見開く。

「ガク、高いわよ」

「勘弁」

「お兄様は知ってるの？」

「時々上から見てたな」

「まつたく・・・」

「訓練に怪我は付き物だ」

「やり過ぎです」

「そうか？」

「力の違いを考慮してあげなさい」

「加減はした」

「・・・まあいいです。2人とも大事に。では、・・・ヤツキ」

「つはい！」

ヤツキとテイルは出て行つた。違う部屋でお茶を再開するんだろう。

元気になつたが、未だ放心状態の2人に声を掛ける。

「どうだつた？色々良い経験になつたろ」

「つーえ、ええ。久々にあれしてもらいましたよ」

「あれ、おまえ初めてじゃないっけ？」

「・・・幼い頃、あなたに数度・・・」

「そりだつたか？アギア、おまえはどうだつた？」

「痛い治し方でびっくりしました」

「まあな。だが、よく効くだろ？？」

「はい、信じられないです」

「へへへ。・・・今日は終わりだ。」
「えー。ありがとうございましたー。」

ナハして俺の一回は終わった。

25：ガクフォンスの一日（後書き）

やつとヴィアルク、ガク、ティルの身長を決めました！
キャラ紹介に足しておきます。

訓練後は、ヴァルクが仕事を手伝えと言つてきたが、無視して部屋へ戻つた。

戻る途中でロウがどこからか飛んで来て、肩に乗つてきた。遊び飽きたか。

気にせず部屋へ入るとベッドへ腰掛ける。

ふう、と一息つくとロウの額が輝きました。

『随分楽しんでいたようだな?』

「腕が鈍つっていたようだったからな。訓練してきた」

『くくっ、付き合わされた方は堪らんな』

「何がだ」

『どうせ大怪我させたんだろう?』

「腹に穴が開いただけだ。もう一人は全身苦しそうだったが

『まだマシか。昔はもう少し酷かつたからな』

「やつか?覚えてねえ』

『 じいりでガク。あの娘をビリ四つへ。』

「 ヤツキか。ビリって、何が」

『 あの娘を見ていて何か思わないか?』

「 ああ好きかつて聞いてんのか」

『 うむ、おまえは直球男児であった。失念しておった、カワイイ乙女心など持つておらぬのだった』

「 当たり前だわ。ローソンド一強い男が、乙女心満点つてビリなんだ」

『 それはどうでもいいが、好きなのか?』

「 …… わあな」

そう答えるとベッドに手轉がり、目を閉じた。
浮かぶのはヤツキの笑顔。

・・・俺は常に戦いを側に置いてきた。

‘ 好き’ という感情が分からない。

言い寄つてくる女に、何の感情も沸かなかつた。ただ適当にあしらつていただけだ。

ヤツキへの対応に戸惑つてゐる自分がいるのは本當だ。
俺自身どうしたいのか分からない。

考えるのが段々面倒臭くなつてきた俺は、眠気に逆らわず、少し

早いが口ウの温もりを近くに感じながら眠つた。

『色々と何故氣付かぬ・・・天然か?』

そう、口ウが呆れた声を発したのも知りやう。

「ヤツキ行けるか?」

‘手合わせ’の翌日。お昼を食べた後、ガクさんが私の部屋の前に来て言つ。

「はいー。」

今日は王様に挨拶に行くことと、ドレスを着ていた。
黒の大人びたドレス。派手ではないけれど、胸元にプリズムの形

の宝石が埋まっていた。

いつもは隠れている本物のプリズムも、今日は首元で存在を主張していた。

ガチャ、と扉を開ける。ガクさんも正装なのだろう、いつもは戦いやすそな騎士っぽい格好だが、今日は、王子様だ。

いつも以上に格好良くて直視できない。

なのにさらに

「思った通りだ。似合っている」

なんて言われたら、もう心臓も顔も大変だ。

「行くぞ。用意はできている」

「はい」

飛行場ではグレスティーヌが待っていた。

ガクさんに促されて人が5人ほど乗れそうな、四角いマンホールみたいな上に乗ると、それはゆっくりと上に上がりだした。

びっくりしてビクッと体が動くと、ガクさんが「動くな」と言つ

て私の腰を引き寄せる。

ちょっと近い！近いから！！

それはグレステイーヌの胴の高さまで着くと止まった。

グレステイーヌがそれに近づいて胴を寄せた。

ガクさんが先に乗り、私に手を差し出す。私は少し躊躇したがその手を取ると、一気に引き寄せられた。

「グレステイーヌ、多少遅くなつてもいい、安全飛行で頼むぞ」

「ギャギャルル」

「ん」

グレステイーヌがゆっくりと飛びだす。

「グギャーーー！」

と、一声上げて。

すると

「ギャルルルー！」

とどこからか声が返ってきた。

「もう1頭の超高速竜、ハイウェイドリンクル・バルムだ」

「仲良いんですか？」

「そうだな」

そんな話しきをしながら、前回よりはゆっくり、グレスティーヌが飛行してくれたおかげで気持ち悪くなることもなく、夕方にシリー^スに到着した。

降りる所はやっぱり飛行場で、グレスティーヌに乗った時と同じ機械に再度乗つてグレスティーヌの背を降りた。

「ヤツキ大丈夫か？」

「はい」

「じゃあもう行くか

「もうですか。ああ緊張する・・・」

「くく、大丈夫だ」

そう言つて頭を撫でてくれるガクさん。どっちにも緊張するんですけど。

するとその様子を見ていたシリーズの人の一人がこちらに歩みよ^リ、頭を下げる。

「お久しぶりです。よつこそおいでくださいました。既に我が君は王の間におりれます」

「ああ。もう勝手に行つていいか?」

「相変わらずでござりますね」

「面倒臭いのは嫌いなんだ」

「承知しております。では、どうぞ」

「ん、行くぞヤツキ」

「え、はいっ」

え、ええそんな勝手に行つちゃつていいの?ねえ?!

「いいんですか?」

「何が」

「いや、勝手に・・・」

「長い付き合いだから大丈夫だ」

「そうですか・・・」

「ほら、もう着くぞ」

「ええー！」

「ん、ここだ。行くぞ」

「早い早い、待つてくださいー！」

「なんだよ

「ちょっと、心の準備が

「・・・よし、行くぞ」

「えええ」

私の願いもむなしく、扉はガクさんによって開かれる。

緊張で顔が上げれず、ガクさんの足元を見ながら着いて行く。
少し歩いた所でガクさんが止まる。

「お久しぶりです。ジェイナル王、ファレスピア王妃

「おお、よく来てくれた。相変わらず好青年だね、君は

「ふふ、そちらはあなたのお姫様かしら？」

・・・ん?なんかどつかで聞いたことが・・・、と思つて顔を上
げると

「おお、」

「おお、」

「うーん。」

「うーん。」

27・月夜の川の滝

そこにいたのは、半年前に海外旅行に行くと、家を出て行った、父と母。

「お父さん、お母さん・・・なんで?」

「まつ?」

ガクさんが横で驚いている。

「やつと戻つてきたか」

「でも記憶はまだのようね?」

「強く封印し過ぎたか?」

「あの時は気持ちが浮き立つてから」

「懐かしいなあ。新婚旅行で行つて以来だつたからなあ

「感傷に浸つてはいるといひ悪いですが、ビリーフとか説明をお願いします」

「あら、ガク君気付いてないの?」

「あの時から君は、女性に冷めた所があつたからな。覚えていないんだろ?」

「ちょ、ちょっと、海外旅行じゃなかつたの?」

「うん?ある意味海外旅行だろ?まあ本当は元の世界に戻つてきただけだが」

「メフイ、いえまだ夜月ね。この話しさまた後でしてあげるわ。今は夕食後、滝を見に行つてきなさい」

「滝?」

「ガク君もね」

「はあ・・・」

ガクさんは珍しく、戸惑つた返事をしていた。

「さあ、食事にしましょ。用意を」

「かしこまりました」

テーブルが用意され、次々に運ばれる料理。それらをイスに座りながら、ぼんやりと眺める。

どうこうことだらう？私はこちからの人間？ロウ兄とギン兄がなんかできたのもその為？

色々考えていろと、料理は並び終わつたみたいで、お父さんが声を掛けってきた。

「夜月、今は考えず食べなさい」

「あ、うん。でも、気になるじゃん」

「そのうち思い出すわ。気になるといえば、あなたこっちの言葉をしゃべつてることは気にならないの？」

「え？・・・あつ

「ん？・・・ああ

「まさかガク君も？君意外と天然だつたんだねえ」

「はは・・・、ロウが懐いてたんで、何も気にせず・・・」

「ああやつこえれば、昔ヴァルク君が言つていたよ。あいつの将来が心配だ。命が関わると勝負勘は抜群だが、変な所が抜けていろ、つてね」

「ヴァルクが？・・・そんなに抜けてませんよ」

「はははは、まあ国王になる気はないんだろう？」

「ええ、王はあいつのが向いています」

「なら、多少抜けていても問題ないよ」

「・・・」

「夜月はどうやってこいつちへ来たんだ？」

「ロウ兄とギン兄が、‘行つて来い’って感じで。危険な森だつたんだよ？もうちょっと安全な所にしてほしかったよ」

「ああそれはね、ガク君の居る所に送るようになつていたんだ

「え？」

「？」

「これも後かな。まあ食べ終わつたら行つておいで

「・・・ヤツキ、行くか？」

「はい」

「では、失礼します」

そう言つてガクさんは歩いて行く。

王の間を出てもガクさんは無言だった。何か考へていろようだつた。

さつきの道を引き返し、グレスティースのいる飛行場へ戻る。

グレスティースに乗ると、ガクさんが口を開く。

「グレスティース、滝まで頼む」

「ギャルル」

グレスティースはゆっくりと飛ぶ。今日は少し、雲が多く月を隠していた。

しばらぐすると見えてきたのは、巨大な三つの滝。

ドクンッ、・・・何?なにか・・・

グレスティースが真ん中の滝の正面に止まった時、雲が分かれ、欠けた月が姿を現す。

すると・・・・・

月夜に照りされ、滝が銀色に輝く。その光景は、神秘的だった。

ドクンッ、

あ・・・

『メフィリア、気をつかるのよ

『ママみてーきれいーー!』

『ええ、そうね。私達の国の勝りよ

『ほいじ?』

『わうよ。ロイウルトやギラティルト、そしてメフィリアもいつ
か戻つて来て、この滝と山のように輝くのよ。分かった?』

『?、はあ?』

『いい子ね』

た日の記憶。

そうだ。あれは幼かつた私が、夜の滝を初めて見
た日の記憶。
そして幼い頃のこの世界の、最後の記憶。あの時はママと、呼ん
でいた。

といつことはあの後、記憶を封印され、地球へ行ったんだ。

そう、私のこの世界での生活・・・メフィリア。

「メフィリア・シリーズ」

「メフィリア・シリーズ」

もう一度、ゆっくり咳く。

父はジェイネル、母はファレスピア、兄2人はロイウェルトとギラティルト。思い出した、全部。

そしてこの男は、ガクフォンス^{ヒト}王子。初恋の、相手。

「メフィリア？・・・ああ。あの生意氣な」

そういえば、ガクって呼び捨てだった気がする。

6歳だった私と、10歳だったガクさん。いや、ガク様？

「あ、あは。若き日のちょっとした過ちです」

「くつぐ、思い出した。どうか。ぱたり姿を見なくなつたからで
つきづ、どつかの王子の所に嫁いだのかと」

「ち、違いますよー私は昔から・・・」

と言いかけ慌てて口を塞ぐ。危ない危ない、あなたが好きだつた」と言つてしまつところだつた。

「昔から?」

「あ、いや、昔から・・・えつと」

「まあいい。ああそだ、その話し方やめないか?思い出したら違和感があり過ぎるんだが。俺に敬語も敬称も付けたことなかつたら」

「ですから、あれは若き日の・・・」

「いいからやめる。前みたいにガクでいい。敬語もいらねえ」

「う、うん。分かった・・・」

「ん、それでいい。しかし、随分と変わつたもんだな」

「そうです・・・・・そう?」

「ああ、綺麗になつた」

突然、後ろにいるガクが耳元で囁く。低音が頭に響く・・・綺麗になつた?私が?

理解すると、顔の熱が一気に上がる。耳まで熱い。

「くくく、真っ赤だぞ」

「う、うるさいこいつ」

なんかキャラ変わった?」「うん、戻った?昔は確かにこんななんだつた。

いつも苛められて・・・でも好きになるつて、私も!?いやいや、あの時から顔が良過ぎたから。うんそう、あの甘い顔が。

「さて、戻るか。グレステイヌ」

「ギャルル」

「なあ、どう呼べばいい?メフィリアか、ヤツキか」

「あ・・・」

今はもうメフィリアとしての記憶が戻った。でも、ヤツキとして過ごした日々が、消えたわけじゃない。

でも、ここで生活していく以上・・・

「メフィリアでお願い」

「分かった」

再び王の間へ戻ると、料理は片付けられ、テーブルだけが残っていた。

「おかえりなさい、メフィリア」

「・・・ただいま」

「ガク君も思い出しかね？」

「はい」

「それは良かった。さあ話しの続きをしよう」

2人とも元の席に座るとお父さんが話し始める。

「ファレスピアとの新婚旅行が、地球だつたんだ。若かつたからね、適当に時空を操つたら地球に着いたんだ。それが始まり。

私達の能力は、時空を操れる以外に、どこの言葉も理解し話せる能力がある。それに魔法が使えるだろう？だから、犯罪者を次々に捕まえてね？お金を稼いで家を買つたんだ」

おいおい。

「で、お金が溜まつて十分生活できるようになつたんだが、半年地球に滞在してたからそろそろ帰らなくちゃつてことで、帰つたんだが・・・どうしてももう一回行きたくてね」

「それにあつちの、ママ、つていうのは魅力的だったわ。だからメフィリアに呼ばせたの。ふふ」

・・・。

「ロイやギラに地球を見せておくのも経験だと思つて、1年の家族旅行に出かけることにしたんだ。でもお転婆だったメフィリアは、きっとこっちの世界の記憶を地球で話してしまうと判断してね、地球に着いてから記憶を封印したんだ」

まあ確かに転婆だつたけど。

「それがダメだった。記憶の封印には、自分より力が格段に弱い者でも、最低3人はいる。それをファレスピアと2人でやつたら、力が底を尽いてね。加えて地球だった所為か、力の回復が急激に落ちたんだ。結局、時空を操れるまでに回復したのは10年後。今から半年前だね」

「でも地球での生活も楽しかったわねえ」

「そうだな。ロイとギラに、能力を使えるようになつたらこいつらの報告をさせていたから心配もいらなかつたしなあ」

なるほど、時々2人が数日帰つてこなかつたのはその為か。

「また行こつか、ファレスピア」

「そうね」

「ちょっと待つて、私は！？卒業してない！」

「あら、記憶が戻つたのなら、卒業は必要ないでしょ？」

「でも、桜花とか・・・桜花を連れてくるのは無理?」

「無理ではないが、あちらの『両親が認めないだろ?』それに桜花ちゃんも信じるかどうか」

「でも、一度地球に帰りたいの」

「分かつたわ」

「俺も行つたらいけませんか?」

「ガク君が? ローヴェンドはどうするんだ。君達の『両親も今・・・』

「

「放浪してますね。でも、ヴァルクとティルがいたら大丈夫でしょう」

「ふむ」

「娘さんの護衛としてでは、ダメですか?」

「・・・よしつ、娘をしっかり守つてくれよ?」

「はい。任せてくれ」

そこで私は横のガクを突き、小声で聞く。

「ちゅうど、どうこう」と?」

「いや？俺も地球を見たいな、と」

「金色の瞳に青髪なんて地球にはいないわよ？」

「ええればいいだろ？？」といふか何で小声なんだ？」

「いや、なんとなく」

そこで普通の声でガクが話しだす。

「誰が地球へ送つてくれるんです？」

「私達2人とあと、3人必要か。メフィリアはもう一人だろ？能力が開花していくもおかしくないんだが・・・」

「やつぱり地球へ行つていた影響かしら？勝手に操り方が分かるようになるのだけど」

残念ながらサッパリだ。

「今回は2人共、私達で送るうか」

「そうね」

そうして話は終わり、私は久しぶりに、自分の部屋、で夜を過ごした。

29・戻った感情

『ガク、あれ取つて！』
『またおまえか。ガク様、だろ』
『ガク、早くう！』
『はあー。・・・ん』
『ありがと、ガク！！』
『きやあ！何するのガク！』
『・・・生意氣なメフイリアが悪い』
『うえええん、ガクが苛めたあ。ガクきらいい！』
『・・・取り消せ、嫌いじゃないだろ！』
『うわああああん』

「・・・・・ん。夢、か」

懐かしい、昔の夢。樹に生っていた果物を取つてと、その日も呼び捨てで言いに来たメフィリア。

なんだかむかついて、もぎ取つた果物をメフィリアに渡す前に、頭上で握りつぶしてやつた（幼少期から握力ハンパンない）。

そしたら、果物の蜜がメフィリアの頭の上にダラダラこぼれて、メフィリアは泣き出し、俺を嫌いと言ひ出した。それが気に入らなくて、怒鳴つたら更に泣かれて・・・うるさかつたから放つて城に帰つた。

・・・後からティルに散々怒られたが。

その後姿を見なくなり、初めのほうこそ寂しく感じていたものの、モンスター狩りに目覚めてからは思い出すこともなく、女とも幅広く関係を持ち感情も消え、メフィリアのことは全く頭になかった。

あとから考えてみれば、あれを初恋と呼ぶのだろう。

漆黒の黒髪と、輝く大きな瞳。ころころと変わる表情につられていたあの頃が、俺自身、一番感情豊かだったかもしれない。

「ふつ、懐かしいな・・・」

そう呟き、ベッドから起き上ると顔を洗つ。
そうか、口うは置いてきたんだったか。

服を着替えていろと、メフィリアの気配がした。次いで扉を叩く音がする。

「ガク？ 起きた？」

「ああ、今行く」

扉を開けると、当たり前だがあの頃より随分と大きくなつたメフィリア。

思い出してフツと笑いながら頭を撫でれば、メフィリアが戸惑いながら顔を赤くした。

それを見て暖かい気持ちになりながら、迎えにきたであるメフィリアに案内を促す。

「メフィリア？」

「え？ あ、あのうと、朝食」

「何どもってんだ」

「いやほり、ね？ うん、行」

「へへへ」

「もうひ」

ふて腐れるメフィリアを宥めながら、王の間へ向かつ。

既に料理は並んでいて、ジョイネル王とファレスピア王妃、ロイ
トギラもいた。

「やあガク君。よく眠れたかい?」

「はい。メフィリアとの懐かしい夢まで見れました

「夢? それはいい。あとで聞かせておくれ

「はい」

「ねえ、それ私がバカやつた夢、とかじゃないよね?」

「さあなあ

「あ、ちよつといー」

騒ぐメフィリアを置いてイスへ座ると、その横にメフィリアが座
る。

今を楽しんでくる自分がいる。この頃感じるのは、元
かしくって笑う。

「なんだガク、ちょっと見ねえ間に変わったな

ロイが話しかけてくる。

「そうか？ 戻つただけだ」

「？」

「なあ？」

「え？ あ、うん」

「良かつたね、メフィリア。 まあ揃つたし、いただこつか

「そうね」

ギラが言つと、ファレスピア王妃が応える。

「メフィリア、どうだつた？ ヤツキ、としてのヒーラの世界は

「あーあのねえ、来た瞬間モンスターに遭遇したんだからねーー！」

「でもガクが助けてくれたら？」

「えつ？ うん、 そうだけど。 なんで」

「最初からそういう予定だつたからな。『予約結合』ひとつてな、メフィリアの場合は、 次に時空を渡る時、ガクの元へ行く、っていうことになつてたんだ」

「なんでガク？」

「ガクが一番強いだろ？ なにが着いても安全だ。違うか？」

「そうかも、だけど。ガクに何も言ってなかつたの？」

「その方がおもし・・・いや、ガクに断られると思つて？」

「なるほど。ヴァルクと一緒に、ロイも斬られたい性質か^{タチ}」

「待て待て。俺そんなMじゃないし、むしろうつてかヴァルクもあきらかうだり！？」

「まあどうでもいいだろ。大人しく斬られとけ」

「早まるなつて！ あ、そつだ昔の夢見たんだつて？ どんな夢だつたんだよ？」

「くはっ、おまえ面白いヤツだつたんだな」

「おまえは相変わらずだな。で？ 夢は」

若干、ロイがイラつきながら聞いてくる。それに俺は、メフイリアの方を向きながら笑つて応える。

「ああ、メフイリアに果物を取つてやつた夢だつた」

「なんだ、普通だな」

「・・・待つて、そんな普通な記憶はないよ?」

「覚えてねえだけだ。人の好意を忘れるとは

「そ、そだつけ? うーん・・・」

「ところで、いつ2人は地球へ行くんです?」

ギラが聞く。

「もう今から行つたらいいじゃねえか。俺らもいるし

「そうだな、そつしょつ。ヴァルク君には私が言つてしまおう。ガ
ク君、いいかい?」

「はい。ありがとうございます」

「メフィリアも、いいわね?」

「う、うん」

「送り方はどうあるんだ?」

「『期限結合』にしようとか

「了解。じゃやるか、2人共こつちく」

「え、早くない? もう?」

「、急がば回れ、だ」

「バカ?回つてどうするの。、善は急げ、でしょ」

「おひぎり、それだ」

なんだかんだ言いながら、魔法円の準備は進んでいくよ!だ。

「はい、これに乗つて」

言われた通り、書かれた円の上にメフィリアと乗る。

「じゃ、行くぞ?あ、向こうでは、夜月、だからな」

「ああ

「あ、期限は夜までな」

「ああ

「ああ、それと・・・」

「一気に言え

「ああ、悪い最後。向こうの家の服が置いてある。それ着ろよ

「ああ

「じゃあ・・・」

そう言ひつゝ4人が何かを呴き始める。

『・・・・・我等は望む。【地球】<

ああ、久しぶりの我が家。
近所の家よりも随分と広い我が家。
まさかまさかの我が家。

「ああ久しぶり」

「1人耽つてないで、案内しろ」

感動の再開は、リアル王子様によつて壊された。
つて・・・

「何で日本語?」

「コレ、貰つた」

そう言つてガクが見せたのは、中指の指輪。

「プリズムと似た物だろ?」

「へえ・・・まあどうぞ」

「ん」

中に入つてリビングに向かう。ロイとギラが度々来ていたんだろ
う、変わらずキレイだ。

「あ、携帯！」

「けーたい？」

ソファに放り出してあつた携帯を見ると・・・ん?
未読メールゼロ、着信履歴・・・ゼロ?

そ、そりゃメールも電話もしない方だつたけど、これは・・・悲
しい。

「おい? 哀愁漂つてんぞ」

「今はほつとこでつ

「・・・なぐさめいやうーか?」

び、つづくりしたーーー!

「い、いきなり耳元でしゃべらなこでよー」

「ん？落ち込んでるようだつたか」「ひい

「もーひ

となんとなく送信ボックスを見てみると・・・あれ？

この日付は異世界あいせかいへ行っている間の日付。不思議に思い開けてみると・・・

「ロウ兄、いや・・・ロイド・ギラカーーー！」

「落ち込むか怒るか、どうちかにじひ

「だつて、だつて人の携帯見て勝手に返信するなんて・・・」

「よく分かんねえけど世話しててくれたんじゃ？」

「ええ？あつ、電話してみひーー！」

桜花、桜花つと・・・・・ブルルルル・・・

『はい』

「あつ、桜花？」

『夜月！？帰つてきたのーー？』

「えつ？うん、え？知ってるの？」

『うんっ！口ウさんとギンさんから聞いたのー。やっぱあの2人は
王子様だったんだね！？』

「え、うん？ そうだね・・・？」

『今、家？』

「うん」

『じゃあ今から行くからっ、待ってね！・・・普ッ普ーップー・・・
・』

「切れた・・・」

「友か？」

「うん、今から来るって」

「そうか」

「あ、服着替える？」

「ああ」

見渡すと・・・あれかな？って制服！？

「は？なんで・・・」

「そこには私の高校の女子の制服と、男子の制服が一着ずつ。

「」たなものを着るのか？動きにへりつだな

「いやそれは、学校の制服で・・・もしかして今日登校日？」

「？なんでもいいが、これを着るんだろう？」

そう言つて手に取る。

「ガクさんがあんまりいやブレザーか

「あ？」

「いえなんでも」

「？」

「ねえガク。違う服あるよ？動きやすこのが。そつち着る？」

「いや・・・これ着て学校行くんだらう？」面白そうだ

「え？ガクも行くの？」

「俺のも用意してあるんだ。行くんじゃないのか？」

「とりあえず、今日の確認を・・・」「

冷蔵庫に貼つてあるプリントを見る。今日は・・・午後から登校

日。

「はあ」

「どうした」

「午後から登校日だ・・・」

「午後から?」

「うん、あれは午後から着るの。今はやっぽり、違うの着よつ?」

「別にいいが・・・」

「じゃロイの部屋行」

階段を上り、ロイの部屋に入る。

「うーん、何がいいかな?シンプルにジーパンにティーシャツでも
いいか

「あれは何だ?」

「何?ああテレビ?これを見ると・・・」

『今日の1位はおとめ座のあなた!周りからチヤホヤされて気分は

天狗。鼻は天まで届くでしょ」つい、』

いや、よく分かんないけど。

「鼻が天まで届くのか？初めて聞く魔法だ」

「え？違つよ、違つからー」この世界に魔法なんてないからー」

「やうなのか？だが今」

「ほりひ、じれどひへ・つん、じれこしょひー。」

説明が長くなると思った私はテレビを消し、素早くガクの前に服を差し出す。

「着替えたる正面の部屋来て？私も着替えてくる」

「ああ」

返事を聞くと、自分の部屋へと駆け込んだ。

「何にじょひかなあ

どうせすぐ着替えるんだよねえ。
うん、軽い服装でこいつ。

「これと・・・これでいいじゃつ」

夏らしくロングタンクトップと短パンにした。

ロンロン、

「はーいー待つて、もう行くー。」

ドアを開けると・・・

「ツイイ・・・

「は?」

「いえいえ

ポロシャツにジーパン。ただそれだけ。
元がいいつていうのは反則だよね。

恨めしげにガクを見ると、玄関のインター ホンが鳴った。

「桜花だ。行こ」

ガクを連れて1階へ降りる。

「はーい！桜花？」

「うん！」

ロックを外し、ドアを開ける。

「桜花！」

「夜月！」

桜花を中心に入れ、きゅーつ、と2人で抱き合つていると、後ろから声がした。

「メフィリア」

30・地球のHIN様（後書き）

いつも見てくださつてありがとうございます！

TeaとSeaの響きが大好きなティシーです。

なんだが30話突破しちゃつて、驚きです。

誤字脱字・感想等、大歓迎です。返信しないなんて、

現状みたいなことは致しません！

これからも完結目指してがんばります！

31・増えた異世界人

その声にパツと振り向く。

「『めんガク。紹介するね。この子が親友の桜花』

「・・・」

「桜花？この人がガクフォンス・・・って、大丈夫？」

「ちょっと待つて、時間を頂戴。まさかリアル王子様がいらっしゃるとは夢にも・・・」

「あ、言つてなかつたつけ」

「・・・よし、オーケー。初めまして桜花です。夜月がお世話になつてます」

「ああ、ガクフォンスだ。ガクでいい」

「ガク、もうちょっと挨拶の仕方ないの？」

「何がだめだつた？」

「初対面の人に『ああ』つてどうよ」

「だめなのか？以後気をつける。まあ上がれよ

「あ、お邪魔します」

「ちょっとー私の家！」

前を行くガクについていきながら、桜花が私をつつく。

「ホントに王子様じゃん。私金色の瞳なんて初めて見た！髪が青だから若干、不良王子に見えるけど、メチャメチャ格好良い！」

「でしょ？カツ」「良さは認める」

「ああ、で？恋してるんだ？」

「はっ！？」

「隠すな隠すな。桜花ちゃんには分かるから。でも私は殺生丸様みたいな銀髪の人人がいいなあ」

「殺生丸！？犬夜叉じゃん」

「うん、だから現実でそういう人がいい」

「そんな人いるわけ・・・・・・」

いる。バリバリいた。銀髪で金色の瞳で、強い。いた。そういうえばリアル殺生丸がいた。

「・・・いるんだ?」

「こゝ」

「それはどちら様?」

「王様俺様ヴァルク様」

「恋に壁はない」

「マジで? 壁つていうか、まず越えられない空間があるよ! つな気がしますけど」

「なんとかなるでしょ。夜用が行けるんだから」

「うん、まあなるけどさ。桜花の両親が・・・」

「大丈夫! ウチ放任主義だから」

なんだか行く気満々な桜花。そりや私も連れて行きたいとは思つてたけど、こんな簡単でいいの?

リビングに着くととりあえず3人で座る。

すると・・・

「ヴァルク・・・」

「ガク? どうしたの?」

「外」

「？」

外を見てみると・・・ちまたで「わざの（～）リアル殺生丸がいた。

「チツ」

「王子様が舌打ち・・・やつぱり不良王子様？」

「いや、違つから桜花。確かによく舌打ちするけど、不良じゃないから」

弁解しているとガチャ、ヒドアが開く音がする。

ん？ 私、ロックしたよね？

足音が段々近づく。そしてリアル殺生丸はリビングに入ってきた。

「ガク。1人だけ旅行とはずるいじゃないか？」

「王が勝手に来るんじゃねえ」

「勝手ではない。テイルとロウが悪いと言つた」

「ほんとか？」

「まあ少しの間だがな」

「リ、リアル殺生丸様・・・」

「落ち着いて、桜花。殺生丸だけど殺生丸じゃないから」

「殺生丸？私はそんな物騒な名前ではない」

「やる」とは幼少期から物騒だけどな

「おまえも変わらんだらう。さて娘、私はヴァルクだ。おまえは？」

「桜花、です」

「王か？」

「オウカだ、バカ」

「兄上様にバカとはなんだ」

「きよ、兄弟なんですか！？」

「腹違いだがな」

「不本意ながらな」

「似てるでしょ？威圧感タップリな田と、無駄な色気が」

「うん、似てる」

なんて話を延々と4人（私と桜花中心）でしゃべり続けていると、時計は12時を指した。

「ねえ登校何時からだっけ？」

「1時半」

「じゃそろそろお昼行こうよ」

「やうしそうか」

「どこか行くのか？」

「うん、お昼食べに行こう！何食べたい？」

「なんでも」

「じゃ、近くのファミレスによくない？」

「ふあみれす？」

「あ、いいねえー！」の2人には絶対似合わないけど、桜花、服替える？制服・・・

「大丈夫！ありがとうさ、行こう？」

「うん！」

「よく分からんが金がいるんだろ？・・・」
「ひどい

「え？ なんで？」

「ロイに貰つた。好きなだけ使え、と」

「・・・これ一円使う金額じゃないよ。ま、いつか 行こう。」

なんだか諭吉さんが、何枚も見え隠れしている財布をガクのポケットに押し込むと、桜花と、はじやきながら家を出た。

「なんで俺がサイフを持つんだ？」

「私達が持つてたら違和感たつぱりでしょ？」

「そうか？」

「さう

話していると徒歩2分のファミレスが見えてきた。あー、やっぱり混んでる。

「ちょっと待たなきゃいけないかも

「んー、でも他の所行くのもねえ

「まあ待つのもこよ

「そうだね」

「あ、ガク。さつきもメフィリアって呼んだけど、」
「うちでは夜月だよ！」

「ああ、そういうえば」

「ヴァルクさんどうしよう？外人でもいけるつていうか髪と目、2人共変えないの？」

「ああ、そういうれば」

「ふむ、そういうえば」

「もういいんじゃない？」の際、ムダに田立たせとけば？」

「名前は？」

「ヴァルク、ティレイにしろよ」

「何故私が、父上の愛称を使わなければならんのだ」

「ティレイ？」

「ティファレイマス。俺達の父親の名だ。略してティレイ」

「ガクは漢字に直すと、学[?]いや額^{ひたい}にプリズム出るから額^{がく}?ティレイさんは帝麗かな?ヴァルクさんには合つてそうだけど」

「なんか面倒臭いから、カタカナでよくない？」

「そうだね」

ファミレスのドアを開けると、いらっしゃいませーーといつ元気な声が聞こえた。

「何名様で？」

「4人で」

「かしこまりました。こちらの席へどうぞ」

案外空いていたらしい。窓際の席へ座ると、いたるところから歓声が上がる。主に黄色い。

「ちょっととちょっとーー誰あれ？芸能人？」

「カッ！良すぎるんだけど！」

「ホントに誰！？」

「私銀髪の人のが好みかも！」

「ええ！？青髪の人のがイケメンだよーー！」

「どいて、見えない！」

瞬時に店内の注目は、私達の前に座る2人へ。当の本人達は慣れているのか全く気にしていない。店内を珍しそうに見渡すだけだ。

「イケメンも大変だね

「くく、羨ましいか?」

「はあん!?

「ちよつと、夜月!-」

「あ、『』めん」

「イチヤつくなら家でね」

「今ビニもイチヤついてなかつたよね」

「モーおお?」

「そり」

「しかし狭いな

「ああ、足がきつ」

「あなた達が長すぎるんですね!-」

「まあまあ、何頼む?」

「ハンバーグ!-!」

「夜月、そろばっかだね」

「肉」こそ全て…」

「ああそう。まあ私もそれでいいや」

「ガクとヴァルクさんは？」

「ヤツキと同じのでいい」

「私もだ」

「じゃハンバーグ4つだね。すいませーん！特大ハンバーグ4つで
！」

31・増えた異世界人（後書き）

犬夜叉を知らない方、すみません。
でも、殺生丸はカツコイイと思います。

高速で出てきた4つの特大ハンバーグ。

氣のせいからも視線を感じる。

「夏休みだからねえ。学生も多いよね」

「うん、まあ氣のせいか女の子ばかりだけどね？」

「ヤツキ、やつきから時々光っているが、なんの魔法だ？」

「うん、あれは魔法じゃなくて、カメラのフラッシュだよ」

「ふりひしゅ？」

「お2人がカツ『良過ぎて、写真撮りたくなるんですってー』

「何いじけてんだ」

「こじけてないよ。ちょっと田障りだな、とは思つたけど

「消すか？」

「ヴァルクさん、物騒なこと言わないでくださいよーー!!」せそんな

所じゃないですかー！」

「殺すとは言つてこないだろ。気絶させよつかとい・・・」

「気絶もダメー問題になるからー！」

「なんだかんだ言つて食べるの早いなヤツキ」

「まあね。特技ですから」

得意気に言つと、背中にビンタが飛んできた。
イタイ。

「何すんの、桜花」

桜花は、小声で怒つてくる。

「好きな人の前で微妙なアピールをするなー！」

「いやアピールはしてなーもうちょっとこう・・・おじとやかにでききないの?夜用つて一応姫だよね?」

「う、うん、一応?遠い昔の記憶だよね」

「ならば記憶を呼び戻せー！」

「ムチャだ・・・って『ザート』忘れた」

「ちょっと、話聞いてた?」

「うん、とっても。おしゃかに食べればいいんだよね。すいませーん、追加お願いしまーす」

そう言つと女の子が飛んでくる。

「はーっ。」注文は?

バッチャリ、ヴァルクさんを見て。オネーサン、オネーサンこっちだから。

「みんなどうする? 私バニラアイス」

「甘いのか?」

「うん、苦い飲み物もあるよ?」

「じゃあそれ

「私もだ」

「桜花は?」

「ストロベリー」

「じゃあバニラとストロベリーが一つずつで、コーヒー2つ

「異なりましたっ！」

数分でやつてきたコーヒーが2つとアイスが2つ。すでにハンバーグは食べ終わっていた。

「どう？」

「ああ、悪くない」

「・・・」

「ヴァルクさん？」

「おまえ苦いの昔から無理だろ。なんで選んだんだ」

「いや、克服したかと・・・苦い」

「ヴァルク、さん？」「・・・食べてみます？」

桜花がストロベリーアイスを差し出すと、ヴァルクさんはすぐさま飛びついた。

「つむ

「ガクも食べる？」

「いや、いい。おまえが食べろ」

「やっぱりバニラは美味しい」

「ストロベリーでしょ」

じつくり味わいながらアイスを食べ終わると、会計へ向かう。

テーブルから出たガクの肩を叩き手招きする。耳を寄せたガクに

「ガク、あそこでお金出すの。で、財布から一枚出して『釣りはない』って言つて」

と、告げた。

「分かった」

財布に入っているのは全て万札だ。絶対に足りる。

レジに立つ女の子はソワソワしてくる。

ガクの少し前を私が歩いて、先に金額の書いてある紙を渡す。
それを女の子が読み上げようといつといふで、ガクが諭吉さんを
出した。

「釣りはいらねえ・・・」

「・・・やめやめ――」

「ふはっ」

「え？...」

店を出てから桜花が詰め寄つてくれる。

「何言わせんの」

「だって、絶対似合ひと思つて。ちょっとタイミング早かったけど、良かつたよガク」

「ん？ ああ

「わたくし、帰りますか」

帰り道、なんだが一ニヤニヤが止まらなくて、桜花に数回叩かれながら帰宅した。

再びリビングでまつたりしていたが、時計が1時を指したのを見て、慌てだした。

「桜花、もう行かないと」

「え、あ

「・・・ガク、やっぱり待つてくれない？ ていうか不自然だよね。いきなり行つたら」

「容姿が田立つのが一番だけだね」

「うん、普通の授業ならまだしも、今日は全校集会でしょ？」

「あれ何するんだっけ？」

「さあ。生徒会が、毎年何か企画するらしいよ」

「ふうん？まあ2人には待つてもらつた方がいいかもね」

「私はそろそろ戻るぞ。また来い、オウカ。城に住ませてやる」

「え、」

「不満か？」

「い、いえー是非ともよろしくお願ひしますー。」

「ああ」

「（ちよつと？あれはどつこつ風の吹き回しつつ）」

「（知らねえよ。気まぐれだらう）」「

「（気まぐれで城に呼ぶの？）」

「（昔はな。この頃は知らねえが）」

「まあいいや。じゃガクは、待つててね？」

「分かつた」

返事を聞くと制服を持つて、桜花を連れて着替えに行く。

「おい、ヴァルク。あいつどいつもりだ」

「オウカか？久々に面白い娘を見たと思ってな」

「あ？ビービーへんが

「くく、私の勝手だ。放つておけ」

「おまえに泣かされた女は数多く見てきた。あいつはメフィリアの友だ。今回は放つておけねえな」

「随分と入れ込んでいるようだな？おまえこそ散々泣かしてきただらう」

「うるせーよ

タシタシタシタシタシタシタシ

「じゃ、行つてくるからー。2時間経つても終わらなかつたら勝手に

帰つてくれるから

「あ

「行つてきまーすー」

「で? こつぱは挙げる

「は? 何の話だ

「あ? まだ言つてないのか

「ん? 何が

「ガク、好きなのだう? いい加減認めたらどうだ

「・・・」

「ああそつこえば、学校とは男子も多こりじこな?」

「ナウか

「おまえより性格も顔も良い男が、多くいるだらうな?」

「さうか

「何かの間違いで奪われるかもなあ?」

「・・・俺に殴りじる?..」

「学校へ乗り込んで行つたらどうだ?アレを着て」

「・・・プリズム使わなきや分かんねえな」

「さて、そろそろ時間か?」

そう言つと、ヴァルクの体が光りだす。そして光は包むように丸くなると、段々小さくなり、消えた。

とりあえず、着るか。

サイズは合つているが・・・動きにくいいな。
ネクタイを緩め、ボタンを2つ開ける。

「ん、こんなもんか

次にプリズムを出すと、目を瞑り人の気配に神経を集中させた。

駅まで徒歩5分、学校まで電車で15分。

「ギリギリだね」

「うん、次の電車じゃ間に合わなかつたよ」

「あー、電車数年ぶりくらいの感覚」

「はは、向こうは魔法とかの次元だもんね」

「うん、でもなんか向こうの世界に違和感感じるのは？」

「夜月も、元は向こうの人なんでしょう？」

「うん、メフィリアっていうんだけどね」

「ふうん。口うるさいやギンちゃんもだよね」

「うん、ロイウェルトとガラティルト」

「ホントに違う世界なんだねえ」

「・・・桜花本氣で来るの？」

「行きたい」

「危ないかもよ？」

「得意の飛び蹴りがあるから大丈夫」

「・・・」

「でも夜月が迷惑ならやめる」

「それはないよ！でも、ヴァルクさんは難しいよ？」

「それは分かつて。あの顔は誰でも落とせそうだもんね」

「うん、ガクもね」

「あ、そういうえばいつ告ぬの？」

「えつ？」

「何、告られるの待つ気？」

「そんなんじゃないよ。一生片思いの予定」

「は？」

「だつて無理つて分かつてるもん・・・」

「アンタばか？恋は突進してなんぼでしょう。何その消極的な考え方」

「突進は行き過ぎだと思つ。そりや桜花みたいに、高校生ながら大人の色気だせたらいいけどさあ」

「アンタねえ、その顔持つといて何言つてんの。今まで告られなかつたのは、口ウさんとギンさんでもダメだとかいう、理想が高過ぎる思考が周囲に漏れてたからよ。あ、あと私が睨み利かせてたのもあるけど」

「ロウ兄とギン兄の顔は、毎日見てたら慣れてくるもん」

「いいなあ。写メ欲しい」

「ヴァルクさんは？」

「それはそれ、これはこれ」

「ああそう」

「アンタこのガクさんの写メ欲しくないの？」

「・・・欲しい」

「ちょっと、髪が不良王子っぽいけどね」

「だから違つって」

桜花との久しぶりの会話はすごく楽しかった。

話していたらあつとこつ間に電車は目的地に着き、すぐ前に見え

る学校へと向かう。

校舎に入ると、体育館へ行く様子だった。

「これ直^{ちょく}で体育館?」

「みたいね」

冷房の効いた体育館へ入ると、ズラリとイスが並べてあった。

壇上は幕が引いてあった。

「どうあえず、座^さり^うつか」

「うん」

各クラス横並びで、前から3年、2年、1年といつ順だ。

桜花の右横に私が座る。

しばらくすると、座ったみたいで、いきなり電気が消える。

一瞬ざわめくが、幕が開きスポットライトが当たられ、マイクを持った生徒会長が出てくると、一斉に沸いた。

今の生徒会長は、勉強はそこそこのらしいが、バスケット部の元エースで、2年生の時にケガで引退して生徒会長になつてから、ものすごい人気だ。

顔が良いのもあるんだろうが、男子からもノリの良さでカケている。

『みんな暑い中悪いなー今日は面白い企画を用意したから存分に楽しんでくれーー!』

「」「」「」「」

とりあえず、私達もノッておくが・・・

「桜花、うるさいよ」

「私に言つた。でもやつぱり会長もカツ「良いよね」

「まあ……」

「ヴァルクさんとガクさん見た後だと、見劣りするけどね」

「うん」

『それでは!今から名前を呼ばれる生徒は壇上へ上がつてください!

1年A組・伊藤・・・

呼ばれた5人の生徒が壇上へ上がる。全員1年生だった。

「何するんだろうね

「たる」

すると新たに5人の生徒が現れる。

『それでは始めます！世紀の大告白ーー！』

「…………わああああああああ！」

「吉田川一？」

「すごいね。
1年生から告つてく感じかな？」

『えー、一人ずつ参りましょ。皆様暖かい目で応援をお願いします

『勇気あるトップバッターわあ、1年A組・一君ーーー!』

『では、マイクをお渡しします』

・・・1年A組・一
はじめ 頑場です！伊藤
姫さん、オレと付き合つ

てください!』

「 「 「 わああああ 「 「

異常な盛り上がりを見せながら、5人の告白は終わった。
出来たペアは3組で、全校生徒の前で告白とあって、流石にブサイクはいなかつた。

『次々参りましょう！2年C組・富城 桜花さん、2年D組・・・』

「は？ 呼ばれちゃつたよ」

「うん、がんばれ」

次にまた5人が呼ばれ、全員2年生でその中には桜花も入つっていた。

桜花に告白した子は、野球部副キャプテンの子だった。

桜花の返事は・・・

「ゴメン。私には心に決めたリアル殺生丸様がいるの

その断り方はなくないかい、桜花ちゃん。意味が分からぬと思うよ？」

無事に（？）告白を断つた桜花が帰つてくる。

「何あの断り方？」

「だつてヴァルク様がいるもの」

「うん、分かつてねけど」

「夜月、私ここにじやもひつ恋出来なー」

「はい？」

「だつて誰もカッコ良いと思えなー」

「・・・」

3年生の告白も終わり、終了かと思ったら・・・

『それでは図々しいですが！最後にこの私、尾美おび 飾かざるが、告白させ
ていただきます！』

「「「わやあああああああー..」」

ものすゞこ歓声。いや悲鳴？

『えー、2年の組・深頼 夜月さん。壇上へ上がつてください。』

「へ？」

「うわ、ここできたか。がんばれ夜月。一人だよ」

「えええ、どうしよう桜花」

「アンタにはガクさんがいるでしょ。すっぱり断つてきな

「そうじゃなくて・・・」

「ほら、早く行きな！」

「えええ」

私はビクビクと壇上へ上がる。

ちょっと、これきつい。視線がイタイ。超イタイ。

『深頼 夜月さん、一目惚れでした！オレと付き合つてください！』

『――――ぎやあああ――』

「――――ぎやあああ――」

え、ええ何て言えばいいんだっけ？

ガクが好きだからムリです？これでいいか。

「えっと、ガク『悪いな、ここは俺のなんだ』

33・阻止せよ（後書き）

名前適当ゴメン。特に、ハジメ ガンバ。よく頑張った

突然私を後ろに引き寄せたのは、青髪と制服を乱した・・・ガク。

「ガク・・・」

なんで・・・

ガクは私を見ない。

「こいつは渡せねえんだ。手え出さないでもらえるか」

先輩が驚きを隠せない中で、不敵に笑うガク。

「え、え!? ちよ、

『き、君は？』

「ガク。メフィリアの……婚約者だ」

「…？」

『メフィ？』

「ああ違つたか、ヤツキの婚約者だ。つーことで、帰るぞ」

「え？え？」

私を抱き上げると早々と出口に向かつ。

体育館から出ると、中から爆音と化した声が聞こえる。

ガクはプリズムを出す。

「口ウ連れてこればよかつたな・・・」

そう弦くじら二家の家の屋根に飛び乗る。

「行くか」

え？まさか・・・・・

思つた通り、私を抱いたまま、屋根をトントンと渡つていくガク。

驚きながらも、さつきのガクの言動を思い出し、一人赤面する。
いや今の格好も赤面物だけね？

「何、赤くなつてんだ」

「そこは空氣読んでスルーしとこうよ」

「そりか？悪いな」

さも悪くなさそうに言い放つと、それきり無言で走り（跳び？）
続けるガク。

私も無言で、考えるのは帰つてからにする」とこした。

「ん、着いた」

「ありがと」

カギを差し込み、ドアを開ける。ガクはさつさと入つていく。

私も後を続くと、ガクはソファに倒れこんだ。

「ガク？どうしたの？」

「分かんねえ、時間、くれ…………」

「……ガク？」

それきり返事が無くて、熱かと思つておでこに手を当てみたけど普通だつた。

なんだか気持ち良さがひびいてくるから、そのままにしておくことにした。

携帯を開いて見ると、桜花から1通メールが来ていた。

一言。

【元お嬢】

何それつー?思わず電話をかける。

『はーい?』

「もう終わったの?」

『そりや、先輩がラストだつたしい?』

「嘘の反応、どうだつた?』

『す、じかつたよ。誰だ誰だー?ビーの貴公子だー?って感じで。で、

その貴公子は?』

「寝てる」

『はー?』

「帰ってきたらすぐ寝た」

『なにそれ』

「私は桜花のメールの方が、なにそれだった」

『あれだけ言われれば、それでしょーよ』

『期待していいのかな?』

『違つたら殴つてやるわ』

「ふふ、あいがと」

『うん、また連絡待つてる。できれば夏休み中にお願ひね』

「え?」

『だつて今日まだ帰るんでしょう?』

「うそ、そうだな?」

『じゃ、待つてるかい』

「……切れた。……私も寝よ」

もう一つのソファで横になるとすぐ眠気がやってきた。

目を覚ましたら、既に夜になつていて、戻つてきていた。
久々の地球とは、意識のないままお別れになつてしまつた。

「なんでどっちも寝てんだ?ナニしてたんだ」
「あのねロイ、あきらかに違うでしょ」
「まあメフィリアはなあ」
「珍しいな。ガクの力が弱まっている」
「あら、ホント」
「ああ、あつちの空氣に慣れる前に力を使ったからだろ。ってかヴァルクとティルがここにいていいわけ?」
「「面白いものが見れそつだと思つて」」
「おまえら正真正銘、兄妹だよ。若干ガクが哀れに思えてきた」
「・・・誰が哀れつて?」
「おう、ガク」
「・・・戻ってきたか。急に体が重くなつたんだが」
「慣れない環境で力を使つたからだ」

「ああ、なるほど。だから前にメフィリアも熱出したのか」

「熱出したのか？」

「ああ。」じつちの力が体に戻ってなかつたといひ、激しい運動をしたからだらう

「激しい運動？」

「森を歩いた」

「じゃあちよつと前に、森が揺らいだのは・・・」

「少々破壊した」

「おまえ・・・」

「代償は払つた。問題ない」

「プリズム使つても相当だつたら」

「ああ。流石にきつかった。自然是怒らすもんじやない」

「・・・ん

「メフィリア？」

「んー？」

「戻ってきたんだ」

起き上がると、王の間だつた。・・・あれ? 何でヴァルクさんとティルさんがいるの?

「ロウはいるか?」

ガクがヴァルクさんに聞く。

「外でグレスティースと遊んでいる」

「そうか。メフィリア、行くぞ」

そう言ひと、私の手を取つて外へ出て行く。

「ロウティス!」

「グルル!」

「滝まで頼む」

「グル」

大きくなつたロウティスに2人が乗り、ロウティスは雲のない空

を、優雅に羽ばたく。

銀色に輝く3本の内、真ん中の滝の前で降りると、ガクが手招きする。

ロウティスは高く舞い上がり、夜空を楽しんでいたようだった。

「メフィリア・・・」

ガクが、甘く私を呼ぶ。それに応えるよつてガクの腕に収まると、しばらく抱きしめられた。

鼓動が、高く波打つ。

ガクが私を解放して、目を合わす。

「未来永劫、メフィリアだけを愛す。俺と結婚しよう

「はい」

一気に実感が沸いてきて、嬉しくて涙が溢れる。

「メフィリア……」

私の涙をガクがぬぐう。それでも止まらなくて俯こうとしたら、手を添えられ、上を向かされた。

ガクが・・・近づいてくる。

「チツ」

「へー？」

現れたのは、さつきまでシリーズの城にいた面々。

「はあー。気配は分かつてたけどな、空氣読むかと」

「まあガク。がんばれ」

「うつせーよ。おまえらの所為だぞ」

「メフイリアは一筋縄じやいかないぞ？」

「大体分かるつて」

「忍耐訓練に、滝修行よりも効果があるんじゃない？」

「おまえら、人事だと・・・」

「ガク、おめでとう」

「くつ、ヴァルクだけは、なにがあつても素直に喜べねえー・まずその、からかい顔をやめる」

「元からだ」

「ウソつけ」

「娘を頼んだぞ」

「なんでジエイナルもからかい顔なんだ！？」

「おじおいガク、おとーちまにあんたはないだろ？」「

「ハセキ、ヴァルク！・・・斬る！」

「へへへ、」

「メフィリア、良かつたわね。10年越しに叶つて」

「ティルさん・・・知つてたんですか」

眞が現れた驚きで、涙は止まっていた。

「ふふ、バレバレよね。知らなかつたのはガクぐらいだわ」

「メフィリア、お母さんも嬉しいわ。ガク君なら安心できるもの」

「お母さん・・・私、幸せになるから」

「ええ、当たり前よ。・・・といひで、桜花ちゃんはどうなつたの？」

「また連絡してつて」

「そう。近い内に貴女の能力も開花するわ。その時に行きなさい」

「うん」

「メフィリアは学校びりするの？」

「・・・」

少し悩んだ後、ガクの方を向く。

「ガク！！」

「ー？」

私は走っていき、勢いよくガクの胸に飛び込んだ。

「決めた！高校を卒業したらガクと暮らす！」

月は今日も、夜空を優しく照らす。

完 あとがき

35・私の王子様（後書き）

ありがとうございました。

あとがき

TeaとSeaの響きが大好きなティシーです。

私の処女作である『異世界の王子様』に最後までお付き合いいただき、ありがとうございました！

何も考えずに突っ走った作品でしたが、少しはお楽しみいただけたでしょうか？

所々、アレ？的箇所は、寛大なお心でスルーをお願いします。
ガクが天然な所は、一番スルーでお願いします。

あの説明以外思いつかなかつたんですね！
ついでにロウティスの好物も考えてなかつたんですね。

今回の完結は、夜月＆メフィリア中心の物語が完結ということできからには番外編としてガクフォンスらについて書きたいと思います。

「希望の人物で何かリクエスト等がありましたら、応えたいと思つていますので遠慮なくご連絡ください！

この物語は私が中学生の時にメモ（落書き）していたのを少し抜き取った作品で、

全て詰め込んだのが、今連載中の『龍神の想いと守神の願い』です。

基が同じなので設定が時々似ていますが、ぜひそちらも読んで見てください。

私の本命作でかなり力入れてます（笑）

また、私のホームページではアンケートも設置しております。
ご協力いただけたら幸いです。
では、今後とも応援よろしくお願ひします。

番外編・巻の噂・・・? (前書き)

ガクとメフィリアが結婚直後。

番外編・巻の噂・・・?

グレステイース（ちょっと幸せ太り気味）とハイウェイド（天然入り気味）の会話を訳してお届けします。

ローヴェンド屋・上空

『ねえ（2人の結婚）聞いたあ？ハイウェイド』

『ああ聞いたよ（グレステイースの体重減）グレステイース。おめでとう、だね。ボクとしては複雑なんだけど』

『ふふ、でも私は嬉しいわ。長年願つてきたことでしたもの』

『そんなにかい？』

『ええ。小さこころはよく会つていたのに、いつの間にか・・・』

『ああそうだね。いつの間にか、（体重と体長が）合わない日が長

くなっていたね

『ええ、難しいものね』

『そうだね・・・』

『だから、今度はこのままひまへこってほしけわ』

『・・・ボクは、どんな（太った）君でも遊ぶよ』

『嬉しいわ、ハイウヰード』

『グレスティース・・・』

城の上空で2頭の超高速竜(リンドラ・バルム)が尾をくつつけながら見詰め合いつ正在する様は、それはそれは不気味だったといづ。

ローヴェンド夜・上空

『でもねグレスティーヌ、他の男にまで報告はやめてほしいな』

『え・・・?』

『グレスティーヌの体重や体長を知つていていいのはボクだけがいいんだ』

『ハイウェイド・・・・・・』めぐらさー』

『いいんだよ、ボクも大人げなか『ごめんなさい、何の話かわから
ないの』

『・・・え? 昼間の話の続きでしょ?』

『・・・え? 昼間の話の続きならなんでも体長まで出てくるの? いや
体重もだけど』

『・・・え? 昼間の話つてグレスティーヌの体重が減つたことの話
じゃないの?』

『・・・は? ガク様とメフィリア様の『結婚のこと』でしょ?』

『・・・』

『・・・』

『・・・』

『・・・むしろ体重の話はどこから聞いたわけ?』

『・・・う、裏ルート・・・?』

月夜の空に、グレスティースのものすごい咆哮が鳴り響いたそ
な。

番外編・巻の噂・・・?（後書き）

意味不、ですか？…ですよね。
ちょっと噛み合っているようで噛み合っていない2頭の会話が書いて
みたくなったんです、すいません。

続・キャラ紹介（前書き）

『異世界の日々』の内容を全てこちらに移動しました。
『異世界の日々』は検索除外設定を致します。

このページとVSシリーズの（フ）までは『異世界の日々』にあつた内容と同じです。
ご迷惑をおかけします。

続・キャラ紹介

【ガクフォンス・ローヴェンド】 182cm 金色の瞳・青髪
愛称：ガク

【ヴァルク・ローヴェンド】 ガクの異母兄弟 185cm 金色
の瞳・銀髪 ローヴェンド現国王

【ティルフュミナ・ローヴェンド】 ガクの姉 165cm 金色
の瞳・金髪 愛称：ティル

【メフィリア・シリーズ】 ガクの妻 160cm 黒目・黒髪
地球：夜月

【ロイウェルト・シリーズ】 メフィリアの兄 愛称：ロイ 地球：
滝月

【ギラティルト・シリーズ】 メフィリアの兄 愛称：ギラ 地球：
銀月

【富城】 メフィリアの親友 167cm 黒目・茶髪

【ロウティス】 ペット 頭はドラゴン、体は一応鳥。手あり。3
本の尾。額に^{ブリズム}結晶^{ブリズム}。変化可能。愛称：ロウ

結晶 ^{ブリズム} ローヴェンドの王族のみに現れる、守る力。通常、額に輝く。邪な心を持つ者、人を殺めた者、力に耐えられない者には、決して現れない。

三大宝龍角 ^{サンダイボウリョウカク} ^{ヴァージス} 龍神の3本の角を元につくられた、死剣・王剣・純剣の3つの伝説の剣。鳥神竜の力を宿せる。

【死剣】 ^{メテイメフィユス} 能力：生^{レーストシヨラン}を持つものに対し、防御不可能な攻撃を持つ。発動：死徒に解せ

現主：バルク・ローヴェンド

【王剣】 ^{シアスマランテ} 能力：自然、以外の全ての効力を相殺する。発動：
王誇よ來い

現主：ガクフォンス・ローヴェンド

【純剣】 ^{シュンケン} 能力：主の決意さえあれば遠隔操作や回復など可能。主の「決意」と呼応し、自らの意思で力を出せる。発動：純志を示せ
現主：ティルフェミナ・ローヴェンド

鳥神竜 ^{チョウジンリョウ} ^{ヴァージス} 龍神の直系に不死鳥^{フェニックス}の力を加えた神。人化可能。

【イフイス・シリティス・ファー】 光の不死鳥の力が宿るとされ

るシルティス・プリズムから生まれた光の鳥神竜。光剣^{コウレイショウ}を持つ。 奥義^{エンエイシカ}：光麗衝^{コウレイショウ}

【ロート・クレファリナー・シャロー】 炎の不死鳥の力が宿るとされるクレファリナー・プリズムから生まれた炎の鳥神竜。炎剣^{エンエイシカ}を持つ。 奥義^{エンエイシカ}：炎々華

【ピアス・メルエノール・リヴァ】 水の不死鳥の力が宿るとされるメルエノール・プリズムから生まれた水の鳥神竜。水剣^{スイメイソウ}を持つ。 奥義^{エンエイシカ}：水冥想

【ウィール・エフィズ・クライマリー】 風の不死鳥の力が宿るとされるエフィズ・プリズムから生まれた風の鳥神竜。風剣^{フウメイラン}を持つ。 奥義^{エンエイシカ}：風瞑嵐

【ゾルト・ラミュール・ブレッディ】 雷の不死鳥の力が宿るとされるラミュール・プリズムから生まれた雷の鳥神竜。雷剣^{ライコウゼン}を持つ。 奥義^{エンエイシカ}：雷孔禪

ヴァージス大陸 ローヴェンド、フュイレス、シリーズ、リネイメリ、グーケルの5国を表す超大陸。

【ヴァージス】 ドラゴン 龍神 ドラゴン系の最高神。

以下おまけ？

超高速竜^{ロンド・ガルム} 翼がなく、胴が長いドラゴン。戦闘系ではなく、ひたすら飛行スピードを追及した希少種。速度は・・・「もんのすご

く速い」で

【グレステイーン・リンド・クヨル・アルシェイ・ヴィジアンヌ】
雌^{メス} 愛称：グレステイーヌ

【ハイウェイド・ブルム・スイーザ・アン・グラйтеク・ラス】 雄^{オス}

* ムダに名前が長いつて言うのは突つ込まない。付けたかったんデ
ススイマセン。

「ローヴェンド」 広大な土地と絶対的な戦闘力を誇る大国。5国
の中心部に位置しており、ドラゴンの顔にあたる形をしている。血
に關係なく強い者が国を治めるが、プリズムを持つ者が圧倒的に強
いため、結局王族が王となる。

現国王：ヴァルク・ローヴェンド

「フュイレス」 ローヴェンドの北にある、ドラゴンの首にあたる
形をしている国。

現国王：ティゼイド・フュイレス

「シリーズ」 ローヴェンドの南にある、ドラゴンの3本の尾にあ
たる形をしている国。5国では最小。夜月^{月夜}に照らされると銀に光る
3つの滝が有名。

現国王：ジエイネル・シリーズ

「リネイメール」 ローヴェンドの東にある、ドラゴンの右翼にあた
る形をしている国。

現国王：ウエヴィア・リネイメール

<グーグル> ローヴェンダの西にある、ドライバーの左翼にある
形をしている国。

現国王：ハーデウス・グーグル

VS異大陸（前書き）

VSシリーズは基本グロ表現が出てきます。お気を付けください。

「オイ」

「はあ・・・」

「あり」

「・・・賞金付けたら早いだろ?」

「頼む」

1週間後

「ど」だ

「なぜ」

「おかしいわね」

「あと考えられるとしたら……異大陸か？」

「厄介な

事の始まりは1週間前に遡る。
メフィリアが俺の妻になつてから、すぐにメフィリアの能力は開花した。

それが、1週間前だ。ところが、開花した瞬間メフィリアは消えた。ついでに側に居たロウも一緒に。

開花が遅かつた分、力が大きくて暴走したのでは、というのが俺たちの見解だ。

しかしあかしい。メフィリアの捜索に多額の懸賞金を掛け、俺達も捜索したにも関わらず、全く気配が掴めない。

大体、ロウが居るのにこんなに遅いはずはない。

「異大陸は本当に厄介だぞ」

「捜索範囲が広すぎる」

「見つけたとしても……」

「戦闘覚悟だな」

「既に1週間か・・・」

俺、ギラ、ティル、ヴァルク、ロイの5人で会議を開く。異大陸となれば、通常じゃ渡れない。

「風の鳥神竜に探させるしかないか」
ウイール

「それでどれくらいです?」

「早くても1日はかかるわよね」

「ロウも一緒のはずだからな、命は大丈夫だと思つが・・・」

「異大陸は俺も行ったことねえな・・・」

「そつーメフイリア・・・

いくらロウが一緒と言つても、ロウにも限界がある。

今のロウの主は俺。俺が側にいなければ、力は發揮できねえ。

「ウイールを呼ぶ」

そう言つと、外へ出る。

その後に4人もついてくる。

プリズムを出すと、目を瞑り意識を集中する。

上空に、黒い雲が集まり始める。

『『エフィーズ』プリズムより生まれし風の鳥神竜、ウィール・エフィーズ・クライマリー。今こそ時空を越え、我が元へ現れたまえ』』

そう唱えると、俺の前に緑の円が現れる。

ソレは大きくなり、人型になる。

瞳は黒緑色、肩にかかる黄緑の髪、ウィールの人化時の姿だ。

『やあ、久しぶり』

「ああ。至急人探しをしてもらいたい」

『誰を?』

「メフィリアとロウ。共にいるはずだ」

『メフィリア・・・これはまた懐かしい。見当は?』

「恐らく、異大陸」

『異大陸? ああだから俺。了解、じゃ』

そう言ひつと、ウイールはロウと似た姿になる。瞳の色と体の模様
が違うが。

「任せた」

『グル!』

応えるように鳴くと、大きくなり、黒い雲の中に姿を消した。

『メフィリア、無事か?』

「大丈夫、でも口ウガ」

『我はよい、しかし』)は本当にモンスターが多いな

「じめん口ウ。私のせいだ」

『仕方あるまい。誰でも最初は失敗するものよ。気にするでない。それにおまえに泣かれると、ガクに怒られる』

「ふふ、ありがと」

『ああ。だが連中に見つかることだけは避けねば』

「うん」

私とロウがここに来てから一週間。どうやらここは、異大陸らしい。

異大陸のどこかはロウも分からないと言っていたけど、危険な所には間違いない。

ジャングルのような所で食料と水には困らないが、モンスターが多い。

私の力は、少しずつ戻ってきてているようだけどまだ使えないし、帰る術は見つからなかつた。

『メフィリア、伏せろ!』

「ギャウウウ」

『グアルル!』

言われた通り伏せると、頭上を炎が通る。

ロウが止めを刺すと、襲ってきたモンスターは静かになった。

ロウは何も言わないけど、私は気付いていた。

ロウの力が、弱まっていることに。

平和なシリーズと地球で育った私には、戦う方法が分からなかつ

た。

それに下手に動けば、口ウの邪魔になる。

今私に出来るのは、泣かない事、力を早く戻す事。

ガク・・

VS異大陸（2）

ウイールを召喚した翌朝、「風」が俺に届いた。

王の間に、泊まっているロイドギラを含む5人を集めることにする。

「見つかった。バズガル大陸だ」

「バズガル？ 守神の島しかない所か。なら安全だ」

「いや、あそこは変わった。バズガル守神の守護はもつない。かつては最も安全な島と言われたが、今は最も危険な島だ。守護が外れると同時に、他大陸のモンスターが押し寄せた。エサを求めてな」

「何故守護が……？」

「さあな。だが何億年も前に張られたバリアだ、いつ効力が消えてもおかしくなかつたんじやないか？ 大体あの島は、バズガルが気まぐれに創つた島だろう」

「しかしバズガルと言えば、ヴァージスの親ともいうべき存在。そして私達はヴァージスの子。手を貸す義理ぐらいはあるんじやないか」

「別にバズガルは助け求めてないけどな。まあいい、メフィリアに口ウ、ついでに島奪還するか」

「ロイ、ギラ何人送れる?」

「この前、力使ったからな・・・父上と母上を呼べば5人でもいい
るが」

「俺が先に行く。送れ」

「ガク、待て。私達は最強だが、万能じゃない。分かっているだろ
う」

「・・・」

「一度に2人送れるか?」

「厳しいな・・・失敗したら同じ島でも別々だ」

「それでいい。やれ」

「3人はできませんの?」

「3人も違う大陸へ飛ぶぞ」

「ティル、おまえは待つていろ。私とガクが先に行く。ロイ、ギラ
このことは伏せておけ」

「だが・・・」

「流石に異大陸に行くとなると騒動だ。適当に丸め込んでおけ」

「・・・分かった」

「では用意を」

「ガク、あいつらの具体的な位置は分かるか？」

「いや・・・ウイールは風で搜索する。それで島に2人の波動を感じた事を伝えてきただけで、詳細は分からねえ」

「じゃあ南で行くか」

「まあそれでいい」

「やるが、ギラ」

「了解」

書かれた魔法円にヴァルクと乗る。

『・・・我等は望む。バズガル大陸へ』

・・・

「・・・いきなりか」

田の前には『テカイ蜘蛛。

「来い、レストショラン王劍」

手に大剣が現れる。

トン、と跳んで背後に回り、背中に剣を突き刺す。
出てきたのは青い血。

剣を抜き、地面に降りると、巨体が倒れる。
ヴァルクは・・・どうやら違つ場所らしい。となるといじが南か
も怪しい。

だが・・・

ドゴォォンンン・・・

ヴァルクはあつちか、遠くはないな。
とりあえず、合流すべきか。

俺は派手な音のする方へ、レストショーランを片手に向かつた。すると現れたのは、さつきの蜘蛛よりも巨大な蜘蛛。しかも顔が2つ。

・・・なんか楽しそうだし、見とくか。

「ギシャアアア」

糸が向かつてくる。くく、久々の実戦だ。
直前で糸を交わす。

「雷聖の初・【クライ迂雷】」

「オオオン

メス顔の方に当たつた。効いたか?

「ギャギャギャアア」

ん、なんか怒らしたっぽい。お顔は、でりけーと、らしい(メフ

イリア説)からな。

こんな所で遊んでいる場合ではない。が、^{コレ}大蜘蛛が雑魚敵だとしたら、この島は本当に厄介だな。大体足何本あるんだ。

「フン、全て潰す。解せ、^{かい}_{メディメフィ}ユス死剣」

後ろへ跳びながら、斬撃を繰り出す。

「ギャアアア！」

・・・足6本ぐらい逝ったか？

動きが鈍くなつたソレの身体に、剣を突き刺す。

「死徒^{しと}に解せ、『メディメフィユス』」

メディメフィユスの刀身が消える。いや私には見えるが、大蜘蛛には見えないまい。

剣を伝い、気が流れ込んでくる。

慣れてしまつたこの感覚。常人は、気持ち悪い、と言つのだろう。

生気が抜けたソレは、軽い音で倒れた。

「ガク、いつまで見ている」

「・・・メディメフィユスを使う相手か?」

「久々の実戦で血が騒いだ」

「まあ分かるが。血に濡れた島だな」

「ああ。さて、どちらへ向かう」

「さつきプリズムで一帯を調べたが、2人の気配がしない。だが、
あつちに何かあるな」

「では、あちらへ向かおう」

「ああ」

ふと、思つ。

「ガク、帰りはど"うするんだ?」

「・・・」

∨S異大陸（3）

鬼族きぞく。

それが私達を捕まえた者達らしい。

連中はみな、頭になにかしら角かのじやが生えていた。

そして私達は今、鬼族から頭かのじやと呼ばれている奴の前に差し出されていた。

ソイツは、頭から2本の角かのじやが出ていて、牙も見えていた。なにより体格が尋常じゃない。2mは軽く越す身長とゴツい鎧。

「ぐはは、今度はどんな小物を捕まえてきたのかと思えば、守護獣と極上の女じやあねえか。思わぬ大物だ。おまえらよくやつた」

「へイー！」

「守護獣といつ」とはヴァージス大陸からやつてきたのか。女、名は？」

「・・・」

「コイツを殺されたいか

「・・・メフィリア」

「人に名乗る時はフルネームが基本だろ？」「

つてか人？人なの？
とりあえず、気絶している口ウに危害を加えられないよう言いつと
おりにしなきや。

「メフィリア・シリーズ」

「なんだ有名な戦闘種族ん所の姫じゃないのかい？」

「戦闘種族？」

思わず聞き返すと。

「お嬢ちゃん、箱入りかい。ヴァージス大陸の戦闘種族と言えば、
ローヴェンドの王族だろう？しかしまあ今じゃ龍神の力も弱まつた
と聞くがなあ。それでも恐れられている力ではあるが、所詮人を殺
せぬ神の產物よ」

ローヴェンドの王族・・・ガク達が戦闘種族？確かに強いみたい
だけど・・・

「我等は人ではないが、守護獣がやられるくらい弱まつた種族に、
我等が負けるわけがねえ！これからの時代は、鬼族の時代だあ！」

あ、人じゃないんだ。

「　「　「オオオオオオー！」」

「 今夜は宴だ！それまで牢に入れておけ！」

「 ヘイ！・・・来い！」

グイ、と体に巻きつけられている鎖を引っ張られる。ロウは他の連中が、肩の上に担いで運んでいる。

牢は狭く、汚かった。そこに私達と一緒に放り込んだ男達は、卑下た笑い声を響かせながら出て行つた。

「ロウ？・・・ロウ」

名を呼びながら、ロウの結晶ブリズムを撫でる。

「ロウ・・・ごめんね」

するとプリズムが光だした。

『・・・メフイリア、無事か。すまない』

「私は平気。ロウが守ってくれたから」

『油断した。まさか鬼族とは』

「その鬼族ってなんなの?」

『名の通り、鬼の種族だ。人の型を取つてはいるが、本質は気が荒く、仲間内でも喧嘩が絶えないほどだ。頭はそれほど良くないが、戦闘能力は高い』

「どうしよう……」

『「」の壁を壊して……』

「ロウ?」

『ガクの気配がした……』

「ガクが?」

『恐らく、ヴァルクかティルも来てているはず。ならば、まだ動くべきじゃない。機を待つぞ』

「分かった」

「あのバカデカい城と旗は・・・」

「ああ、ここに巢食つてるのは鬼族らしいな」

「中から一瞬プリズムの気配を感じた。捕まつていると見て、まず間違いない」

「生きてるか。良かつたな」

「俺のプリズムに口ウも氣付いたはず。攻め込んだ時に巧く抜け出すだろう」

「そんな元氣があるか?」

「なんとかするだろ。あいつは守護獣だ。大切なものを何がなんでも守り通す」

「なら正面突破にするか」

「派手にな」

「異議なし」

木に身を隠し、城の様子を窺っていた俺とヴァルクは、片手に相棒を持つて同時に飛び出した。

「ん？ 敵が来たぞおお！！」

「落ち着け、どうせバリアは破られない」

門番が俺達に気付く。

「ガク、城にバリアが張つてある」

「任せろ。王誇よ来い、『レストショラン王剣』」

刀身が光るレストショランを、そびえ立つ鬼の城へ振り下ろす。

ピシッ、ピシッ、バリイイン

「なつ！ バリアが！ ！」

「敵襲だあああ！ ！」

その声に反応し、続々と鬼が出てくる。

「あれは人じゃないからいいよな？」

「ああ。だが、無闇に城は壊すなよ」

「分かつてゐる

「さて・・・俺も殺るか。ガク、巻き添えをくらうなよ

「くらうか、誰に言つてんだ

冷静に見えるが、ヴァルクも相当感情が高ぶっているらしい。口調が昔に戻っている。

俺の前に黒い影が広がる。

プリズムを出し、影を避ける。

「なんだ？動けねえ！？」

「こいつが原因か！」

「おい、誰か！なんとかしろー！」

鬼どもが困惑の声をあげる。

「死徒に解せ、『死劍』^{メテイメフィコス}」

ヴァルクが呟いた瞬間、闇の餌食になり生氣を無くした鬼どもは、パタパタと倒れていく。

ヴァルクの目は、いつもより金色が強く光っていた。

▽S異大陸（4）

「頭ア！大変だ！」

「どうしたあ！」

「敵が！次々とこっちがやられてく！」

「何人だ？！」

「2人です！でも無茶苦茶強くつて！！」

「オレもいく！恐らく取り戻しに来たんだろう。あいつらを人質に持つてこい！」

「ヘイ！…」

騒ぎは私達にも聞こえていた。

「口ウ」

『ああ、頃合いか。逃げるぞ』

「どうするの?」

『壁を突き破る。今ならガクの波動も近い。我の後ろへ』

言ひ通りに動ぐ。

ロウは狭い牢の中で大きくなる。

『少し我慢していろ』

ガゴオオオーン!!

光が一点に集まつたと思つたら爆音が響く。

「つ、」

『行くぞー!』

「なんだあー?・・・あいつらあー!逃がすな、追ええー!ー!」

「ヴァルク！」

「ああ。回収が先だな」

俺達は外へ出て、音のした方へ向かつ。

「ロウー！…」

声に反応し、振り向いたそこには小さいロウを抱えながら落下するメフィリアの姿が見えた。

「メフィリアー！ロウ！」

レストショランを地面に突き刺し、2人に向かつて飛ぶ。

空中で受け止めると、メフィリアの目から涙が零れ落ちる。

「ガク・・・ロウが」

「大丈夫だ。落ち着け」

「で、でもつ」

「大丈夫だ。死んでない」

「いたぞーーー！」

「チツ」

「ふえつ」

混乱と安心と恐怖で、パニックになつてゐるメフィリアに手刀を落とす。

今はこの方が都合がいい。

「ガクフォンス！上だ！」

「なん！？」

ヴァルクの声に上を見ると、2つ頭の巨鳥が俺達目がけて急降下していた。

デカいくちばしをギリギリでかわす。

「ギエヒヒヒアア」

「くへへへ」

急いでレストショーランを取りに行きながら、片手で魔法を撃つ。

「光聖の初・【伝光波】^{デンコウハ}」

しかし魔法は全く効いていないようだつた。
おかしい。魔法の耐性が異常に高い？

ヴァルクももう一羽の巨鳥と対峙している。

地面に2人を置いて、巨鳥から守るように立ち、レストショラン
を構える。

「来い、相手をしてやる」

「ギュヒヒヒヒ」

2つの頭は火と雷を吐く。

ここは動けねえ。

「王鷲よ来い！『レストショラン』……」

俺の斬撃は巨鳥の攻撃を突き破り、俺の背丈くらいにありそうな巨
鳥の両足を抉る。

レストショランを阻めるものなどない。

「ギャヒヒヒアア！」

「うひせえな。起きちまつだろ」

「　「ギュウヒヒ」」

追い討ちをかけるよつこ、もつ一度剣を振ろうとするが、上空から複数の鳴き声が聞こえ上を向く。

「おいおい」

上空にはあの2つ頭の巨鳥が3羽迫っていた。

ヴァルクを見ると、楽しそうではあるが苦戦しているようだつた。本体に突き刺して生氣を吸うか、影の上に留まらせて吸うかだが、あの巨体に飛行系となれば、相性が悪いんだろう。

「ヴァルク、2人を守れ！」いづらは俺が相手をする！』

「チツ」

ヴァルクが剣を構えたまま、俺の横へ着地する。

「ぐはははっ！やはり落ちたな！戦闘種族と言つても所詮人間よ！」

「あいつは・・・」

「鬼族の頭だらうな」

「プリズム」とき人も殺せぬ龍神の口のなごりよーそれも退化した
ブツでは獸も殺せぬか！」

「黙れ！ヴァージスはおまえ」ときが侮辱できる相手じゃねえ！そ
れにプリズムは人を守る力だ！殺すための力じやない！」

「ならば守つてみよ……やれ……！」

「……ギエエエアアア！！」

「仕方ねえ。島はあまり壊したくなかったが、召喚するか

「他種族の龍神ヴァージスへの侮辱は極刑に値する。バズガルも許すであらう」

「先にあの化け鳥どもだ。魔法が効きにくい、厄介だ」

「鳥神竜の威力ならば、効くであらう」

「こいつのこと、全員呼ぶつてのはまどいだ」

「ウィールはどうした？」

「帰らせた。こいつに留まらせているだけでも疲れるからな」

「ふむ…………！」

「…」

「やつぱり来たか

「まあ良こタイミングであらわ」

俺達の田の前に現れたのは

「おこおこおいデかいなー顔2つだぜーー?」

「気味悪いですね

「ペシートにさるこせ憎たらしこシリコトますわ

ロイ、ギラ、ティルの3人だった。

「なんでおまえら来れた」

「父上と母上^{アレ}らが送つてくれた」

「なんで両親知つてるんだよ」

「すまん、バレた」

「はあ・・・」

「向こうつじや、姫を救いに行つたつて、英雄だぞ」

「英雄は前からだ」

「ガク、どうでもいいじゃない。巨鳥を殺ればいいんでしよう？」

「ティル、落ち着け。目が一国の姫として、あるまじき「ト」になつてるぞ」

「だつて久しぶりの実戦だもの。楽しませてもらひうわ」

「まあいいか・・・」

「大将は誰が?」

「**巨鳥**^{アレ}を倒した後、早いモン勝ちだ」

「分かつたわ」

「**巨鳥**^{アレ}は魔法の耐性が高い、気を付ける。そういうえばヴァルク、苦戦しているようだったが大丈夫か？」

「ふつ・・・ガクフォンス、一人前に兄上様の心配か？偉くなつたものだな。・・・私がたかが獣相手に苦戦していた？笑わせる。ほんの小手調べをしていただけだ」

「そーかよ。じゃ行くか。ロイヒギラは、メフィリアとロウを守れ。**巨鳥**^{アレ}は俺等が倒す」

「ふん、潰す」

「おまえは吸うんだろ」

「黙れガクフォンス」

「・・・仲の良い兄弟は放つておいて、行きましょうか。示せ、純**剣**^{メランテ}」

「そう言つと、シアスマランテを片手に5羽の中の1羽に向かって行く。」

「ティルが愉しそうだぞ、ヴァルク？ 危険なのでは？」

「つむ、そういう時もあるのでは？まあ一暴れだ、死剣」
メティメフィュス

「あいつら巻き込むなよ」

「善処する」

「オイ。・・・俺達も行くか、レストショラン王剣」

3人が額にプリズムを光らせながら、それぞれ突っ込んで行く。

「（巨鳥の耐性を破れ）純志を示せ『シアスマランテ』」

「飲み込め、【闇の空間】」
デス・フォール

「王誇よ來い『レストショラン』」

巨鳥に向かつて闇が勢いよく広がる。
それを避けながら、さつき戦っていた巨鳥へレストショランを振り下ろす。

三大宝龍角は同じ戦場に3つ揃つてこそ力を發揮する。
斬撃の威力もスピードも上がったレストショランの攻撃は、巨鳥の片翼を貫いた。

「ギエエエエ！」

「よおし、これで飛べねえな。あとは一発だ。よく分からん厄介な耐性も、効力を相殺するレストショランには関係ねえ」

「シルティイス＝プリズムより生まれし光の鳥神竜、イフィス・シリ
ティス・ファー。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ。『進る
無数の光よ、四方八方を包み込め』【光麗衝】！」
コウレイショウ

ファーへと姿を変えたレストシェランは、巨鳥を光と化した。

「まず1体」

闇がソイツを捕らえる。突然動けなくなつたソイツは奇声を上げながら翼をバタつかせる。

私が近づくのが分かると、2つの顔はそれぞれ攻撃を放つ。メディメフィユスの切つ先を、攻撃の迫る方向に向ける。

「死徒に解せ『メディメフィユス』」

闇と一体化した刀身は、相手の攻撃をも飲み込む。

私はプリズムを発動したまま、ソイツの首へ一瞬で移動し、メディメフィユスを突き刺す。

「グエアアエヒヒー！」

「くくく、もうじばりの辛抱だ。もう少しで楽になれんぞっ！」

顔がじらじらを向き、炎の玉を放つ。

それを魔法で防ぐ。

「風聖の中・【守風】^{シユフウ}」

炎玉は防いだものの、翼やら尾やらで攻撃をしてくるソイツ。闇の空間はその場から動けないだけで、その他は動かせられるのだ。

やはりこれだけ巨体だと、生氣も大きい。時間がかかる上に、こちらの器も埋まつてくる。

もう1体、吸収できるかできないかくらいか。

守風が先に破られるか、巨鳥が倒れるか。

守風にひびが入り、さらなる尾の攻撃で風が消え去る。巨鳥も手応えを感じたのか、甲高く鳴く。

だが・・・

「私の勝ちだ」

巨鳥は一聲鳴いた後、首を地面上に垂らした。

魔法の耐性？

そんなもの、シアスメランテにかかるば一撃よ。

近くにいた巨鳥へ、‘耐性を破つて’といつ思いを込めて一撃を放つ。

斬撃は掠つただけだつたけれど、それで十分。あの巨鳥に、最早魔法の耐性はなくなつた。

巨鳥が斬撃を避けた瞬間に私も移動する。

巨鳥の顔の横へ移ると

「雷聖の中・【飛震雷】^{ヒジンライ}」

魔法を放つ。

「ギエアアアア！」

「痛い？ふふ、すぐに楽になるわ」

「ギャエエエアアア」

片方の顔がケガをしながらも、2つの頭で私の手からシアスマランテを弾く。

シアスマランテは巨鳥の後ろの地面へ刺さった。

「あらあら、悪い子ね。そんなに苦しみたい？」

「ギエエエエエエエー！」

2つ頭は飛び上がり、首を捻りながら攻撃を放つてくる。

それを避けながら、機を狙う。

私も飛びながら、魔法を巨鳥の足に集中的に放つ。

翼を使っていたって、足も原動力。動きが鈍ってきたところで地面へ降りる。

するとロードは空中から、地面にいる私に向かってくる。

「ねえ、良い事教えてあげる。私のシアスメランテはね？遠隔操作も可能なの」

私に二つのくちばしが迫る。

「（来い）純志を示せ『シアスメランテ』」

ガニッ！

「ギヤアアアアアアエエエー！」

ケガを負つていない方の顔に、シアスメランテが突き刺さる。

「ばいばい。光聖の中・【メッカイコウ滅壊光】」

最後は、ケガを負つていての方の顔に魔法を叩き込むと、シアスメランテを引き抜く。

「ふふ、愉快かつたわ」

「ギラ、あいつら戦闘となると性格変わるとこ変わってないな」

「らしいね。3人共愉しそうだよ」

まずは1人1体ずつ倒し、残りは2体。
鬼族の頭を守るように飛んでいたが、3体が倒れると怒り狂うよう
に俺達に向かつて来た。

「飲み込め、【闇の空間】
デス・フォール

闇に2体が囚われる。

「王誇よ来い『レストシェラン』」

「（斬り崩せ）純志を示せ『シアスマランテ』」

冷静さを失つた上に、こちらは3人。
2体の巨鳥が敵うはずもなかつた。

「なんだと！？戦闘種族の力は衰退していつたはずじゃ！？」

力なく地面に伏す、5体の巨鳥を見ながら鬼族の頭は叫ぶ。

「おまえ頭悪いだろ。立派な角に力取られてんじゃね？」

「情報は常に新しいものを。戦闘の常識だ」

「確かに衰退していっていたけど、私達は別よ」

3人は一旦プリズムを消し、鬼族の頭に向き直る。
3人の体に傷が目立たないのは、間違いなくプリズムのお陰だつた。

「何！？・・・だが甘い！」この巨鳥は、鳥の頂点に立つ鳥族だ！
これくらいでは終わらん！」

アイツが何か叫んでいるが、俺達は気にせず話す。

「大体、なんでアイツ自身が向かつて来ねえ？」

「強い者を支配すると眩むものだ」

「なんで鳥族がアイツに従つてるのかしら？」

「薬だらけ。田^たがおかしかったからな。所詮は野生獸」

「でもおかしいわねえ。鳥族といえば、顔が5つと聞いたのだけど？」

「そういえば」

「あと、強力な技を使うとか・・・」

「聞いてんのか！？核^{ハイツ}があれば、元に戻れるんだよ！..」

アイツがそう叫び、ソレを空へ投げると5体の田^た鳥が青白く光りだす。

「まさか」

一瞬強く光ると

『ギエヒヒヒアアアア！』

「あーあ、復活しちやつたよ」

「しかもなんだ」の大きさは

「可愛げの欠片もないわ」

空に飛んでいたのは、城を覆つくらいの5つ頭の巨鳥だった。

そして一声大きく鳴いたあと、

バグッ

「な何を、ギャイヤアア・・・」

「喰つた」

「おーおー」

「大将取られちゃったわ」

「あいつ一応強いんじゃなかつたか?」

「頭は弱かつたのさ」

「今の頭関係なくね?」

しかも・・・

「なあ・・・ヴァルク」

「つるやこ。今集中してんだ」

「口調崩れてんぞ。気付いてんだろう？焦つてんだろう？」

「黙れ」

「いやでもこれホント、プリズムが発動しねえんだけど」

「まいっただわ、本当に使えない」

「どうすんだ。攻撃力には関係ないが、守備力に大きく響くぞ」

「アレは剣で相手ができる範囲なのか？」

「どの首から狙えばいいのかしら？」

「・・・とりあえず攻撃してみるか」

「どれに？」

「3号」

「だからどれだよ」

「左から1号」

「真ん中か」

「ああ」

「だが下から攻撃しても避けられるぞ」

「あの高さまで跳ぶのもプリズムなしではキツイわ」

「シアスマランテを使うか」

「あなるほど。荒っぽいが仕方ないか」

「分かったわ」

俺とヴァルクは同時に地を蹴り、高く跳ぶ。

「（傷付けずに飛ばせ）純志を示せ』『シアスマランテ』」

ピュオオオ

後ろから斬撃が迫る。背中に当たると、体は一気に前へ飛ばされる。

同時に魔法の詠唱を始める。

「導かれし聖なる風よ、我が願いを聞き入れ、その力を示せ」

迫る俺とヴァルクに、5つの頭が反応する。

放たれた5つの攻撃を、詠唱しておいた魔法で防ぐ。

「風聖の中・【守風】^{シユフウ}」

顔の正面まで来ると、5号のくちばしが迫った。

それをギリギリでかわして首に手をつくと、反動を利用して5号の

首の上へ乗る。

ヴァルクもうまく2号に乗つたようだつた。

「王誇よ來い『レストシェラン』」

そこから3号に向かつて斬撃を放つ。

向かいからは、ヴァルクが魔法を詠唱していた。

放った斬撃は3号と4号の攻撃を退け、そのまま3号の田を抉る。悲鳴を上げる3号の変わりに4号が大口を開けながら迫つてくるが、上に乗られていることに気付いた5号が首を振り回す。

俺が首を下り胴体へ着地すると、詠唱を終えたヴァルクが一ひらに飛びながら魔法を放つた。

「炎聖の中・【追跡炎】^{ツイセキエイ}」

後ろから迫る炎を3号は首を下げて避けたが、炎はそれを追う。3号に当たつたが・・・

「あ。魔法は効かないんだつたか

「ああそりこえば・・・。なんでアイツ避けたんだ」

「ノリだら」

「ノリか」

「ティルが必要か」

「そろそろ斬撃にでも乗つて来るんじや？」

「（斬り崩せ）純志を示せー！」

「後ろか」

「来た来た」

「『シアスマラン』……」

後ろから飛んで来たティルに気付かない巨鳥はティルの攻撃を口に受けた。

って

「どこのに撃つてんだ！」

片翼が欠けた巨体はグラグラと揺れる。

「順序つてもんがあるだろ！？」

「ノリつていうものもあるわ

「ふむ、落ちるな

「翼は案外ヤワだったわね。あとこの子鈍感ね」

「今の俺達は地上戦のがいいが、その前にこいつから地面に呑きつけられたら無傷は難しいぞ」

「両翼イつておくか。やれガク」

「俺かよ」

「私は・・・・死徒に解せ『メディメフィコス』」

グサ、と胴体にメディメフィコスを刺すヴァルク。

俺も上に飛ぶと、右翼目がけてレストショランを振り下ろす。翼に斬撃が直撃するのと、俺が飛ばされるのは同時だつた。

ちょ、

「つと待てー！」

ヴァルクの剣が刺さったのに気付いた1号が振り向き、丁度近くにいた俺をくちばしで弾いた。

空中にいた俺は、プリズムがないと避けれないわけで、地上に向かつて急降下中だつた。

「ああー・・・、ガク。向こうの元気でな
「メフィリアにさつまく言つとくわ」

なんて会話が、落ちる寸前に聞こえた気がした。

「誰が落ちるぐらいで死ぬか・・・・・・・・・・」

しかし下は硬い地面。加えて弾かれた左肩からは流血が酷い。
これだからプリズムがないと・・・

今から『中』の詠唱をしてたんじゃ間に合わねえ。

「導かれし聖なる水よ、我と共に歩み、力を貸したまえ」

右手に持っていたレストショランを空中にしまい、両手で詠唱を始める。

「水聖の初・【離水剣】！－！」

間に合えー

ザブン、ドガガツ

「うぐっ、」

落下地点に水を創りあげることで、衝撃を和らげたが勢いの全では殺せず、多少の傷を負った。

未だ出血している左肩を抑えながら上を見ると、欠けた両翼でジタバタと上空に留まろうと頑張っているみたいだった。

段々と高度が落ちている。落下するのも時間の問題か。

だが・・・・あの二人には借りがある。

「くくつ。・・・来い、レストショラン」

レストショランを再び右手に持ち、左翼の付け根を狙う。

「王誇よ来い『レストショラン』」

ズバッ

『ギュヒヒヒヒヒヒアアアア』

「つーガク、あいつ……！」

「あー、ゆづくと落ちる予定でしたのに

完全に飛べなくなつた5つ頭の巨鳥が地上へ落下してくる。

「名案を思ついたティル」

「何ですか？」

「おまえがダメ元で、衝撃を和らげる、ヒシアスメランテを放ちつつ、私がメティメフィユスの闇でコイツの落下を直前で止める」

「名案ですね」

「名案だろ？ よし決行だ」

ん？メティメフィコスとシアスマランテの気配？
何をする気だ？

「（衝撃を和らげり）純志を示せ『シアスマランテ』」

ブオオ

「呑み込め、【闇の空間】デス・フォール」

ゴオオ

突然広がる闇を咄嗟に横に跳んでかわす。

「つぶねえ」

巨体の下に完全に闇が広がりきると、ピタリと落下が止まる。

が、

「つ、、ティル・・・無理だ」

「え？・・・さやあ！」

ドゴオオン

数秒止まっていたが、闇が消え去ると再び落卜し派手な音と共に地面に激突した。

モクモクと砂煙が上がり、しばらく様子を見ることにした。

「（煙を飛ばせ）純志を示せ』『シアスメランテ』

少し待つと、煙の中から上空へ向けて斬撃が放たれた。同時に煙が消え去る。

「お兄様？全然止まつていなかつたのだけど？」

「今日は結構使つたからな、あの巨体を留めるのは無理だつた

2人は言い合いながらスタスターと歩いてくる。

「なんだ、無事だつたか」

「あらガク

「おまえこそ生きていたのか

「誰かさんの所為で多少ケガは負つたけどな。ティル」

「はいはい。・・・（傷を癒せ）純志を示せ』『シアスメランテ』

グサ、と左腕にシアスメランテが突き刺さる。

「ひ、ちょっと……ティルさん?なんか無駄にグリグリしてる気がしますけど」

「氣のせいや

いや、あきらかに……

「いたいいたいつ、痛いから。悪かつたから抉るな

「ふふ

ふふ、じゃねえつつの。

シアスマランテが抜かれると傷が段々と癒えていく。

「さひづする?翼はヤワかったが、体は丈夫なようだぞ?」

地に伏していた巨体がゆりうと起き上がる。

『ギャン Gan-Gan』

随分お怒りのようだ。

しかしこれ頭がグラグラするのか視点が定まつていない。

「ふむ、中々骨の折れる相手だ」

「やっぱり普通に左から首を落とすべきかしら？」

「まあ待て。田には田を、歯には歯を、超田鳥には鳥神竜を、つて言つだら」

「召喚か。じうせなら最初から使えよかつたんだ」

「あのな、あれは極度に疲れるんだぞ？」

「まあ知つているが・・・プリズムを使わないとなると・・・」

「私達には無理よ」

「ああ分かってる。俺が召喚する。さあイフィス、ロート、ピアス、
ウィール、ゾルト・・・誰こじよつか」

「誰でも一瞬で終わるだろ？」

「ふふ、あの子達は派手で好きだわ」

「派手ね・・・ゾルトでいくか。島いと壊す可能性があるが。俺が
倒れたら後は頼むぞ」

「ああ」

「分かったわ」

「ん。・・・・・・『ラリュール＝プリズムより生まれし雷の鳥神
竜、ゾルト・ラリュール・ブレッティ。今こそ時空を越え、我が元

「現れたまえ」

黒雲が空を支配し、俺達の前に一閃の雷が落ちる。
それは型を帯び、額から伸びる角に小さめの翼、そして3本の尾
を持つ巨大なドラゴンとなつた。
全身に雷を纏うドラゴン 雷の鳥神竜は、黒黄色の瞳をこちらに
向ける。

『久しぶりだな』

「・・・ああ」

『プリズムを使わなかつたのか。ああ原因はアレか』

「ああ、いくぞ」

『御意』

『ギュヒヒアアアーー』

5つのくちばしが一点に攻撃を溜め始める。

「『天よ猛る魂に応えよ、深き想いよ雷となりて降り注げ』」

俺も詠唱し始める。

『オオオオオオオオ！』

それに応えるようにゾルトも吼えると、ゾルトの体に雷が集まりだす。

そして大きな雷がゾルトの上に落ちると、ゾルトは消えた。変わりに黒雲に覆われた空が、ゴゴゴゴと唸りだす。

「ゾルト！ 轟け【ライコウゼン雷孔禪】！」

カツ！ドオオオオオオーンンー！

島中に、しかし俺達を避けながら、雷が次々と派手に鳴り響く。

『ギイヒヒヒアアアーー！』

雷が雨の様に降り落ちる中、どうすることもできずに5つ頭の巨鳥はのた打ち回る。

「・・・・・ん・・・？」

「メフイリア、起きたか」

「え・・・何コレー? 大丈夫なの?」

「ああ雷か。大丈夫だ」

「でも・・・」

「ガクの鳥神竜の技さ。こんなもん初めて見た・・・」

「大丈夫さメフイリア。ガクを信じじな?」

「うん。・・・・・! 口ウ、口ウはー?」

「大丈夫。ガクが力を『えればすぐに回復する』

「そりなの?」

「ああ。ただ今は無理だけどな・・・」

「はあつ、はつ・・・流石に、きつい・・・

「私はもう満足した。だから今日はもう戦わないぞ？」

「私もよガク。だから頑張つて」

「なん、だそれ」

「介抱はしてやるから安心しろ」

「・・・もう、前、が見えね、ムーリ・・・」

「といふかといふに十分じゃないか？」

「は、やく、言え」

「自分の限界に挑戦しているのかと」

「あほ、か・・・」

バタ。

ガクが倒れると、雷が止み黒雲が去る。

「ふむ。ギリギリ島の原型は残つたな」

「さうね。良かったわ」

「さて、どう帰るつか」

ガクを抱きながらロイ達の元へ歩く。

「ガク！」

起きたメフィリアが走り寄つて来る。

「ガク・・・ごめ、なさつ」

「メフィリア、後だ。ガクは少し氣を失つてゐるだけだ。問題ない。
今はどう帰るかだ」

厳しいかもしれないが、そっちの方が問題だ。

「ククと頷いたメフィリアをティルに預け、ロイとギラに向き
直る。

「何か方法は？」

「ない」

「ない」

「・・・」

どうするんだ

しばらく3人で固まっていたが、いきなり空が輝きだす。

よう頑張ったな

「これは・・・」

「・・・バズガルか?」

空に問う。

ほつほつ。あたりじや。お初にお田見えする。ワシが守神・バズガルじや

お田見えしてないけどな。

「助けてくれるのか？」

借りがあるからな

と、いうか・・・

「最初から見てたのか？」

バレたか？嬢ちゃんが死の危機に曝されたら手を出すつもりじ
やつたが

「それ以前に何故島を放つておいた？あなたの領土だひつ」

・・・オトナの事情じや

忘れてて俺たちの波動で気付いた、という所か。

「・・・流石、適當だな」

ヴァージーの親であるからな

ヴァージスの親つて……

「関係あるのか？」

まあよこ、お主らを帰せば良このじゅりつ?

何が『よこ』なんだ?

「・・・ああ、頼む」

では・・・・・

カツ!

あの後、守神によつてローザンドへ戻されたガクフォンス達は一日経てば皆元通りだつた。

力が戻つたガクフォンスはロウティスに力を分け、ロウティスはすぐに回復した。

一回使って安定したのであらうメフィリアの力は以後暴走することはなく、

自分で空間を操れるようになつた。

そして無事に夏休みが終わる前に地球へ帰つたメフィリア、ガクフォンス、ロイウェルト、ギラティルトの4人だつたが、

メフィリアは大量の宿題に泣くこととなり、3人はメフィリアの宿題を手伝う羽目になつた。

・・・ガクフォンスが手伝えたのは、読書感想文だけだつた。

VS異大陸・完

VS異大陸（完）（後書き）

あ、あれ？

なんでこんなに短いの？も、申し訳ないです。
バトルが過ぎるとなんだか・・・。

次回は兄弟マジ喧嘩編です。メフィリア争奪戦！？
やっぱりバトルがイイ！！

ただ今、もう一つの小説『龍神の想いと守神の願い』を連載中です。
あつちが本命だつたりします（笑）
よかつたら見てください。

ガン！！

「今日という今日は許さねえ！死ねヴァルク！！
来い、レストショラン王劍！」

「ふん・・・おまえが死ね。
解せ、メティメフィユス死剣」

「何事・・・？」

気持ち良く眠っていたテイルフェミナは、2つのプリズムの発動

を感じ田を覚ます。

時計を見ると、朝の7時を指していた。

部屋の窓から外を覗くと、案の定額を光らした2人の男が空中で闘りあつていた。

「はあ・・・」

またか、と1つ溜息を吐くと、侍女を置かないティルフュミナは、さつさと自分で用意をして現場へと向かった。

ギイイン！

「俺のモンに手え出しあがつてー！」

「自分で守つておかないのが悪いのだろー！」

「のヤロオーー！」

兵士に礼を言つと、ティルフェミナはメフィリアの元へ向かつた。

「あちりで侍女とおられるとよ」

「・・・メフィリアはどこに？」

「はい・・・」

「お兄様が・・・？」

それを聞いたティルフェミナは目を見開く。

「ティルフェミナ様！
それが・・・どうやらヴァルク様がメフィリア様に手を出された
ようで・・・」

群がつてゐる内の一人の兵士に問う。

「何があつたのです？」

ギギン！

「何年待ったか分かつてんのかー！？」

「10年であろう！」

「おまえ知つて……！」

「喜んでいたぞ……メフィリアも」

「アイツを巻き込むんじゃねえーー！」

「メフィリア」

「ティルさんーおはよー」「わこまく」

「ティルフHミナ様、おはよー」「わこまく」

「ええ、おはよー」

メフィリアと侍女のリチョンダに挨拶を返すと、早速メフィリアに問いただす。

「メフィリア、お兄様が手を出されたところのは本当なの?」

「あ・・・は、い」

あの兵士を信じていなかつたわけではないが、心中では疑つていた。

流石のお兄様でも、弟の妻に手を出す」とはしないだらう、と。

しかしメフィリアの様子を見てみると、さうも本当らしい。思い出したのか僅かに身体が震えている。

ケンカを止めようと想つていて、ガクの気持ちを汲み今回は放つておくことにした。

「メフィリア・・・つらかったわね。ごめんね。リチー、頼んだわ

「はい」

「ティルさんは・・・どうするんですか?」

「私は闘この被害者が出なこように、バリアを張るわ

ティルフェミナはそれだけ言つと、兵士達が群がつてゐる場所の一番前へと向かつた。

城と兵士をバックに立ち、プリズムを発動する。
恐らく今から闘いはヒートアップしてくるだらう。

「示せ、シアスメラント純剣」

「王^王塔よ來い『レストショーラン』……」

「呑み込め、【闇の空間】」
デス・フォール

白い斬撃と闇が激突する。

斬撃は闇を突破し、ヴァルクへ向かう。

斬撃を逃れ広がった闇は、ガクフォンスを呑み込む。

ヴァルクは斬撃をメディメフィコスで受け止めると、詠唱を開始する。

「エフイズ＝プリズムより生まれし風の鳥神竜、ウィール・エフィズ・クライマリー。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ。

『見えぬ風の刃よ、嵐の如く荒れ狂え』

切り刻め、【風瞑嵐】！

風の鳥神竜の力を纏つたメディメフィコスを闇に向かつて振り下ろした。

・・・

闇に囲まれたガクフォンスは、レストショランを前に突き出し、

詠唱を開始する。

「ラミュール＝プリズムより生まれし雷の鳥神竜、ゾルト・ラミュール・ブレッティ。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ。

『天よ猛る魂に応えよ、深き想いよ雷となりて降り注げ』

轟け、【雷孔^{ライコウ}禅^{ゼン}】！！」

・・・

闇を押し広げ猛撃する雷と、数方向に分かれ迫る風の刃。

空中で2つが激突すると、爆音が鳴り響き周囲に煙が充満する。

その中から2つの影が動き、地上へ着地する。

両者が風の魔法を唱えると煙は一瞬でなくなつた。

ヴァルクは左腕から血が滴り、ガクフォンスは左肩にザッククリと線が入つていた。

「つ、おまえは相変わらず防御が下手だな」

「つてえ。いいんだよ、攻撃力が弱点を上回つてるからな」

「どうだかな。今の攻撃もおまえの方が確かに威力が上だつたが、ケガが重いのは私じゃなくおまえだ。

風瞑嵐を1本受け損ねたのだろう? 私だったら全て避けられる

「だからなんだ。最終的に立つてればそれでいいんだよ」

「そんな事を言つているから大事なものを横取りされるのだろ? へ

「自分が悪いくせに、さも俺が悪いように言つてんじゃねえよ」

「くくっ、しかし美味かつたな」

「・・・」

「おーおー、殺氣は1人前だな。
だが、メフイリアも喜んでいたのは事実だぞ?」

「あ?」

「勧めてみたら好奇心が勝つたらしい。その後は美味しいそうに次々飲んでいたぞ」

「・・・メフイリアは良い。おまえはダメだ」

闘いを見守っていたティルフェミナは疑問を感じ始めていた。

この2人の特徴として、一度力を発散すると随分冷静に話す所がある。

しかし今回は別で、ガクは自分の妻に手を出されたのだ。
今回ばかりは冷静になるとは考えにくい。

どうもおかしい・・・。

「大体なあ、メフィリアはまだ未成年なんだぞ！？早いだろ！」

「ガク、おまえがそれを言うか？幼少期から飲んでいたではないか」

「あれはヴァルクが悪い。最初に俺に無理矢理飲ませたのはヴァルクだ」

「そうだつたか？」

「まあ、それはもういい。

今は俺の大切に保管してあったワインだ」

ワイン！？

・・・ああ。

しかし、メフィリアの震えは？

いえ、そんなことは後よティルフェミナ。
今は・・・・・あのバカ共を・・・

ふふ、ふふふ。

ティルフェミナは妖しく笑うと、シアスメランテを握り締め、詠唱を始める。

「メルエノール＝プリズムより生まれし水の鳥神竜、ピアス・メルエノール・リヴィア。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ。

『全てのものを水と化せ』」

そこまで言^うと、水の鳥神竜の力を纏つたシアスメランテを2人のいる中心部へ素早く投げた。

そして・・・

「【水冥想】^{スイメイソウ}」

中心部の地面へ刺さつた剣から、地面に触れずに水が円状に広がつていぐ。

「なつ、ティルか！」

「マズい！！」

水の円は一気に広がると今度は空へ柱を上げる。

柱は空まで届くと、どんどん中心部の剣へ向かつて細くなつていぐ。

水の柱がなくなると、水が触れていなかつた土以外、何も残つていなかつた。

「・・・あら、生きてらして？」

何もなくなつた場所に突然現れた2人に、ティルフェミナは笑つて言う。

「殺す氣かティル」

「ええ」

「・・・（ヴァルク？ティルの顔が危ないんだけど？）」

「（うむ。今日は止めに入らないからこのまま放つて置くのかと思つていたのだが・・・どうしたんだ突然？）

「（俺達何かしたか？）」

「（いや・・・少し暴れただけだな）」

「ソコン話を続ける兄弟に、引き抜いたシアスメランテを向ける。

「ふふ、お話は城で伺うわ。メフィリアも入れて、4人でね」

【つづりと、微笑むティルフェミナに2人は何も言わなかつた。

兄弟喧嘩（続）（前書き）

かなり前の話と間違えました。すいません。

兄弟喧嘩（完）

王の間へと移動する最中メフィリアは私にくつづいて歩いていた。ちらちらとガクを見ながら。

「ああ・・・お話を伺いましょうか？」

向かい側のソファに三人を座らせ、私は一人で座り心地の良いソファに腰を下ろした。

「事の発端は？」

「俺のワインを、ヴァルクが飲んだ」

「簡潔過ぎるんですけど

「朝食を食べてたんだ」

「ええ」

「俺はメフィリアと一人のつもりだつたんだが、邪魔が入つた

「・・・ええ」

「お兄様に向かつて邪魔とはなんだ」

「で、しょうがなく三人で食べていたら、俺が呼ばれて王の間を出
た」

「ええ」

「その隙に・・・

テイク1・ガクフォンスピジョン

『メフィリア、ワインに興味はないか?』

『ありますけど、まだ未成年なので・・・』

『氣にするな。さあ飲め!』

『ヴァルクさつ・・・・・美味しい』

『そつだろう?ガクには秘密だ』

『でも・・・』

『ほりもつと飲め。

どうだメフィリア、ガクなんぞやめて私の所に来
「ちょっと待てガクフォンス！

私がいつそんなことを言った。被害妄想が激しいぞ。

本当はこうだ・・・

テイク2・ヴァルクビジョン

『メフィリア、ワインに興味はないか?』

『ありますー前から飲みたかつたんですねー!』

『そつかそつか。ならコレを飲もう!』

『はいー!ヴァルクさん大好きです!』

『くくっ、ガクは飽きたか?』

『はい・・・。私前からヴァルクさんの事』

『アホかー! どんだけ話、造作してんだー!
メフィリアがそんなこと言ひはずねえだろー!』

『はあ・・・。ちょっと一人は黙つていってもらえます?』

メフィリア、本当の事を教えてちょうだい?』

『はい・・・。実は・・・・・・

テイク3 メフィリアビジョン

『メフィリア、ワインに興味はないか?』

『ワインですか?』

『ああ、極上のがある』

『でも我まだ・・・』

『気にするな。ガクはもっと幼い頃から飲んでいた。
持つてくるから待つていろ』

『はい・・・』

数分後

『これだ。

・・・ん。飲め

『ありがとうございます・・・』

『・・・ふむ、なかなか

『美味しい・・・』

『ふつ、もつと飲むか?』

・・・

「そして私が飲み終わって、ヴァルクさんだけ飲んでいた所にガク
が帰つて来たんです」

・・・

『ふう・・・。悪いなメフィリア、予想外に時間が

つ!

『ヴァルク!-!』

『なんだ?』

『なんだじやねえ!!それは俺のだろ!!
なんで飲んでんだ!?!?』

『細かい事は気にするな。
メフィリアに捨てられるぞ』

『つのはらう!-!』

パリイイイン・・・

『メフィリア！？なんで震えてる？何かされたのか？！』

『ちがつ』

『おまえの怒りを見て怖がっているのだ。気付け馬鹿者。プリズムをしまえ。圧力で器がめちゃくちゃではないか』

『ちつ。外出るヴァルク！！

許せねえ！－！』

・・・・・

「なるほど。お兄様が悪くて、メフィリアが震えてたのはガクのせいね。

・・・とりあえず、死んできたら？－人共

「待てティル」

「落ち着けティル」

「何度も言つたら分かるんでしょうな、あなたたちが

「いや～いつだらうな？」

「分からんんじゃないのか？」

「やほり三途の川でも見てきては？」

「あの・・・」

「うん~じつしたメフイリア」

「ガク、じめんなさい。その・・・ワイン・・・」

「メフイリアに怒るわけないだろ?~黙ってのは全て、ヴァルクだ」

「おこ」

「いいな?だから気にするな」

「あつがとつ」

「何だ?」の敗北感

「良かつたですね。貴重な経験ですよ

ローヴェンドは、今日も平和だ。

兄弟喧嘩（完）（後書き）

次回はヴァルクの初恋か、それぞれの生まれた場所の話の予定です。

それは、ヴァルク・ローヴェンド、5歳春の出来事でした。

「父上」

「なんだヴァルク？」

「ボクとお庭で遊んで！」

「『めんな』ヴァルク。これから仕事があるんだ。また遊ぼうな？」

「…はい」

ヴァルクは聞き分けの良い子だった。

自分の母親に関して、何かを気付きながらも一切聞くことはなかったし、駄々をこねることもしなかった。

ただ時々皆の目を盗み、城を抜けて町へと降りる。

今日も、いつものように昼過ぎに町へ来ていた。そしてたまたま見つけた小さな公園のベンチに何をするでもなく、座っていた。

「あなただあれ？」

「ビクッ。

振り向くと、そこにいたのは自分より身長の低い少女。くじくりとした青い瞳がヴァルクを凝視している。

「わたしニメイユ！」
「・・・ヴァルク」
「まるく？」
「ヴァルク」
「ふあるく？」
「ヴァルク」
「みるくつ！」
「！？ヴァルク！」
「まるく？」
「・・・そう」

それが、少女ニメイユとの出会いだった。
ニメイユに出会ってからヴァルクの脱走は多くなった。いつも一
人は町近くの小さな公園で会っていた。

「まるく！キレイ！」
「なにが？」

名前はバルク、で手を打つたらしい。

「まるくの田ー・キラキラー！」
「田ー」
「うん、田ー」
「そうー。」
「うんー・キラキラー！」

そんなに綺麗とは思わないが、まあ少女が喜んでいるのならいいだろ。

「二メイゴの田も綺麗だよ
わたし?わたし海~!」

二メイゴの瞳は深海のような綺麗な青だった。嬉しそうに輝く瞳は、何にも染まらないで欲しいことヴァルクは子どもながら強く願つた。

「二メイゴは何歳?
「6歳!」
「えつ
「ばるくは?
「…5歳」

ヴァルクは驚いた。絶対に自分より下だと思つていたのだ。

「じゃあ二メイゴがおねーちゃんだね!」

ベンチに座つていた二メイゴはピヨンひとつ飛び降りると、ヴァルクの方を向き手を掲げて誇らしげに言つた。

「…そう、だね」

何か納得のいかないヴァルクだったが、嬉しそうな二メイゴの表情を見ると全てを許してしまった。

その気持ちを不思議に思いながらも田口は過ぎていった。

「二メイゴは毎日ここに来るの?」

「つづんーでもいい好きなのー。」

「せつか」

「ばらくも来てくれるからもつと好きになつたー。」

「そ、そつか」

「でもときどき来れないよ」

ニメイコの瞳が悲しげに揺れる。そんな表情を見てこられなくて、ヴァルクは話題を変えた。

「ニメイコはどうして住んでるの?」

「えっとね、あひ」

「…」

なんとこか具体的な…。

「城の近く?」

「わかんないー!」

「…」

そして一ヶ月と半月が過ぎた頃、父ティファレイマスからお詫めを受けた。

「ヴァルク、町へ出過ぎじゃないか?」

「…『』めんなさい」

「多少は社会勉強だと思つて放つておいたが、この頃は度が過ぎる

ぞ」

「はい」

「これから一ヶ月は勉強に励め。良いな?」

「…はい」

そう頷いたものの、ヴァルクは自分が我慢できないだろうと思つていた。

そして案の定、一週間も経たないついに、ヴァルクは公園へ向かつた。

「…ニメイユ？」

しかしニメイユの姿はなかった。来るたびに会えたわけではないが、次の日もいなかつた。

父に怒られるのを覚悟して三日連続で来たその日。

「…あなたがバルク君？」

その声に振り向く。その先にいたのは青い瞳をした女性。直感でニメイユの母親だと分かつた。

一方の母親は驚いてしまった。金色の瞳。それは王族を意味する。娘は、キラキラ、としか言つていなかつた。そして、これくらいの歳で王族と言えば…、バルク、ではなく、‘ヴァルク王子’！

「ニメイユは？」

「…し、失礼しました、ヴァルク王子。娘は、患つていた病気が悪化し、つい先日…」

母親の声が震える。それはヴァルクに対する畏怖ではなく、悲しみを乗り切れていないためだ。

「ニメイユが！？だが、あれほど元気に…！」

「二メイコは、二つもヴァルク様のことを話していました。いつも楽しそう」と…

「そんな…」

「あの娘は今日が誕生日だったんです。そしてこれ渡すのだと張り切っていました」

やつして母親から差し出されたのは、水玉模様の便箋。表紙には「ばるくへ」と書いてあった。

急いで開けて見ると、一枚の紙が入っていた。

【ばるくへ。

二つも二メイコとあそんでくれてありがとう。

まえに二メイコがおねーちゃんってゆつたけど、二メイコはぜんぐがだいすきです。だからほんとうせばるくへのおよめさんになりました。

でもおとうさまが二メイコはからだがよわいからダメだつてゆつた。だから、だからね。

二メイコがおおつきくなつてげんきになつたら二メイコをばるくへのおよめさんにしてください。

きつじばるくが二メイコしかみれないくらいこきれいになるよ。二

メイコ】

ヴァルクは初めて、悲しくて泣くところとを知った。

もう戻ることの出来ない日々。もう見るひとの出来ない笑顔。もう会うひととの出来ない少女。

押し寄せるのは悲しみの波。

「う、あ…うわあああー。」

手紙を握り締めて、ヴァルクは泣いた。生涯にただ一度、悲しみに声を上げて泣いた。

それは、儚く散った、誰も知らないボクの初恋。

それから大切なものは、自分で守ると決めたんだ。

『桜花、です』

瞳の色も髪の色も違う。だが、似ている
ニメイユ・・・。

ボクの初恋
・完

討伐！

ローヴェンド騎士団の戦闘力は、ヴァージス大陸一だが、**巨大魔獸**ゼンダガアンの相手をするのは騎士団ではなく三兄弟だった。

俺達

ダダダダダダッバンッ！！

突然入ってきたのは、騎士団団長一級騎士グライド。

「お伝えします！リュイ海に**巨大魔獸**ゼンダガアンが現れたことです！！」

リュイ海とはフュイレス、ローヴェンド、リネイメールが囲む東の海だ。

「誰が行く？」

焦っているグライドとは対照的に、ヴァルクが冷静に聞く。ついでに今は3時のおやつタイムだ。

行く気のなきわざなヴァルクとティルを見て席を立つ。

「俺が行く」

「気を付けてね」

「ああ

心配そうなメフィリアの頭を撫でると、グライドへ向き直る。

「周辺の住民に被害が出そうなら対処しろ。ゼッド・ヴァンは俺一人でいい。あと超高速竜の用意を」

「はっ！」了解しました！！失礼します！」

慌しくグライドは駆けて行く。俺は窓を開けると空に向かって大声で叫ぶ。

「ロウテイス！ 来い！..！」

呼んだ後にメフィリアの方を振り向く。

「行つて来る」

そして5階の窓から飛び降りた。

直後に何処からか飛んできたロウの背に着地する。

「リコイ海にゼッド・ヴァンだ。リンド＝ヴルムで移動する。飛行場へ行くぞ」

「グルル」

上昇するロウの背でそれだけ伝えると、プリズムを出してゼッド

ヴァンを確認した。

「結構デカいな。いや長い?住民よりも海の生物に被害が出そうだ」

「グル」

飛行場へ着くとリンク=バルムのグレストイース（ ）がやる気満々にスタンバイしていた。

「出来るだけ早く頼む」

「グギャギャー！…！」

俺の声にものすごい咆哮で応えると、グレストイースは高速で空を飛び始める。

「グギャツ、グギャツ、グギャギヤアアー！…！」

…気が狂っているように聞こえるが、なんだかご機嫌らしい。ああ、この頃ハイウェイド（ ）との間に子どもが生まれたからか。あの時はヴァルクの目も輝いていた。

名前は……忘れた。性別はメスだったか?

グレストイースに乗つてそんなことを考えていると、リコイ海が見えてきた。

「あれか」

「グル」

「グレストイース、少し離れた所で待機している」

「グギヤー！」

やつ言いひびきのグレスティーヌを止めて再びプリズムを出し、そこからは口ウの背に乗ってゼッジドヴァンの近くまで移動した。

「長いな

「グル」

随分遠くに尾ひれが見える。30m以上か。…最近どつかで見た
なあの顔。
あつ、

「ぎゅうりどす、だつたか

「グル？」

メフィリアの世界へ行つた時にやつたゲームに登場したヤツだ。
確かポケモンとかいふ…

「アオオオオアアアアアーー！」

「おつと」

「グルル」

呑気に考えていたら、赤い目をしたゼッジドヴァンの、尖った尾ひ
れが飛んで来た。水中を移動させたのか。

空間から剣を取り出しつゝ右手に握るとつあえずゼッジドヴァンの
体に当ててみる。

「硬え」

ギイン、そんな音で弾き返された剣をみやる。普通じゃ切れないな。

「来い、【王劍】！」
（レストショラン）

剣をまた空間へ消して、今度はレストショランを召喚する。しかしレストショランで切り込んでもウロコが少し剥がれるだけだった。

そこへ後ろから尾ひれが飛んで来る気配を感じて直前で避けると、尾ひれが水しぶきを上げた。

水しぶきの後ろから攻撃が迫る気配を感じて空へと逃げるが、それより早く下からゼッドヴァンの牙が迫った。

「光聖の初・【伝光波】！」
（デンコウハ）

左手で魔法を放つがそれをものともせず大口を開いて迫つて来た。とつさにレストショランを盾にし飲み込まれるのを防ぐが、そのままゼッドヴァンは水中へ潜り込む。

「ガボッ」

くそつ、抜けねえ！コイツ痛くねえのか！？歯ぐきに剣刺さつてんのに！

水中を縦横無尽に泳ぎ回るゼッドヴァンはレストショランを捕らえたまま。

魔法を撃つにも手が離せない。鳥神竜を召喚するにも詠唱出来ない

い。

「ガボボボッ！」

そろそろ苦しい！

そうかつ。あれだ！！

俺はプリズムに神経を集中させる。

ジジジジジッ

バシュー！…という音と共にプリズムから光が放たれる。

「オアアアギヤアア！…」

ドガツ！…とソイツの喉に当たると口を最大に開けて奇声を上げる。
解放された俺は急いで空気を求めて上昇する。

「オオオオオ！…」

怒ったであるソイツは口から魔法を放つ。それをレストショランで防ぎながら、空気を手指す。

早く、早く早くっ！…

「……がはつ！－！－！」

ゲホゴホと咳き込みながら上空へ上ると、ロウが飛んで来る。

『死んだかと思つたぞ』

助けに来いよ

「おのづかだ。田代は我に向かへて

『その方が良さそうだ』

「水といえば勿論ピアスだな……」。その前に、一発放つとくか

上空から水中へ切つ先を向けると俺は叫ぶ。

「、王誇よ来い、【レストラン】……」

レストランの斬撃は海の中のゼンブアンへと向かう。
そして詠唱を始める。

「『メルエノール』プリズムより生まれし水の鳥神竜、ピアス・メルエノール・リヴィア。今こそ時空を越え、我が元へ現れたまえ』」

„תְּתַתִּתְנַתְּתָנֵת...

天が唸り、空を黒雲が支配する。海が天へ向かつて水柱を上げる
とそれは段々と横に広がり、中から小さな翼と長い三本の尾が特徴
のドラゴンが現れた。

水の鳥神竜だ。^{ピアス}ピアスは他の鳥神竜と比べると基本能力は劣るが、
水中では最強。他の追撃を微塵も許さない。

『ガクフォンスにロウティス、久しぶりだね』

ついでにマイペースで楽観的。

『敵は…』

ザバア！

『あれね』

「ああ。予想外に速い上に水中じゃ不利なんでな。任せる」

『了解。すぐ終わらせるよ』

そういうとパサと翼をたたんでゼッヂ・ヴァンへと急降下するピアス。

ザブンッ

2つの巨体が水中へ沈むと辺りに水しぶきが飛び散る。

・・・

「アアアアアアアア！」

『オオオオオオオオオオ……』

発せられる奇声に無駄に返してみる。久々に召喚されたことが嬉しくつて、ついついネ? ビーセ、ガクフォンスとロウティスは「うるさい」とか言つてゐるんだろうね。

さてさて、僕の相手は……あーあー全く、はしたなく大口開いたやつてえ。

…僕が閉じさせたあげるよ。僕はね、陸よりも水中のが速く動けるんだよ。

相手を上回る速さで移動して思い切り横顔にパンチを食らわす。

「アギヤエアアアアア……」

しまつた。もつと開こちやつた。あは。

飛んで来た尾を、己の二本の尾で対応して口の中を光を溜める。

パリパリ……

ドンッ! と攻撃を放つとそれはものすごい速さでソイツに当たる。中々硬いウロコしてゐるね。

グンと移動して、真ん中の尾で横つ腹をぶつむしてみる。良かつた、今度は血が出た。…紫だけど。

一気に充满する紫に氣にせずそのままグリグリ尾で押すんだけど進まない。かつたいなー。

ガブツ

『いてつ』

あちやぢや。グリグリすることに氣取られて噛み付かれぢやつたよー。んー、どうしようか？地味に痛い。

十分じゃないけど一応遊んだし、もういつか。

プリズムを光らせて準備に入る。それを感じ取ったガクフォンスが上で詠唱する声がする。

「『全てのものを水と化せ』」

そう聞こえた瞬間、僕の体はゼッドヴァンの牙を逃れ水中へ溶け込む。

突然相手のいなくなつたゼッドヴァンは混乱しているようだつた。言い残すことは、ない？…ないねつ！

水中に溶け込んだ僕は範囲を選択してゼッドヴァンだけを水の力で囲む。

「呑みこめー・ピアス！【水冥想】…！」

スイメイソウ

ガクフォンスの声が聞こえると、技が発動する。

「ゴ「ゴ「ゴ「ゴ「オオウン」…

いつの間にか巨体は、僕一人になっていた。

・・・・・

『終わつたよー』

「『苦労さん』

「グル」

『何口ウティスしゃべつてくれんないの?』

「グル」

「さあ帰れピアス」

『ひどつ。僕がんばつたんだよ?』

「誰だすぐ終わらせるとか言つたやつは、遊びやがつて。俺は召喚してる間ずつと力使うんだよ」

『知つてるけどさー。…悪かつたつて帰る帰る。んじやねー』

「ああ

「グル」

ヒラヒラと手を振るとロウとグレスティースに乗つてメフィリアの元へ帰る。あ、思い出した。ハイウェイドとグレスティースの子

子どもの名前。

「メリシャン・リンド・ジエシーヌ・ワーパー・ハインドだ。ヴァルクがメリーッて呼んでたな、そういえば」「グルル」

…俺達の子どもの名前もいつか考えたいな。

討伐！・完

討伐！（後書き）

久しぶりに更新です。学校の宿題も更新しなきゃいけないんですけどねー…

もっとバトルものが書きたいんですけど、なんか良い案ないですかねー…

長々と連載中にしききましたが、他の作品に集中したいことつい
ともあり、完結にさせていただきます。

色々な番外編はちょこちょこ浮かんでいたのですが、あまりにも
ショートショート過ぎるのでJPはやめました。
処女作で、無駄な設定をダラダラ書いて、分からないうことだらけ
の中書いたものでしたが、書き直すとストーリーが変わってしまう
と思うのであの書き方で残しておきます。

長々と『異世界の王子様』に付き合つていただきありがとうございました。
よりしければ、他の作品も読んでもらってください^_^

本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6011m/>

異世界の王子様

2011年3月5日01時45分発行